青森県埋蔵文化財調査報告書　第 561 集

弥次郎窪遺跡Ⅲ
潟野遺跡Ⅳ

－一般国道 45 号洋野階上道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－

2016 年 3 月

青森県教育委員会

第561集

弥次郎窪遺跡Ⅲ・潟野遺跡Ⅳ

二〇一六・三

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書　第 561 集

弥次郎窪遺跡Ⅲ
潟 野 遺 跡 Ⅳ

－一般国道 45 号洋野階上道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－

2016 年 3 月

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書　第561集　『弥次郎窪遺跡Ⅲ・潟野遺跡Ⅳ』　正誤表

頁	行	誤	正
55	16	第24号ピットは、第193号土坑との重複関係から、縄文時代後期初頭以降のピットと考えられる。	誤りの箇所を削除する。

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、一般国道45号洋野階上道路建設事業に伴い、平成21・24・25・27年度に弥次郎窪遺跡、平成25・26年度に潟野遺跡の発掘調査を行いました。

弥次郎窪遺跡は、昭和63年度と平成８年度にも発掘調査を行っており、縄文時代早期から晩期、弥生時代前期・後期、奈良時代、平安時代の遺跡であることが判明しています。今回の調査においても、縄文時代後期初頭から前葉の遺構・遺物を主体に、晩期の竪穴住居跡などが確認されました。

潟野遺跡は、平成16・17・22・23年度にも発掘調査を行っており、縄文時代早期から晩期、弥生時代前期から後期、奈良時代、平安時代の遺跡であることが判明しています。今回の調査においても、縄文時代早期の竪穴住居跡や早期中葉の土器片などが確認されました。

今回の調査成果は、弥次郎窪遺跡と潟野遺跡の理解をより深めるものとなりました。

これらの調査成果が今後、埋蔵文化財の調査や八戸市をはじめとする周辺地域の歴史研究や文化財保護に活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたり、ご協力とご指導を賜りました関係各位に対し、心より感謝いたします。

平成２８年３月

青森県埋蔵文化財調査センター

所　長　三　上　盛　一

例　言

1　本書は、国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所による一般国道45号洋野階上道路建設事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成21・24・25・27年度に発掘調査を実施した八戸市弥次郎窪遺跡及び平成25・26年度に発掘調査を実施した潟野遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積は、弥次郎窪遺跡6,120㎡、潟野遺跡1,070㎡である。

なお、同事業に伴う弥次郎窪遺跡の発掘調査は、平成8年度にも実施しており、報告書は平成9年度に刊行している（青森県教育委員会1998『見立山（1）遺跡　弥次郎窪遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第238集）。潟野遺跡の発掘調査は、平成16・17・22・23年度にも実施しており、報告書は平成17・18・24年度に刊行している（青森県教育委員会2006『潟野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第412集、青森県教委員会2007『潟野遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第431集、青森県教育委員会2014『潟野遺跡Ⅲ　松ヶ崎遺跡Ⅳ　橋館遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第537集）。

2　各遺跡の所在地は、以下のとおりである。

弥次郎窪遺跡　青森県八戸市大字十日市字弥次郎窪　（青森県遺跡番号203140）

潟野遺跡　青森県八戸市大字是川字潟野　（青森県遺跡番号203242）

3　発掘調査及び整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所が負担した。

4　発掘調査から整理・報告書作成期間は、以下のとおりである。

弥次郎窪遺跡発掘調査期間　平成21年9月30日～同年10月28日
平成24年5月9日～同年6月29日
平成24年11月6日～同年11月16日
平成25年10月1日～同年11月15日
平成27年7月10日～同年7月15日

潟野遺跡発掘調査期間　平成25年5月22日～同年6月14日
平成26年11月25日～同年12月12日

整理・報告書作成期間　平成25年4月1日～平成28年3月31日

5　本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は、青森県埋蔵文化財調査センター神文化財保護主幹、野村文化財保護主幹、平山文化財保護主査が担当し、文末に執筆者名を記した。依頼原稿についても、同様とした。

6　発掘調査から整理・報告書作成において、以下の業務は委託により実施した。

放射性炭素年代測定　株式会社パレオ・ラボ
貝類と甲殻類同定　株式会社パレオ・ラボ
剥片石器の実測　株式会社アルカ、株式会社ラング
遺物写真撮影　シルバーフォト、フォトショップいなみ、有限会社無限

7　発掘調査成果の一部は、発掘調査報告会において公表されているが、これらと本書の内容が異なる場合は、正式報告として刊行する本書がこれらに優先する。

8　発掘調査及び整理・報告書作成における出土品・実測図・写真などは、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。

9　測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅹ系による。

10　発掘調査時の遺構名については、種類を示す略号と通し番号を付けた。略号は以下のとおりである。

SI 竪穴住居跡　SK 土坑　SV 溝状土坑　SR 埋設土器遺構　SN 焼土遺構　SP ピット

11　遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を付けた。

12　土層断面図には、水準点を基にした海抜標高を付けた。

13　基本土層と遺構内堆積土層の色調表記などには、『新版標準土色帖』を使用した。

14　本書に掲載した地形図（遺跡位置図）は、国土地理院発行の 25,000 分の 1 地形図「苫米地」・「新井田」を複写・加筆などして使用した。

15　挿図中の方位は、世界測地系の座標北を示している。

16　挿図の縮尺は、図ごとにスケールなどを付けた。

17　遺構実測図及び遺物実測図に使用した網掛けの指示は、図ごとに説明を付けた。

18　観察表における（　）内の数値は残存値、［　］内の数値は推定値、－は不明である。

19　遺物写真には、遺物実測図と共通の番号を付けた。縮尺は図版ごとに記載した。

20　発掘調査及び整理・報告書作成に際して、下記の機関と方々からご協力とご指導を得た（敬称略・五十音順）。

八戸市、八戸市教育委員会、宇部　則保、小保内　裕之、杉山　陽亮、村木　淳、横山　寛剛

目　次

序
例言

第１編　弥次郎窪遺跡Ⅲ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第１章　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第３節　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第２章　遺跡の環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第１節　遺跡の歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第２節　遺跡の基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第３章　検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第１節　平成21年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第２節　平成24年度Ａ区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第３節　平成24年度Ｂ区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
第４節　平成25年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
第５節　平成27年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
第４章　自然科学分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
第１節　放射性炭素年代測定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
第２節　弥次郎窪遺跡出土の貝類と甲殻類・・・・・・・・・・・・・・・74
第５章　総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77
写真図版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78

第２編　潟野遺跡Ⅳ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・115
第１章　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・115
第１節　調査に至る経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・115
第２節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・115
第３節　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・117
第２章　遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・124
第１節　遺跡の環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・124
第２節　遺跡の地質・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・124
第３章　検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・127
第１節　平成25年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・127
第２節　平成26年度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・143
第４章　総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・148
写真図版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・151
報告書抄録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・161

図版目次

第１編　弥次郎窪遺跡Ⅲ

図１　遺跡位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
図２　路線図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
図３　弥次郎窪遺跡遺構配置図 ・・・・・・・・・・・・・ 9
図４　平成24年度Ａ区基本土層 ・・・・・・・・・・・・・ 11
図５　平成21年度遺構配置図 ・・・・・・・・・・・・・・ 12
図６　土坑・溝状土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
図７　遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
図８　平成24年度Ａ区遺構配置図 ・・・・・・・・・・・・ 15
図９　土坑・焼土遺構・遺構内出土遺物 ・・・・・・・・・ 19
図10　遺構内出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
図11　遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
図12　遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
図13　遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
図14　平成24年度Ｂ区遺構配置図 ・・・・・・・・・・・・ 26
図15　基本土層 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
図16　土坑・焼土遺構・埋設土器遺構・ピット ・・・・・・ 35
図17　土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
図18　土坑・溝状土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
図19　遺構内出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
図20　遺構内出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
図21　遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
図22　遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
図23　平成25年度遺構配置図 ・・・・・・・・・・・・・・ 42
図24　第16号住居跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
図25　第17号住居跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
図26　土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
図27　土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57
図28　土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
図29　土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59
図30　土坑・溝状土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60
図31　遺構内出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61
図32　遺構内出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62
図33　遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
図34　遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66
図35　平成27年度遺構配置図 ・・・・・・・・・・・・・・ 67
図36　基本土層 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68
図37　土坑・溝状土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70

第２編　潟野遺跡Ⅳ

図38　遺跡位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 120
図39　路線図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 121
図40　調査区域図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 122
図41　Ｆ区遺構配置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 123
図42　基本土層図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 125
図43　平成25年度遺構配置図 ・・・・・・・・・・・・・ 126
図44　第２号竪穴住居跡 ・・・・・・・・・・・・・・・ 132
図45　第２号竪穴住居跡出土遺物 ・・・・・・・・・・・ 133
図46　第２号竪穴住居跡出土遺物 ・・・・・・・・・・・ 134
図47　土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 135
図48　柱穴・焼土跡・集石遺構 ・・・・・・・・・・・・ 136
図49　遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 137
図50　遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 138
図51　遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 139
図52　遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 140
図53　遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 141
図54　平成26年度遺構配置図 ・・・・・・・・・・・・・ 143
図55　土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 145
図56　遺構内出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 146
図57　遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 147

写真目次

第１編　弥次郎窪遺跡Ⅲ

写真１　平成21年度調査区全景・土坑・溝状土坑 ・・・・ 78
写真２　平成21年度遺構内出土遺物・遺構外出土遺物 ・・ 79
写真３　平成24年度Ａ区調査区完掘状況・基本土層・土坑 ・・ 80
写真４　平成24年度Ａ区土坑 ・・・・・・・・・・・・・ 81
写真５　平成24年度Ａ区土坑・焼土遺構 ・・・・・・・・ 82
写真６　平成24年度Ａ区遺構内出土遺物 ・・・・・・・・ 83
写真７　平成24年度Ａ区遺構外出土遺物 ・・・・・・・・ 84
写真８　平成24年度Ａ区遺構外出土遺物 ・・・・・・・・ 85
写真９　平成24年度Ｂ区調査区完掘状況 ・・・・・・・・ 86
写真10　平成24年度Ｂ区調査区遠景・調査前風景・
　　　　調査区北半完掘状況・基本土層 ・・・・・・・・ 87
写真11　平成24年度Ｂ区土坑 ・・・・・・・・・・・・・ 88
写真12　平成24年度Ｂ区土坑 ・・・・・・・・・・・・・ 89
写真13　平成24年度Ｂ区土坑 ・・・・・・・・・・・・・ 90
写真14　平成24年度Ｂ区土坑 ・・・・・・・・・・・・・ 91
写真15　平成24年度Ｂ区土坑・溝状土坑・焼土遺構 ・・・ 92
写真16　平成24年度Ｂ区焼土遺構・ピット・埋設土器遺構・
　　　　調査状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93
写真17　平成24年度Ｂ区遺構内出土遺物 ・・・・・・・・ 94
写真18　平成24年度Ｂ区遺構外出土遺物 ・・・・・・・・ 95
写真19　平成25年度第16号住居跡 ・・・・・・・・・・・ 96
写真20　平成25年度第17号住居跡 ・・・・・・・・・・・ 97
写真21　平成25年度土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・ 98
写真22　平成25年度土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・ 99
写真23　平成25年度土坑 ・・・・・・・・・・・・・・ 100
写真24　平成25年度土坑 ・・・・・・・・・・・・・・ 101
写真25　平成25年度土坑 ・・・・・・・・・・・・・・ 102
写真26　平成25年度土坑 ・・・・・・・・・・・・・・ 103
写真27　平成25年度土坑 ・・・・・・・・・・・・・・ 104
写真28　平成25年度土坑 ・・・・・・・・・・・・・・ 105
写真29　平成25年度土坑 ・・・・・・・・・・・・・・ 106
写真30　平成25年度第８号溝状土坑・第10号焼土遺構・
　　　　遺構内出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・ 107
写真31　平成25年度遺構内出土遺物 ・・・・・・・・・ 108
写真32　平成25年度遺構内出土遺物・遺構外出土遺物 ・・ 109
写真33　平成25年度遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・ 110
写真34　平成27年度調査区完掘状況・基本土層・土坑 ・・ 111
写真35　平成27年度土坑・溝状土坑 ・・・・・・・・・ 112

第２編　潟野遺跡Ⅳ

写真36　平成25年度調査区近景・作業風景 ・・・・・・ 151
写真37　平成25年度第２号竪穴住居跡 ・・・・・・・・ 152
写真38　平成25年度土坑・焼土遺構・集石 ・・・・・・ 153
写真39　平成25年度遺物出土状況 ・・・・・・・・・・ 154
写真40　平成25年度遺構内出土遺物 ・・・・・・・・・ 155
写真41　平成25年度遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・ 156
写真42　平成25年度遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・ 157
写真43　平成26年度調査区近景・土坑 ・・・・・・・・ 158
写真44　平成26年度遺構内出土遺物 ・・・・・・・・・ 159
写真45　平成26年度遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・ 160

第１編　弥次郎窪遺跡Ⅲ

第１編　弥次郎窪遺跡Ⅲ

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

当該事業に係る周知の埋蔵文化財包蔵地の取扱については、平成７年度に建設省東北建設局青森工事事務所（現国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所）から工事予定地内の埋蔵文化財包蔵地の有無について、青森県教育庁文化課（現青森県教育庁文化財保護課）に照会があり、路線内に所在する楢館遺跡・弥次郎窪遺跡・大開遺跡・新田遺跡・馬野遺跡について、事業者と文化課及び青森県埋蔵文化財調査センターによる現地踏査と協議が行われた。これにより、発掘調査の条件の整った遺跡から順次調査を実施することとなり、平成８年度から調査を行っている。

弥次郎窪遺跡は、平成８年度に埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施し、平成21年度以降も断続的に調査が行われた。また、未買収地などの取扱いについて、青森河川国道事務所と文化財保護課による協議が重ねられた。協議の結果を受け、埋蔵文化財調査センターが平成24年５月～６月・11月、平成25年10月～11月、平成27年７月に発掘調査を行い、洋野階上道路建設に係る調査を終了した。

本報告書の調査に係る事業者側からの土木工事等のための発掘に関する通知は、青森河川国道事務所長から平成21年９月18日付け国東整青二調第54号及び平成25年８月１日付け国東整青二調第24号で提出された。これを受けて青森県教育委員会教育長から、埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査の実施を平成21年10月９日付け青教文第868号及び平成25年８月26日付け青教文第864号で通知されている。

（中嶋）

第２節　調査の方法

１　発掘作業の方法

今回の調査は、平成８年度に当センターが調査を実施した区域の残存部分及び隣接地を対象としている。前回の調査では、縄文時代から弥生時代に至る遺構・遺物が検出されたため、当該期に重点をおいて調査を実施した。

[測量基準点・水準点の設置とグリッド設定]測量基準点と水準点は、本事業に伴って設置された用地幅杭を用いて、調査区内に任意杭を設置した。グリッドは平成８年度の調査に従って設定した。１辺を４ｍとし、名称は各グリッドの南から北方向にローマ数字とＡ～Ｔのアルファベットを組み合わせ、東から西方向に算用数字を付けて、その南東隅の組み合わせとした。

[基本土層]表土から順にローマ数字を付けた。

[表土等の掘削]平成８年度に実施された発掘調査及び平成24年度に文化財保護課が実施した試掘調査の結果、畑の耕作や道路敷設によって地形改変が行われている場所が多く、表土から遺構検出面までは遺物が希薄であったため、重機を使用して行った。

[遺物包含層の調査]上層から層位ごとに人力で掘削した。出土遺物の取り上げは、遺構及びグリッド一括を基本とし、出土状況に応じてトータルステーションを使用した。
[遺構の調査]検出順に略号と算用数字を組み合わせた遺構番号を付けた。検出された遺構は、半掘して堆積土の観察を行った。堆積土層には算用数字を付け、『新版標準土色帖』を基に色調などを記録した。平面図は株式会社 CUBIC 製遺構実測支援システムを使用して、トータルステーションによる測量で作成したが、土層断面図は簡易遣り方測量で縮尺 20 分の 1 の実測図を作成した。
[写真撮影]35 ㎜モノクロームと 35 ㎜カラーリバーサルの各フィルム及び有効画素数 1600 万画素以上のデジタルカメラを併用し、土層の堆積状況や遺構の完掘状況などについて記録した。

2　整理・報告書作成作業の方法

発掘調査は平成 21・24・25・27 年度と複数年に及ぶことから、調査年度ごとに整理・報告書作成作業を進めた。
[遺構名]調査では、調査年度及び調査区ごとに種類を示す略号と通し番号を付けたが、通し番号については平成 8 年度の調査で使用された遺構番号に継続するよう変更した。
[図面の整理]遺構の平面図は、トータルステーションによる測量で作成したため、整理作業ではこれを縮尺 20 分の 1 で図化し、簡易遣り方測量で作成した土層断面図と図面修正を行い、遺構配置図を作成した。
[写真の整理]35 ㎜モノクロームフィルムは、撮影順に整理してネガアルバムに収納し、35 ㎜カラーリバーサルフィルムは、遺構ごとに整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは、遺構ごとのフォルダに整理し、HDD 及び DVD-R に保存した。
[遺物の洗浄]洗浄ブラシを用いて、表面の摩耗に注意しながら、水で付着物を流し落とした。
[遺物の注記]遺物の取り上げに用いた遺物カードを基に、調査年度・遺跡名・出土地点・層位を略記した。
[報告書掲載遺物の選別]土器は遺構の時期と遺跡の継続期間の把握を目的に選別した。石器・石製品は、出土点数が少なかったので全て掲載した。土製品は風化などによる劣化や細片化が顕著であったことから、状態が良いものを選別した。
[遺物の観察と図化]個々の遺物を目視で観察して、遺物の特徴を適切に分かりやすく表現するように図化し、観察表を作成した。
[遺物の写真撮影]実測図では表現し難い材質感・立体感・遠近感・文様・製作時の加工痕や調整痕・使用痕などを忠実に再現し、細部が観察できるように留意して業者に委託した。
[遺構・遺物のトレースと版下作成]遺構・遺物の実測図やその他の挿図のトレースは、株式会社 CUBIC 製遺構実測支援システムとトレースくん及び Adobe 社製 Illustrator を使用してデジタルトレースを行った。実測図版・写真図版などの版下作成についても、Adobe 社製 Photoshop と Illustrator を使用してデジタルデータで作成した。
[遺構の検討]形状・規模・堆積土・出土遺物などから検討した。
[遺物の検討]出土状況や特徴などから検討した。

第3節　調査の経過

1　発掘作業の経過

発掘作業は平成21・24・25・27年度と複数年に及ぶことから、調査年度ごとに記載する。なお、平成24年度は調査を2回実施しており、調査区をA・B区とした。

平成21年度

発掘調査は1,700㎡を対象として、9月30日から10月28日までの発掘作業期間で実施した。

発掘調査体制は、以下のとおりである。

調査主体　青森県埋蔵文化財調査センター

所　長	新岡　嗣浩（平成23年3月退職）
次　長	工藤　　大（平成22年3月退職）
総務GM	木村　繁博（平成24年3月退職）
調査第一GM	成田　滋彦（平成24年3月退職、現文化財保護主幹）
文化財保護主幹	中村　哲也（発掘調査担当者、現青森県立郷土館　主任学芸主査）
文化財保護主事	澤田　恭平（発掘調査担当者、平成22年3月退職）

専門的事項に関する指導・助言

調査員　村越　　潔　国立大学法人　弘前大学名誉教授・故人（考古学）

調査員　関根　達人　国立大学法人　弘前大学人文学部准教授・現教授（考古学）

調査員　松山　　力　八戸市文化財審議委員（地質学）

発掘作業の経過は、以下のとおりである。

9月下旬　9月30日から発掘作業を開始し、環境整備後、表土の掘削を行った。

10月上旬　遺構検出を行い、遺構・遺物の分布が希薄であることを確認した。検出された遺構は、順次、精査を行った。

10月下旬　全ての調査が終了し、10月28日に調査器材などを搬出した。

平成24年度（A・B区）

A区の発掘調査は、1,130㎡を対象として、5月9日から6月29日までの発掘作業期間（松ヶ崎遺跡と楯館遺跡を含む）で実施した。B区の発掘調査は、390㎡を対象として、11月6日から11月16日までの発掘作業期間で実施した。

発掘調査体制は、以下のとおりである。

調査主体　青森県埋蔵文化財調査センター

所　長	柿崎　隆司（平成26年度退職　現文化財保護課主幹専門員）
次　長（総務GM）	高橋　雅人（現中南教育事務所　所長）
調査第一GM	中嶋　友文
文化財保護主査	野村　信生（A区発掘調査担当者、現文化財保護主幹）
文化財保護主査	小山　浩平（A区発掘調査担当者）
文化財保護主幹	神　　康夫（B区発掘調査担当者）
文化財保護主事	業天　唯正（B区発掘調査担当者、現文化財保護課）

専門的事項に関する指導・助言

調査員　藤沼　邦彦　前弘前大学教授（考古学）

調査員　上條　信彦　国立大学法人　弘前大学人文学部准教授（考古学）

調査員　佐々木辰雄　日本地質学会会員・故人（地質学）

発掘作業の経過は、以下のとおりである。

A区

5月下旬　5月22日から発掘作業を開始した。表土は平成21年度に除去されていることから、環境整備後、調査区東側から遺構検出を行った。

6月上旬　土坑やピットが検出されたが、遺構・遺物の分布が希薄であったため、調査終了予定を6月下旬とした。

6月下旬　全ての調査が終了し、6月29日に調査器材などを搬出した。

（野村）

B区

10月下旬　青森河川国道事務所、文化財保護課と調査前の打合せを行い、発掘作業の進め方等について確認した。

11月上旬　調査事務所等予定地に鉄板を敷設してから調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置、駐車場の整備等、事前の準備作業を行った。調査区では、重機を用いて表土除去を行った。

11月6日　発掘器材等を調査事務所、器材庫に搬入し、職員2名、補助員2名、発掘作業員9名の規模で発掘調査を開始した。まずは調査区内のうち重機で表土を除去した部分を人力でジョレンがけを行い、遺構確認を行った。

11月上～中旬　調査区北側には遺構が検出されなかったものの、南側に行くにしたがって土坑や焼土遺構などが検出され始める。堆積土の精査、遺物の精査を進め、南部浮石層や中撫浮石層の各層でも遺構確認を行った。

11月16日　調査器材・出土遺物・記録類等をトラックで搬出し、調査を終了した。その後、調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの撤去を行い、すべての作業を完了した。

（神）

平成25年度

発掘調査は、2,500㎡を対象として、10月1日から11月15日までの発掘作業期間で実施した。

発掘調査体制は、以下のとおりである。

調査主体　青森県埋蔵文化財調査センター

所　長	柿崎　隆司	（平成26年度退職　現文化財保護課主幹専門員）
次　長（総務GM）	高橋　雅人	（現中南教育事務所　所長）
調査第一GM	中嶋　友文	
文化財保護主幹	野村　信生	（発掘調査担当者）
文化財保護主査	佐藤　智生	（発掘調査担当者）

専門的事項に関する指導・助言

調査員　藤沼　邦彦　前弘前大学教授（考古学）

調査員　福田　友之　青森県考古学会会長（考古学）

調査員　松山　　力　日本地質学会会員（地質学）

発掘作業の経過は、以下のとおりである。

10月上旬　表土の掘削を先行し、10月1日に発掘調査器材などを現地に搬入した。環境整備後、調査区北東側から遺構検出を行った。

10月中旬　土坑を主体に竪穴住居跡などが検出され、順次、精査を行った。

10月下旬　調査区北東側の精査は完了し、調査区南西側の精査に移行した。

11月中旬　全ての調査が終了し、11月15日に調査器材などを撤出した。

平成27年度

発掘調査は400㎡を対象として、7月10日から7月15日までの発掘作業期間で実施した。

発掘調査体制は、以下のとおりである。

調査主体　青森県埋蔵文化財調査センター

所　長　　三上　盛一

次　長（総務GM）　川上　彰雄

調査第二GM　　川口　潤

文化財保護主査　　小山　浩平（発掘調査担当者）

専門的事項に関する指導・助言

調査員　藤沼　邦彦　前弘前大学教授（考古学）

調査員　福田　友之　青森県考古学会会長（考古学）

調査員　松山　　力　日本地質学会会員（地質学）

発掘作業の経過は、以下のとおりである。

7月上旬　擁壁の撤去に伴い、表土の掘削を行った。

7月中旬　7月10日に発掘調査器材などを現地に搬入した。環境整備後、遺構検出を行い、順次、精査に移った。全ての調査が終了し、7月15日に調査器材などを撤出した。

2　整理・報告書作成作業の経過

整理・報告書作成作業は、平成25年4月1日から平成28年3月31日までの期間で行った。

整理・報告書作成体制は、以下のとおりである。

整理主体　青森県埋蔵文化財調査センター

文化財保護主幹　神　　康夫（報告書作成担当者）

文化財保護主幹　野村　信生（報告書作成担当者）

文化財保護主査　小山　浩平

整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況などは、以下のとおりである。

平成25年度（平成21・24年度調査）

4～6月　図面・写真・出土遺物など、報告書作成に必要な基礎資料を整理し、図面の修正を行っ

た。遺物を選別し、拓本と実測を行った。

7～9月　図面のトレースを行い、土器の写真撮影は有限会社無限、石器はフォトショップいなみに委託して行った。

10～3月　図版作成と原稿執筆を行った。

平成26年度（平成25年度調査主体）

4～6月　図面・写真・出土遺物など、報告書作成に必要な基礎資料を整理し、図面の修正を行った。遺物を選別し、拓本と実測を行った。

7～9月　図面のトレースを行い、土器の写真撮影はシルバーフォト、石器はフォトショップいなみに委託して行った。

10～3月　図版作成と原稿執筆を行った。

平成27年度（平成27年度調査主体）

11～12月　図面・写真・出土遺物など、報告書作成に必要な基礎資料を整理し、図面の修正を行った。遺物を選別し、拓本と実測を行った。図版作成と原稿執筆を行い、報告書の割付と編集を行った。

1～3月　印刷業者を選定し、入札を行った。校正を経て報告書を刊行し、記録類・出土品を整理して収納した。

（野村）

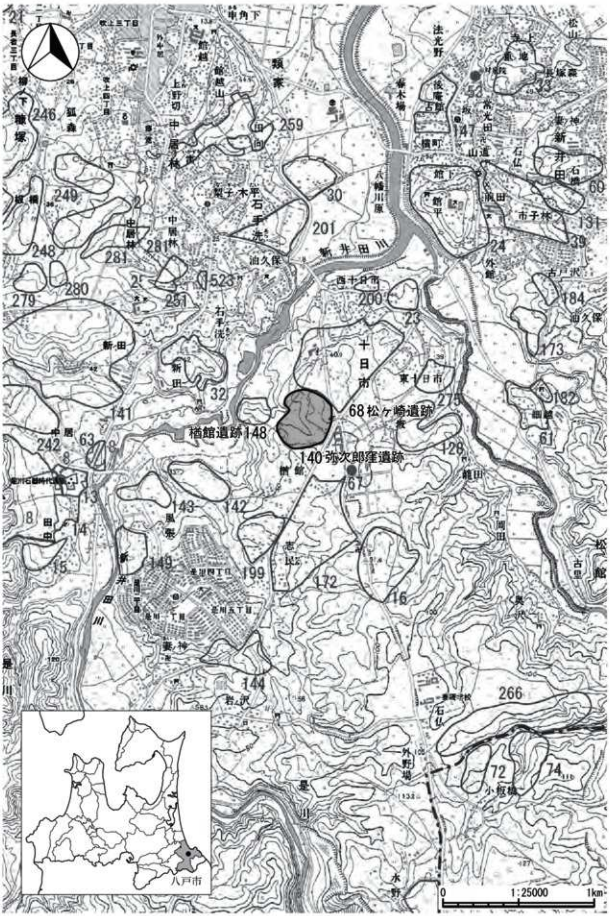

68松ヶ崎遺跡
148
140弥次郎窪遺跡
十日市
西十日市
東十日市
新井田川
新井田
八戸市
0
1:25000
1km

図１　遺跡位置図

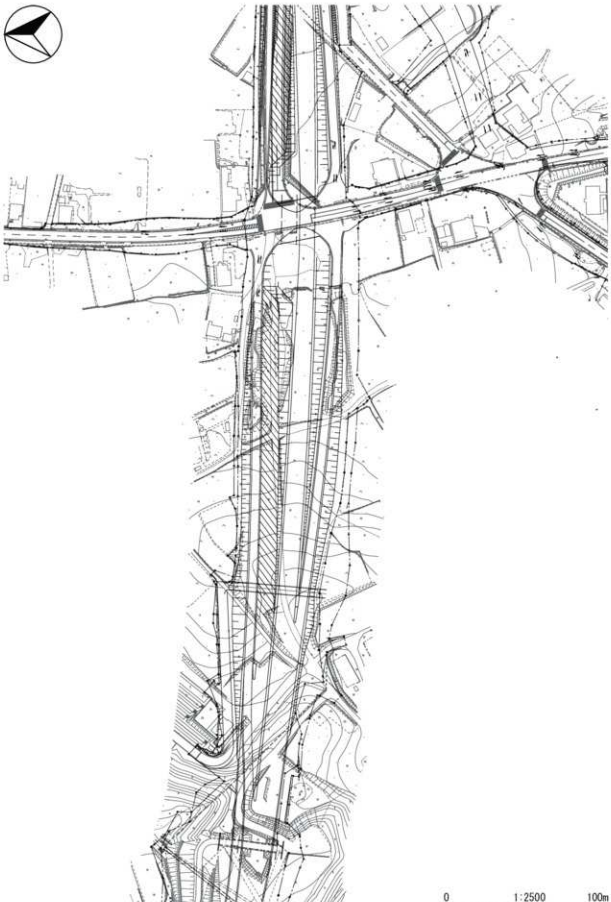


図２　路線図

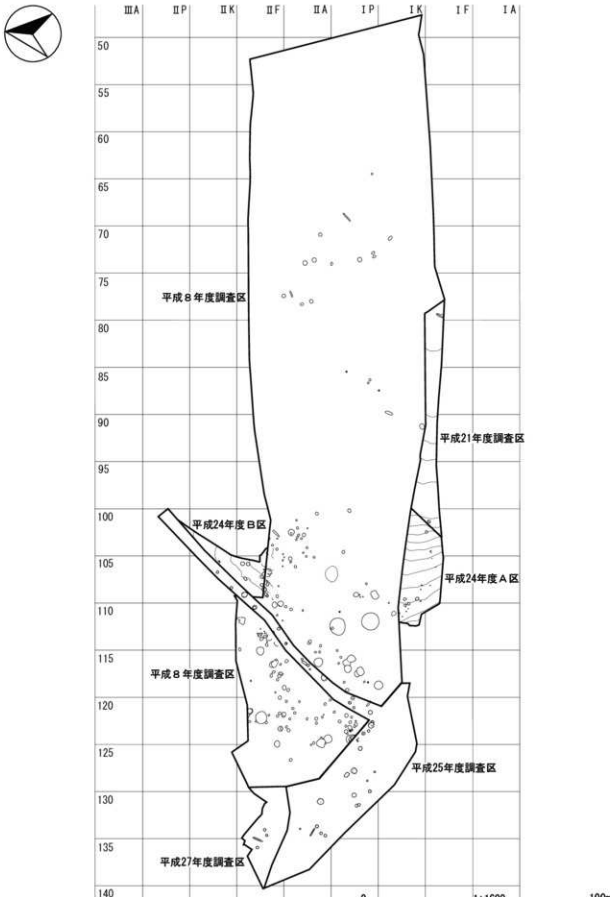


図３　弥次郎窪遺跡 遺構配置図

第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の歴史的環境

弥次郎窪遺跡は八戸市の中央部に位置し、八戸市庁から南東へ約４㎞の地点に所在している。遺跡は新井田川とその支流である松館川の合流地点付近、新井田川右岸に発達する高館段丘西縁の標高20～45ｍの緩斜面に立地している（図１）。

新井田川下流域には、多くの遺跡が分布しており、本遺跡の北側は松ヶ崎遺跡に接し、西側は橋館遺跡に近接している（図１）。松ヶ崎遺跡は、縄文時代早期から後期、奈良時代、平安時代の遺跡であり、遺跡の北西側には縄文時代中期後半、東側には縄文時代前期後半・中期末から後期前葉の遺構・遺物が密に分布している。中期には大規模な集落が形成されており、東北南部の大木式土器の流入をみることができる。橋館遺跡は、縄文時代早期から晩期、弥生時代前期･後期、奈良時代、平安時代、中世、近世の遺跡である。中世には三重の壕が巡る館跡が形成されており、縄文時代早期の落とし穴、縄文時代前期初頭の捨て場、縄文時代後期、弥生時代前期・後期、奈良時代、平安時代の竪穴住居跡などが検出されている。また、弥生時代前期の遠賀川系土器が出土しており、西日本との交流が示唆されている。これらの遺跡と本遺跡には、時期的な重なりがあり、相互の関わりが考慮される。

本遺跡は、県埋蔵文化財調査センターによって２回の発掘調査が実施されている。昭和63年(1988)に青森県立八戸商業高等学校野球場建設事業に伴い、平成８年（1996）には八戸南環状道路整備事業に伴って実施されている。その結果、縄文時代早期から晩期、弥生時代前期・後期、奈良時代、平安時代の遺跡であることが判明している。昭和63年には、遺跡の南東側を調査しており、縄文時代後期初頭と考えられるテラスを持つ竪穴住居跡や北西－南東方向に列状に配置する土坑群などが検出されている。土坑群は縄文時代中期末から後期初頭を主体に44基検出されており、それらの多くは墓であった可能性が指摘されている。また、この他に奈良時代の竪穴住居跡が２軒検出されており、縄文時代早期と考えられる環状石斧が１点出土している。平成８年には、遺跡の北側を調査しており、縄文時代後期初頭から前葉や弥生時代前期の竪穴住居跡、縄文時代中期中葉から後期前葉を主体に弥生時代前期などの土坑が検出されている。土坑は151基検出されており、墓や貯蔵穴などであったと考えられている。弥生時代前期には１点であるが、西日本との交流が示唆される遠賀川系土器の破片が出土しており、後期には念仏間式・天王山式・赤穴式土器の破片が散見される。

参考文献

青森県教育委員会 1989『弥次郎窪遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 128 集

青森県教育委員会 1998『見立山（１）遺跡 弥次郎窪遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 238 集

青森県教育委員会 2003『橋館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 342 集

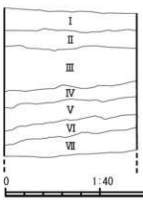
青森県教育委員会 2005『橋館遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 388 集

青森県教育委員会 2014『沼野遺跡Ⅲ 松ヶ崎遺跡Ⅳ 橋館遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 537 集

八戸市史編纂委員会 2009『新編 八戸市史 考古資料編』

第２節　遺跡の基本土層

遺跡の基本土層については、調査が複数年に渡って実施されていることから、不統一な部分がある。平成 21 年度・平成 24 年度Ａ区・平成 25 年度については、同一層とし本節に記載するが、平成 24 年度Ｂ区及び平成 27 年度については、第３章の各節に記載する。



Ⅰ層	10YR3/1黒褐色土	南部浮石1～8mm5%
Ⅱ層	10YR2/2黒褐色土	南部浮石1～6mm7%
Ⅲ層	10YR2/1黒色土	南部浮石1～3mm2%
Ⅳ層	10YR3/1黒褐色土	10YR4/4褐色土10%、南部浮石1～7mm5%
Ⅴ層	10YR4/4褐色土	10YR2/3黒褐色土20%、南部浮石1～10mm7%
Ⅵ層	10YR5/6黄褐色土	10YR4/2灰黄褐色土10%、南部浮石1～10mm7%
Ⅶ層	10YR6/8明黄褐色土	10YR5/2灰黄褐色土5%、南部浮石1～13mm10%

図４　平成24年度　Ａ区基本土層

平成 24 年度Ａ区西側のⅠ M-111 グリッドで確認しており、７層に分層した（図４）。Ⅰ・Ⅱ層は耕作土であり、Ⅲ層は黒色土を主体に、南部浮石が混入している。Ⅳ層は黒褐色土を主体に、褐色土や南部浮石が混入している。下位からは、縄文時代後期初頭から前葉と考えられる土器片などが出土しており、当該期の遺物包含層を形成していたと考えられる。Ⅴ層は褐色土を主体に、黒褐色土や南部浮石が混入する漸移層であり、主に遺構検出を行った層である。Ⅵ層は黄褐色土を主体に、灰黄褐色土や南部浮石が混入するローム層である。Ⅶ層は明黄褐色土を主体に、南部浮石や灰黄褐色土が混入している。

なお、遺跡の地形と地質については、既刊の報告書（青森県教育委員会 1998）に記載されているので、本報告書では重ねて記載しない。

（野村）

第３章　検出遺構と出土遺物

今回の調査は、平成８年度調査区の未調査部分と隣接地を対象としている（図３）。

調査区の標高は 28 ～ 43 ｍであり、東側から西側にかけて緩やかな斜面となっている。

検出された遺構は、住居跡２軒・土坑 55 基・溝状土坑４基・埋設土器遺構１基・焼土遺構５基・ピット 27 基であった。以下にこれらの詳細ついて、調査年度ごとに記載するが、平成 24 年度については、調査区ごとに分記した。

なお、遺構名については、調査年度及び調査区ごとに付けたが、整理作業において平成８年度の調査で使用された遺構名を継続した。調査時の遺構名については、旧遺構名として本文や表などに記載した。

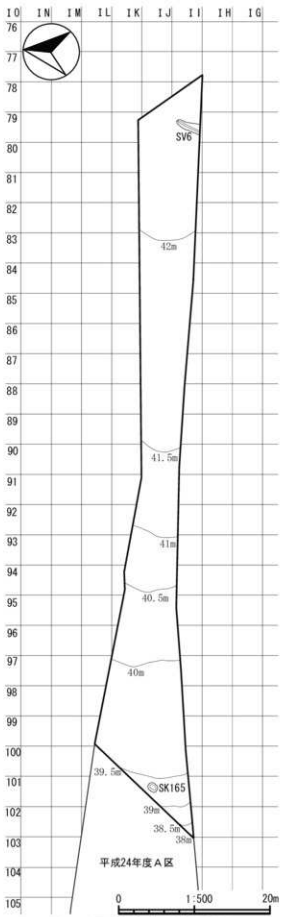


図５　平成21年度 遺構配置図

第１節　平成21年度

１　土坑

第165号土坑（図６、写真１）

[位置・確認]調査区西側の斜面、Ⅰ J-101 グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒褐色土の広がりとして検出した。

[構造]平面形状はやや不整な楕円形であり、断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸132㎝・短軸114㎝、深さは78㎝であった。

[堆積土]黒褐色シルトや暗褐色シルトを主体としており、全体的に草木根が多く、締まりが悪い。

[出土遺物]確認されなかった。

[小結]詳細は不明である。

２　溝状土坑

第６号溝状土坑（図６、写真１・２）

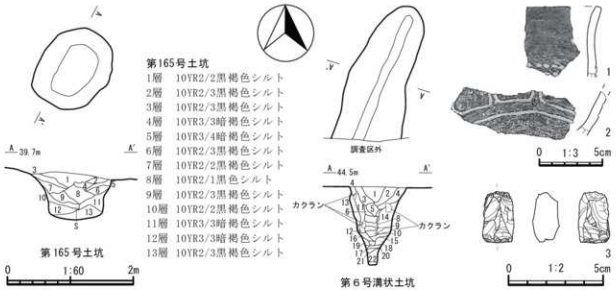
[位置・確認]調査区東側の平坦面、Ⅰ I-79 グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒褐色土の広がりとして検出した。

[構造]南側が調査区外に及ぶため、詳細は不明である。平面形状は細長い楕円形と推定され、断面は狭小の底面から壁が外傾する形状である。南壁際検出面の規模は短軸 102 ㎝、深さは 124 ㎝であった。

[堆積土]上位には黒褐色土、下位には黄褐色土が主体となって堆積し、南部浮石が混入している。壁際に崩落による堆積がみられることから、自然堆積と考えられる。

[出土遺物]縄文時代中期後葉から後期前葉と考えられる土器片などが数点出土した。１は中期後葉に位置づけられる最花式土器と考えられる深鉢の口頸部であり、口縁部はミガキによる幅広の無文帯となっている。頸部の下には、横位に連続する刺突が施されている。２は後期前葉に位置づけられる十腰内Ⅰ式土器と考えられる壺の胴部（底部付近）であり、沈線で施文されている。沈線間はナデによる無文となっている。３は頁岩を石材とした石核である。

[小結]詳細は不明であるが、形状から縄文時代の落とし穴と考えられる。



第6号溝状土坑

1層	10YR2/2黒褐色砂質シルト(中撮浮石10%母材)	10YR3/3暗褐色粘土質シルト5%,南部浮石1～2mm1%,土器片混
2層	10YR2/3黒褐色粘土質シルト	南部浮石1～2mm2%
3層	10YR2/3黒褐色シルト(中撮浮石母材)と10YR4/4褐色粘土質シルトとの混合土	南部浮石1～2mm1%,スコリア1%
4層	10YR3/4暗褐色粘土質シルトと10YR4/4褐色粘土質シルトとの混合土	南部浮石1～2mm3%
5層	10YR1.7/1黒色砂質シルト	10YR3/4暗褐色粘土質シルト7%,南部浮石1～2mm1%,礫混入
6層	10YR3/4暗褐色粘土質シルトと10YR6/6明黄褐色粘土質シルトとの混合土	南部浮石2～5mm1%
7層	10YR3/4暗褐色粘土質シルト	10YR2/3黒褐色粘土質シルト3%,南部浮石2～4mm
8層	10YR2/2黒褐色シルト	10YR4/4褐色粘土質シルトが塊状に7%
9層	10YR4/6褐色粘土質シルト	10YR8/2灰白色浮石1～2mm1%
10層	10YR2/3黒褐色粘土質シルトトと10YR5/8黄褐色シルト質火山灰との混合土	
11層	10YR4/6褐色粘土質シルト	南部浮石2～5mm2%
12層	10YR6/8明黄褐色砂質シルト	10YR6/8明黄褐色浮石5～10mm3%
13層	10YR4/6褐色粘土質シルト	10YR6/3にぶい黄橙色浮石2～5mm2%
14層	10YR5/8黄褐色シルト	10YR8/2灰白色浮石粒7%,南部浮石1～2mm1%
15層	10YR5/8黄褐色浮石	10YR2/2黒褐色シルトが粒状に3%
16層	10YR6/8明黄褐色浮石	10YR2/2黒褐色シルトが粒状に2%,スコリア1%
17層	10YR3/2黒褐色シルトと10YR6/8明黄褐色浮石1～3mmとの混合土	
18層	10YR5/8黄褐色浮石	10YR2/3黒褐色シルトが粒状に2%
19層	10YR5/8黄褐色粘土質シルト	10YR7/6明黄褐色浮石2～5mm3%
20層	10YR2/2黒褐色砂質シルト	10YR5/6黄褐色浮石1～2mm5%
21層	10YR2/2黒褐色シルトと10YR6/4にぶい黄橙色砂・10YR6/8明黄褐色浮石2～5mmとの混合土	スコリア2%
22層	2.5Y7/6明黄褐色火山灰1mmと10YR6/8明黄褐色浮石2～5mmとの混合土	10YR4/4褐色粘土質シルト2%

図６　土坑・溝状土坑

遺構内出土土器観察表

番号	遺構名	層位	時期	器種	外面特徴	内面特徴	備考
6-1	第6号溝状土坑	1層	縄文中期後葉	深鉢	ミガキ・刺突	ミガキ	海綿骨針混入
6-2	第6号溝状土坑	1層	縄文後期前葉	壺	ナデ・沈線	ミガキ	

遺構内出土石器観察表

番号	遺構名	層位	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
6-3	第6号溝状土坑	5層	石核	頁岩	27	17	16	8.6	

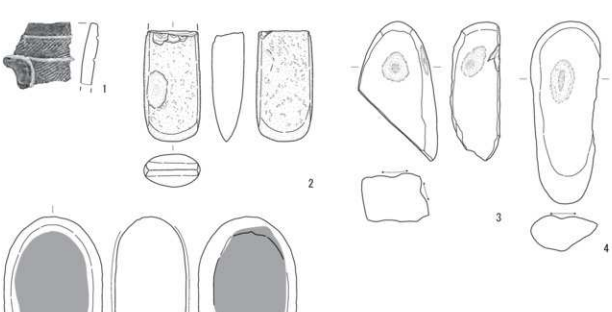


図７　遺構外出土遺物

遺構外出土土器観察表

番号	出土地点	層位	時期	器種	外面特徴	内面特徴	備考
7-1	ⅠJ-80	Ⅰ層	縄文後期初頭	深鉢	ナデ→LR横→沈線→ナデ	ナデ	波状口縁の可能性あり

遺構外出土石器観察表

番号	出土地点	層位	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
7-2	ⅠI-90	Ⅱ層	磨製石斧	凝灰岩	(89)	45	26	(189.5)	基部欠損
7-3	ⅠJ-80	Ⅲ層	敲石	砂岩	111	64	40	331.7	
7-4	ⅠI-90	Ⅱ層	敲石	砂岩	147	56	35	328.5	
7-5	ⅠK-95	Ⅰ層	磨石	閃緑岩	125	79	57	874	

３　遺構外出土遺物

出土量は少なく、段ボール箱１箱に満たなかったが、調査区東側の第６号溝状土坑と調査区中央部ⅠJ-87グリッド周辺にやや集中する傾向がみられる。出土遺物の大半は土器片であり、その他には石器が数点出土したのみである。土器片は風化などによる劣化と細片化が著しく、詳細は不明瞭である。

土器（図７、写真２）

１は縄文時代後期初頭と考えられる深鉢の口縁部である。沈線で施文されており、沈線間はLRの地文とナデによる無文帯となっている。

石器（図７、写真２）

礫石器のみで磨製石斧・敲石・磨石が出土した。

２は磨製石斧で凝灰岩を石材としている。基部は欠損しており、表面は風化などによるものか、劣化が顕著である。３・４は敲石で砂岩を石材としている。３は割れ面と自然面の側縁に敲きの痕跡がみられる。５は磨石で閃緑岩を石材としている。磨り面は楕円形に広がっており、光沢がみられる。

（野村）

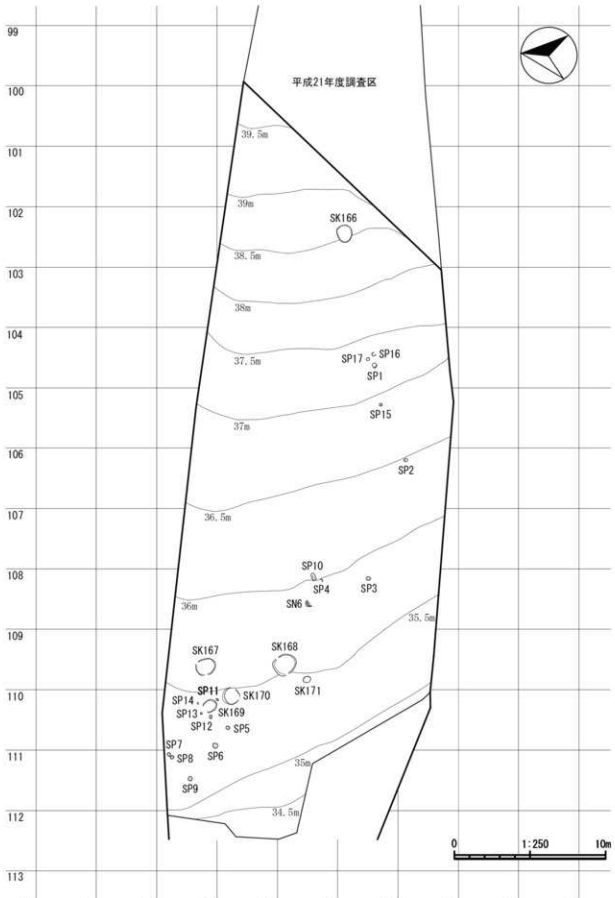


図８　平成24年度　Ａ区遺構配置図

第２節　平成 24 年度Ａ区

１　土坑

第 166 号土坑（図９、写真３・６）旧 SK １

[位置・確認]調査区東側の斜面、Ⅰ J-102 グリッドに位置しており、Ⅵ層（ローム層）で黒褐色土の広がりとして検出した。

[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸 114 ㎝・短軸 104 ㎝、深さは 28 ㎝であった。

[堆積土]黒褐色土を主体に、南部浮石が混入している。

[出土遺物]縄文時代後期初頭から前葉と考えられる数点の土器片などが出土した。１は深鉢の口縁部であり、口縁は折り返しとなっている。折り返された部分には、LR が横方向に施されており、その下は縦方向を主体に施されている。また、一般的に補修孔とされる穿孔がみられ、外面には煤の付着が顕著である。

[小結]詳細は不明である。

第 167 号土坑（図９、写真４・６）旧 SK ２

[位置・確認]調査区西側の斜面、Ⅰ M-109 グリッドに位置しており、Ⅵ層（ローム層）で黒色土の広がりとして検出した。

[構造]平面形状は楕円形であり、断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸 134 ㎝・短軸 108 ㎝、深さは 23 ㎝であった。

[堆積土]黒色土を主体に、南部浮石が混入している。

[出土遺物]縄文時代後期前葉から弥生時代前期と考えられる土器片などが数点出土した。２は深鉢の口縁部であり、沈線が横位に３条施され、沈線間はミガキによる無文帯となっている。沈線のみの破片であり、詳細な時期は判断し難いが、弥生時代前期と考えられる。３はミニチュア土器である。壺・鉢類の底部であり、幅１㎜の細い沈線が円形状に施文されている。文様から縄文時代後期前葉に位置づけられる十腰内Ⅰ式土器と考えられる。

[小結]詳細は不明である。

第 168 号土坑（図９、写真４・６）旧 SK ３

[位置・確認]調査区西側の斜面、Ⅰ K-109・Ⅰ L-109 グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒褐色土の広がりとして検出した。

[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸 154 ㎝・短軸 130 ㎝、深さは 24 ㎝であった。

[堆積土]黒褐色土を主体に、南部浮石や炭化物が混入している。

[出土遺物]縄文時代後期初頭から前葉と考えられる土器片などが、南東側を主体に散在した状況で出土した。同一個体と考えられる５点の土器片を図示したが、破片が少なく復元することはできなかった（４）。深鉢の口縁部から底部であり、R 単軸絡条体が縦方向に施されている。

[小結]同一個体の土器片が散在した状況で出土したことから、土器片は土坑に廃棄されたものと考えられる。廃棄された時期は、土器片から縄文時代後期初頭から前葉と考えられる。

第 169 号土坑（図９・10、写真４・６）旧 SK ４

[位置・確認]調査区西側の斜面、Ⅰ M-110 グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒色土や黒褐色土の広がりとして検出した。

[構造]北側はトレンチャーによって削平されているが、平面形状はやや不整な楕円形と推定される。断面はほぼ平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸 84 ㎝以上・短軸 78 ㎝、深さは 22 ㎝であった。

[堆積土]黒色土や黒褐色土を主体に、南部浮石や炭化物が混入している。

[出土遺物]縄文時代後期初頭から前葉と考えられる土器片などが、散在した状況で出土した。土器片は２種類確認されており、１種類はＲ単軸絡条体が施された２片、もう１種類は底部を欠損するが、ほぼ１個体を形成するものであった。後者を図示したが、細片化が著しく復元により全体を明確にすることはできなかった（図 10－５）。５は折返口縁の深鉢である。口縁部にはＬが横方向に施されており、体部には縦方向を主体に施されている。同６はミニチュア土器で鉢の口縁部である。内外面はナデによって調整されている。

[小結]同一個体の土器片が散在した状況で出土したことから、土器片は土坑に廃棄されたものと考えられる。廃棄された時期は、土器片から縄文時代後期初頭から前葉と考えられる。

第 170 号土坑（図９・10、写真５・６）旧 SK ５

[位置・確認]調査区西側の斜面、Ⅰ L-109・110 グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒褐色土の広がりとして検出した。

[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面は底部が若干張り出す形状である。検出面の規模は長軸 102 ㎝・短軸 98 ㎝、深さは 56 ㎝であった。

[堆積土]黒褐色土や黒色土を主体に、南部浮石や炭化物が混入している。

[出土遺物]縄文時代後期初頭から前葉と考えられる土器片などが数点出土した。図 10－７は深鉢の胴部であり、Ｒ単軸絡条体が縦方向に施されている。

[小結]詳細は不明である。

第 171 号土坑（図９・10、写真５・６）旧貝出土範囲

[位置・確認]調査区西側の斜面、Ⅰ K-109 グリッドに位置しており、Ⅳ層（黒褐色土）で貝殻の広がりとして検出した。

[構造]平面形状は西側が不整であるが、本来は円形であったと推定される。断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸 53 ㎝・短軸 42 ㎝、深さは 10 ㎝であった。

[堆積土]貝殻や灰黄褐色土を主体に、炭化物が混入している。貝殻は白色で赤みを帯びるものも多くみられ、土坑内に重層的に堆積している。

[出土遺物]土坑とその周辺から、縄文時代後期初頭から前葉と考えられる深鉢の破片が４点出土した。

これらは同一個体と考えられ、うち２点が接合関係にある。図10－８ａは口頸部で土坑西側の隣接地、同８ｂ・８ｃは胴部（底部付近）で前者が底面と隣接地、後者は１層から出土した。体部には、Ｒ単軸絡条体第５類が縦方向に施され、網目状となっている。

[自然科学分析]放射性炭素年代測定と貝類及び甲殻類の同定を行った。放射性炭素年代測定は、2254-2012calBC の暦年代範囲であり、縄文時代後期前葉に相当する結果であった（詳細は第４章第１節参照）。貝類及び甲殻類の同定では、貝類はイガイ・チヂミボラ・海産微小巻貝・陸産微小巻貝、甲殻類はフジツボ類が確認された（詳細は第４章第２節参照）。

[小結]貝殻を廃棄した土坑と考えられ、時期は放射性炭素年代測定の結果から、縄文時代後期前葉と考えられる。

２　焼土遺構

第６号焼土遺構（図９、写真５）旧 SN 1

[位置・確認]調査区西側の斜面、Ⅰ K-108 グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で焼土の広がりとして検出した。

[構造]南側はトレンチャーに削平されているが、平面形状はやや不整な円形と推定される。断面は底面から壁が外傾する形状である。Ａ土層での規模は、開口部 48 ㎝・深さ 18 ㎝であった。

[堆積土]橙色焼土や黒褐色土を主体に、南部浮石が混入している。

[出土遺物]確認されなかった。

[小結]詳細は不明であるが、焼土を廃棄した土坑と考えられる。

３　ピット（図８・10、写真６）

[位置・確認]調査区西側を中心に、Ⅴ層（漸移層）からⅥ層（ローム層）で検出した。17 基検出しており、第 169 号土坑の周辺に密に分布している。

[構造]平面形状は第 10 号ピットが楕円形で、以外は円形である。規模は観察表のとおりである。

[堆積土]観察表のとおりで、混入物に南部浮石や炭化物がみられる。

[出土遺物]第７号ピットの底部から、縄文時代後期初頭から前葉と考えられる土器片が１点出土した（図10－９）。深鉢の胴部であり、ミガキによる無文となっている。

[小結]詳細は不明である。

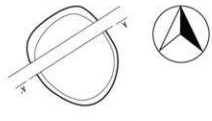
ピット観察表

遺構名	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	堆積土	旧遺構名
第1号ピット	30	28	49	10YR3/4暗褐色土	SP1
第2号ピット	28	22	28	10YR2/2黒褐色土	SP2
第3号ピット	32	26	7	10YR3/4暗褐色土	SP3
第4号ピット	－	18	15	10YR2/2黒褐色土	SP4
第5号ピット	26	22	26	10YR2/3黒褐色土	SP5
第6号ピット	36	33	24	10YR3/3暗褐色土	SP6
第7号ピット	26	22	24	10YR2/1黒色土	SP7
第8号ピット	26	22	13	10YR2/1黒色土	SP8
第9号ピット	31	28	23	10YR2/1黒色土	SP9
第10号ピット	50	26	23	10YR2/2黒褐色土	SP10
第11号ピット	18	14	16	10YR4/3にぶい黄褐色土	SP11
第12号ピット	26	18	18	10YR2/2黒褐色土	SP12
第13号ピット	14	12	10	10YR2/2黒褐色土	SP13
第14号ピット	－	12	10	10YR2/2黒褐色土	SP14
第15号ピット	20	20	13	10YR3/3暗褐色土	SP15
第16号ピット	－	24	10	10YR3/2黒褐色土	SP16
第17号ピット	24	20	23	10YR3/2黒褐色土	SP17

※長軸・短軸は検出面の計測値、堆積土は検出面の主体土、－は不明。

第166号土坑

第167号土坑



第168号土坑

第166号土坑

1層	10YR2/3黒褐色土	南部浮石1～10mm3%
2層	10YR4/4褐色土	南部浮石1～10mm5%
3層	10YR3/3暗褐色土	南部浮石1～2mm1%
4層	10YR4/6褐色土	10YR2/2黒褐色土30%、南部浮石1～10mm5%

第167号土坑

1層	10YR1.7/1黒色土	南部浮石1～5mm3%

第168号土坑

1層	10YR2/2黒褐色土	南部浮石1～10mm5%、炭化物1～15mm1%

第169号土坑

1層	10YR2/1黒色土	南部浮石1～3mm2%、炭化物1～10mm1%
2層	10YR2/2黒褐色土	南部浮石1～5mm2%

第170号土坑

1層	10YR2/2黒褐色土	南部浮石1～10mm2%、炭化物4～6mm1%
2層	10YR2/3黒褐色土	南部浮石1～10mm1%
3層	10YR3/4暗褐色土	10YR5/6黄褐色土30%、南部浮石1～8mm7%
4層	10YR2/1黒色土	南部浮石1～6mm1%

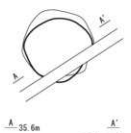
第171号土坑

1層	貝殻	
	10YR2/2黒褐色土	9%、炭化物5～10mm1%
2層	10YR6/2灰黄褐色土	

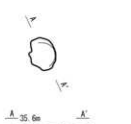
第6号焼土遺構

1層	5YR7/8橙色焼土	南部浮石1～4mm2%
2層	5YR7/8橙色焼土	南部浮石1～3mm3%
3層	10YR3/2黒褐色土	南部浮石1～5mm7%
4層	10YR2/1黒色土	南部浮石1～3mm1%

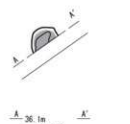
第169号土坑



第170号土坑



第171号土坑



第６号焼土遺構

焼土範囲

図９　土坑・焼土遺構・遺構内出土遺物

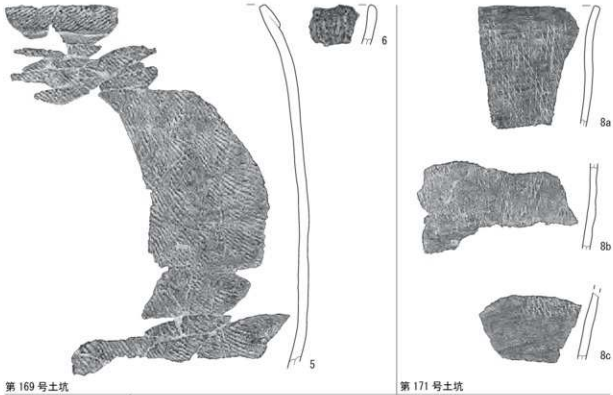


図10　遺構内出土遺物

遺構内出土土器観察表

番号	遺構名	時期	器種	層位	外面特徴	内面特徴	備考
9-1	第166号土坑	縄文後期前半	深鉢	1層	折返口縁(LR横)、LR縦・斜、煤付着	ミガキ	補修孔、金雲母混入
9-2	第167号土坑	弥生前期	深鉢	1層	沈線→ミガキ	ミガキ	
9-4a	第168号土坑 Ⅰ K-110	縄文後期前半	深鉢	1層 Ⅰ層	R単軸絡条体縦、煤付着	ミガキ	金雲母混入
9-4b	第168号土坑	縄文後期前半	深鉢	1層	R単軸絡条体縦、煤付着	ミガキ	金雲母混入
9-4c	第168号土坑	縄文後期前半	深鉢	1層	R単軸絡条体縦、煤付着	ミガキ	金雲母混入
9-4d	第168号土坑	縄文後期前半	深鉢	1層	ミガキ、煤付着	ミガキ	金雲母混入
9-4e	第168号土坑	縄文後期前半	深鉢	1層	ナデ底	ナデ	金雲母混入
10-5	第169号土坑 Ⅰ M-110	縄文後期前半	深鉢	1層 Ⅱ層	折返口縁(L横)、L縦・斜	ミガキ	金雲母混入
10-7	第170号土坑	縄文後期前半	深鉢	4層	R単軸絡条体縦	ミガキ	
10-8a	第171号土坑付近	縄文後期前半	深鉢	Ⅳ層	R単軸絡条体5縦→口縁部ミガキ	ミガキ	金雲母混入
10-8b	第171号土坑号 第171号土坑号付近	縄文後期前半	深鉢	底面 Ⅳ層	R単軸絡条体5縦→底部ミガキ、煤付着	ミガキ	金雲母混入
10-8c	第171号土坑	縄文後期前半	深鉢	1層	R単軸絡条体5縦→底部ミガキ	ミガキ	金雲母混入
10-9	第7号ピット	縄文後期前半	深鉢	1層	ミガキ、煤付着	ミガキ	

遺構内出土土製品観察表

番号	遺構名	層位	種類	外面特徴	内面特徴	備考
9-3	第167号土坑	1層	ミニチュア土器	ナデ・沈線、ナデ底	ナデ	底径2.8cm、金雲母混入
10-6	第169号土坑	1層	ミニチュア土器	ナデ	ナデ	

４　遺構外出土遺物

出土総数は少なく、段ボール箱１箱であった。遺物の多くは、遺構が検出された調査区西側に散在しており、耕作土である上位層から多く出土している。出土遺物の大半は土器片であったが、石器・土製品・石製品も出土しており、土器片は風化などによる劣化や細片化が顕著であった。

土器（図 11、写真７）

縄文時代早期中葉・後期初頭から前葉、弥生時代前期と考えられる破片が出土しており、縄文時代後期初頭から前葉を主体としている。

１は縄文時代早期中葉の沈線・貝殻文系土器である。深鉢の胴部であり、沈線と貝殻腹縁の押圧によって文様が構成されている。

２～10は縄文時代後期前葉に位置づけられる十腰内Ⅰ式土器と考えられる。７は壺の胴部、以外は鉢・深鉢類であり、２～６は口縁部や口頸部、８～10は胴部である。２は頂部が押圧された波状口縁であり、幅１㎜の細い沈線が弧状に施文されている。３は頂部に刻みが施された波状口縁であり、沈線が弧状に施文されている。４・５は幅１㎜の細い沈線が格子状に施文されている。４と５は胎土や色調が似ており、同一個体の可能性も考えられる。６～10は沈線で施文されており、沈線間はミガキによる無文となっている。

11～17は縄文時代後期初頭から前葉と考えられる。11は壺・鉢類の口縁部、以外は深鉢であり、12・13・15は口縁部、14・16は胴部、17は底部である。11は波状口縁に沿って２条の沈線が施されており、沈線間はLの地文、その下はミガキによる無文となっている。12～16は単軸絡条体が施され、網目状の文様となっている。15は折返口縁であり、折り返された部分は、ミガキによる無文帯となっている。17は底径 10 ㎝と推定され、底面は雑なミガキによって調整されている。

18・19は弥生時代前期と考えられる。18は浅鉢類の口頸部であり、波状口縁の頂部には刺突が施されている。外面には変形工字文を構成すると考えられる沈線が施されており、内面には１条の沈線が横位に施されている。19は壺・甕類の胴部であり、外面にはLRが縦方向に施されている。内面はナデによって調整されているが、接合痕が明瞭に残っている。

石器（図 12、写真８）

剥片石器は石鏃・石錐・削器・両極剥片、礫石器は磨製石斧・磨石・半円状扁平打製石器・礫器・石錘が出土している。

20～23は石鏃である。20は無茎鏃で珪質頁岩を石材としている。21は珪質頁岩を石材としており、基部は欠損している。22･23は有茎鏃であり、22は珪質頁岩、23は玉随質珪質頁岩を石材としている。24は石錐で珪質頁岩を石材としている。25～28は削器で珪質頁岩を石材としている。29は両極剥片で鉄石英を石材としている。

30は磨製石斧の基部で緑色凝灰岩を石材としている。31は磨石で球状の黒色凝灰岩を石材としており、側縁に磨り痕がみられる。32は半円状扁平打製石器で粘板岩を石材としている。33・34は扁平な粘板岩を石材とする礫器であり、34は長軸が欠損している。35は扁平な砂岩を石材とする石錘であり、３辺の側縁が打ち欠かれている。

石製品（図12、写真８）

円盤状石製品１点のみの出土である(36)。扁平な頁岩を石材とし、側縁を打ち欠いて整形している。

土製品（図13、写真８）

ミニチュア土器・円盤状土製品・焼成粘土塊が出土している。

37～42はミニチュア土器である。37は壺・鉢類の胴部であり、幅1.5㎜の沈線で施文されている。沈線間はナデによる無文となっている。38は壺の胴部であり、沈線とナデによる無文で文様が構成されている。37・38は縄文時代後期前葉に位置づけられる十腰内Ⅰ式土器と考えられる。39は鉢・浅鉢類の胴部である。幅2.5～３㎜の沈線が横位に重層的に施されており、僅かであるが赤色物質が付着している。細片であることから、詳細な時期は判断し難いが、縄文時代晩期の範疇と考えられる。40は壺の口頭部である。口縁部はミガキによる無文となっており、頭部には幅１㎜の粗雑な沈線が横位に施されている。41・42は壺・鉢類の底部であり、41にはLRが斜方向に施されている。40～42は縄文時代後期から晩期、弥生時代前期の範疇と考えられるが、細片であることから、詳細な時期は不明である。

43は土器片を再加工した円盤状土製品である。R単軸絡条体第５類が施され、網目状の文様となっている。時期は縄文時代後期初頭から前葉と考えられる。

44・45は焼成粘土塊であり、指で捏ねて整形したようである。

（野村）

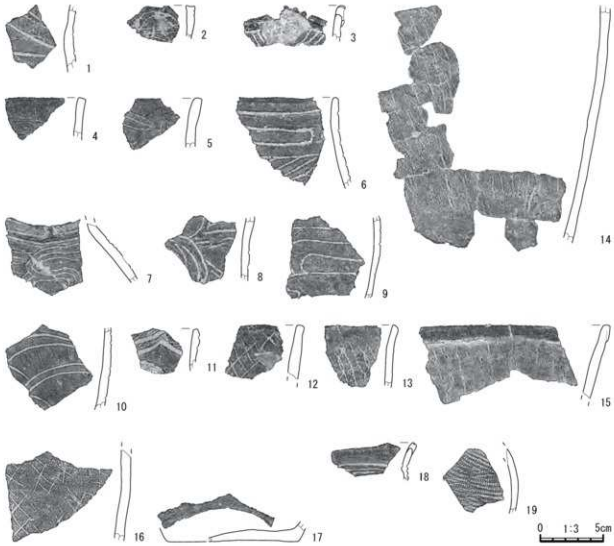


図 11　遺構外出土遺物

遺構外出土土器観察表

番号	出土地点	層位	時期	器種	外面特徴	内面特徴	備考
11-1	Ⅰ L-106	Ⅱ層	縄文早期中葉	深鉢	ナデ・沈線・貝殻腹縁押圧	ナデ	
11-2	Ⅰ M-111	Ⅱ層	縄文後期前葉	鉢・深鉢類	波状口縁（頂部押圧）、ナデ・沈線	ナデ	
11-3	Ⅰ K-110 Ⅰ M-111	Ⅱ層 カクラン	縄文後期前葉	鉢・深鉢類	波状口縁（頂部刻み）、ナデ・貼付隆帯（ナデ）→沈線	ミガキ	
11-4	Ⅰ M-110	Ⅱ層	縄文後期前葉	鉢・深鉢類	ミガキ・沈線	ミガキ	金雲母混入
11-5	Ⅰ M-111	Ⅰ層	縄文後期前葉	鉢・深鉢類	ミガキ・沈線	ミガキ	金雲母混入
11-6	Ⅰ N-111	Ⅱ層	縄文後期前葉	鉢・深鉢類	ミガキ・沈線、煤付着	ミガキ	金雲母混入
11-7	Ⅰ L-111	Ⅱ層	縄文後期前葉	壺	ミガキ・沈線	ミガキ	金雲母混入
11-8	Ⅰ M-111	Ⅱ層	縄文後期前葉	鉢・深鉢類	沈線→ミガキ	ミガキ	金雲母混入
11-9	Ⅰ M-111	Ⅱ層	縄文後期前葉	鉢・深鉢類	沈線→ミガキ	ミガキ	
11-10	Ⅰ L-110	Ⅱ層	縄文後期前葉	鉢・深鉢類	ミガキ・沈線	ミガキ	海綿骨針混入
11-11	Ⅰ I-108	Ⅰ層	縄文後期前半	壺・鉢類	波状口、L横→沈線→ミガキ	ミガキ	海綿骨針混入
11-12	Ⅰ J-110	Ⅱ層	縄文後期前半	深鉢	R単軸絡条体5縦	ミガキ	
11-13	Ⅰ K-109	Ⅰ層	縄文後期前半	深鉢	R単軸絡条体5縦	ナデ	海綿骨針混入
11-14	Ⅰ M-111	Ⅱ層	縄文後期前半	深鉢	R単軸絡条体縦	ミガキ	金雲母混入
11-15	Ⅰ I-108 Ⅰ M-111	Ⅱ層	縄文後期前半	深鉢	折返口縁（ミガキ）,R単軸絡条体縦	ミガキ	金雲母・海綿骨針混入
11-16	Ⅰ M-111	Ⅳ層	縄文後期前半	深鉢	R単軸絡条体5縦	ミガキ	
11-17	Ⅰ M-111	Ⅱ層	縄文後期前半	深鉢	ミガキ、ミガキ底	ナデ	底径[10]cm
11-18	Ⅰ M-111	Ⅱ層	弥生前期	浅鉢類	波状口縁（頂部刺突）、ミガキ・沈線	ミガキ・沈線	
11-19	Ⅰ M-110	Ⅱ層	弥生前期	壺・甕類	LR縦	ナデ	

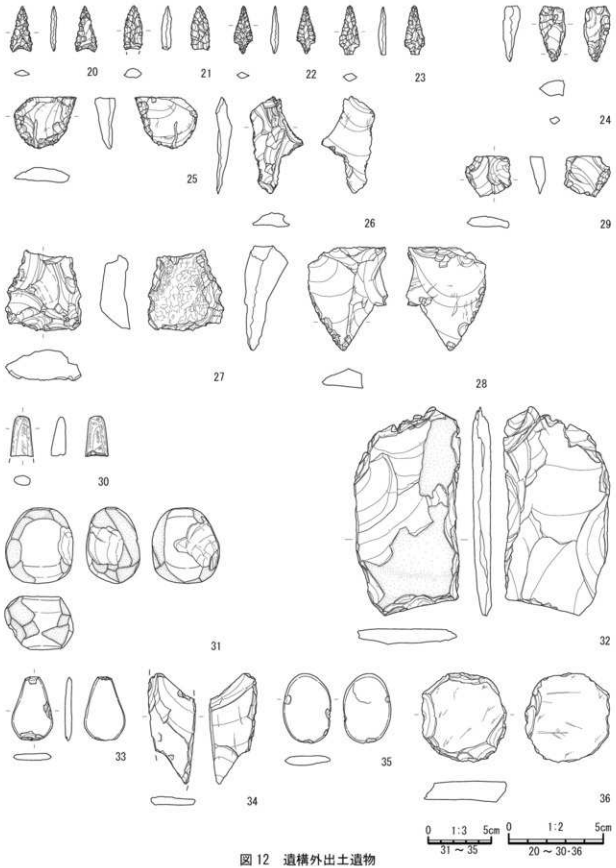

20
21
22
23
24
25
26
29
27
28
30
31
32
33
34
35
36
0 1:3 5cm
31 ～ 35
0 1:2 5cm
20 ～ 30-36

図 12　遺構外出土遺物

遺構外出土石器観察表

番号	出土地点	層位	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
12-20	Ⅰ J-107	Ⅲ層	石鏃	珪質頁岩	24	12	3	0.6	
12-21	Ⅰ M-111	Ⅱ層	石鏃	珪質頁岩	(23)	10	5	(1.3)	基部欠損
12-22	Ⅰ M-111	Ⅱ層	石鏃	珪質頁岩	25	10	4	0.6	
12-23	Ⅰ M-110	Ⅰ層	石鏃	玉随質珪質頁岩	26	10	4	0.9	
12-24	Ⅰ M-110	Ⅰ層	石錐	珪質頁岩	30	14	9	3.5	
12-25	Ⅰ M-110	Ⅰ層	削器	珪質頁岩	33	27	11	7.7	
12-26	Ⅰ L-102	トレンチャー	削器	珪質頁岩	51	28	8	6.2	
12-27	排土	－	削器	珪質頁岩	43	40	16	22.1	
12-28	Ⅰ K-107	Ⅱ層	削器	珪質頁岩	55	42	24	32.4	
12-29	排土	－	両極剥片	鉄石英	24	22	9	4.6	
12-30	Ⅰ I-106	Ⅱ層	磨製石斧	緑色凝灰岩	(22)	(12)	(7.5)	(3.1)	刃部欠損
12-31	Ⅰ J-102	Ⅱ層	磨石	黒色凝灰岩	61	55	43	242.3	
12-32	Ⅰ I-109	Ⅱ層	半円状扁平打製石器	粘板岩	167	86	14	295.4	
12-33	Ⅰ L-111	Ⅱ層	礫器	粘板岩	51	33	6	14	
12-34	Ⅰ J-109	Ⅱ層	礫器	粘板岩	(89)	(38)	(7)	(29.9)	欠損
12-35	Ⅰ M-111	Ⅱ層	石錘	砂岩	56	38	8	25.9	

遺構外出土石製品観察表

番号	出土地点	層位	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
12-36	Ⅰ M-111	Ⅱ層	円盤状石製品	頁岩	47	45	11	41	

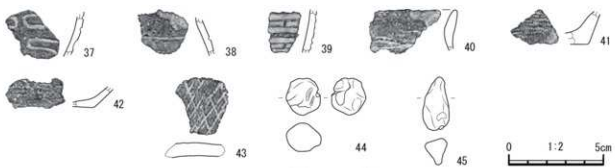


図 13　遺構外出土遺物

遺構外出土土製品観察表

番号	出土地点	層位	種類	外面特徴	内面特徴	備考
13-37	Ⅰ I-108	Ⅱ層	ミニチュア土器	ナデ・沈線	ミガキ	海綿骨針混入
13-38	Ⅰ K-110	Ⅰ層	ミニチュア土器	ナデ→沈線	ミガキ	海綿骨針混入
13-39	Ⅰ M-110	Ⅰ層	ミニチュア土器	縄文→沈線，赤色物質付着	ミガキ	
13-40	Ⅰ M-111	Ⅱ層	ミニチュア土器	ミガキ・沈線	ミガキ	
13-41	Ⅰ M-111	Ⅱ層	ミニチュア土器	LR斜	ナデ	海綿骨針混入
13-42	Ⅰ M-110	Ⅰ層	ミニチュア土器	摩耗顕著	ナデか	海綿骨針混入
13-43	Ⅰ M-111	Ⅱ層	円盤状土製品	R単軸絡条体5	ミガキ	重量8.4g，欠損の可能性あり
13-44	Ⅰ M-111	Ⅲ層	焼成粘土塊	ユビコネ		重量5g
13-45	Ⅰ M-110	Ⅰ層	焼成粘土塊	ユビコネ		重量4.7g

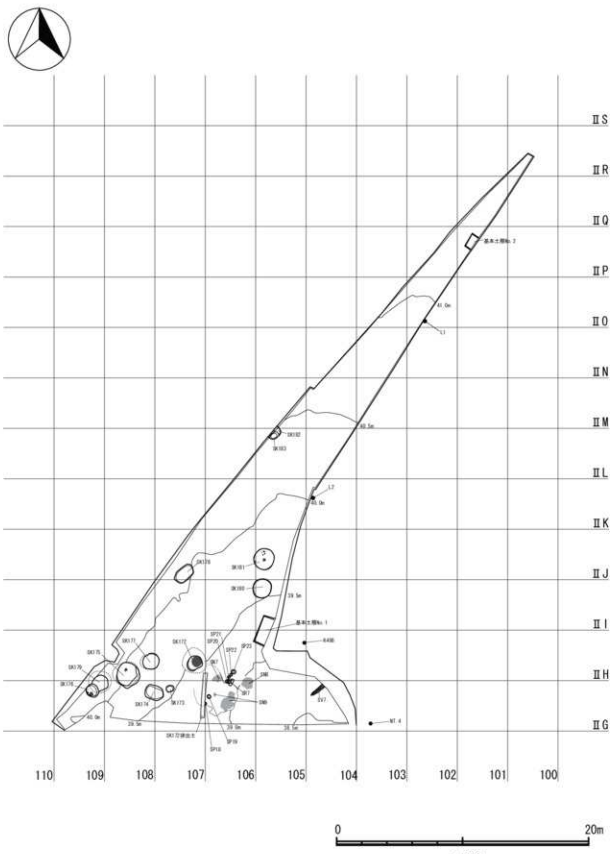


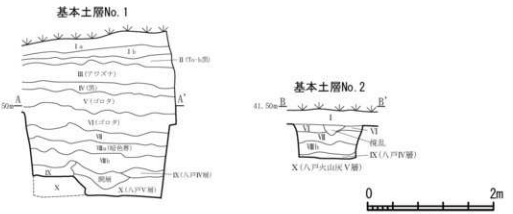
図14　平成24年度　B区遺構配置図

第３節　平成 24 年度Ｂ区

１　基本土層

基本土層は、ⅡＨ・ⅡＩ-105 グリッドに設定した基本土層№１と、ⅡＰ-101 グリッドに設定した基本土層№２の２カ所で確認した。基本土層№１は、地形的に谷地形にあたるため黒色土が厚く堆積しており、平成８年度調査で確認された基本土層に準拠する状態であった。ⅡＪライン以北では上位層が削平、耕作されていて、北東へ進むほど下位土層まで及び、基本土層№２の地点では第Ⅱ～Ⅴ層が欠落し、遺物包含層は失われていた。

Ｂ区での基本土層は、第Ⅰ層から第Ⅹ層に分層された。第Ⅰ層は、表土あるいは耕作土で、第Ⅱ層は十和田ｂ火山灰（To-b）を含む黒色土である。第Ⅲ層は中撰浮石（アワズナ）を含む黒色土で、本調査区での主体的な遺物包含層である。縄文時代中期から後期前半の遺物が本層から出土しており、SK172 の排出土も本層で検出されたことから、当該期の生活面があったものと推測される。第Ⅳ層は沈降した中撰浮石と浮揚した南部浮石（ゴロタ）を含む黒色土で、本層において焼土遺構や埋設土器遺構などは検出された。第Ⅴ・Ⅵ層はいずれも南部浮石を含むが、上位の第Ⅴ層は黒色が強く、下位の第Ⅵ層はやや明るい黒褐色土を呈している。第Ⅴ層まで下げた時点で多くの土坑や溝状土坑、ピットなどが検出された。第Ⅶ層は下位ローム層との漸移層で最終の遺構確認を行ったが、本層では新たな遺構は検出されなかった。第Ⅷ層は火山灰質土壌で、上位の暗色帯（第Ⅷａ層）と下位の褐色土（第Ⅷｂ層）に細分された。第Ⅸ層と第Ⅹ層はいずれも黄褐色火山灰で、第Ⅸ層が八戸火山灰第Ⅵ層、第



基本土層No.１(A-A')

Ⅰａ層	10YR3/1	黒褐色土	表土で耕作土。草根多くやわらかい、しまりなし。
Ⅰｂ層	10YR3/1	黒褐色土	旧耕作土と思われる。Ⅰａ層よりかたくしまっている。草根多い。
Ⅱ層	10YR1.7/1	黒色土	十和田ｂ火山灰、火山灰を含む土層で表土～平安時代の土層と思われる。
Ⅲ層	10YR2/1	黒色土	南部浮石1～3mm大が下位に3%ほど混入。アワズナを主体的に含む土層で、まだら状に明るい色調を呈する部分がある。本層は縄文中期から後期の遺物包含層と思われる。
Ⅳ層	10YR2/1	黒色土	南部浮石1～5mm大含。アワズナと南部浮石が混在する土層とみられる。
Ⅴ層	10YR1.7/1	黒色土	南部浮石1～10mm大が3%、南部浮石を主体とするシルト質土。本層で多くの遺構を検出した。
Ⅵ層	10YR3/1	黒褐色土	南部浮石1～10mm大が上位に3%ほど混入。下位は5%ほど混入。南部浮石を主体とする火山灰質土。色調も下位はやや明るい。
Ⅶ層	10YR2/3	黒褐色土	最終的には本層で多くの遺構を検出した。
Ⅷａ層	10YR2/3	黒褐色土	10YR6/6明黄褐色浮石1～3mm大2%。火山灰質でかたくしまっている。本層で最終的な遺構確認を行った。
Ⅷｂ層	10YR2/2	黒褐色土	火山灰質の褐色帯、かたくしまる。
Ⅷｃ層	10YR4/6	褐色土	10YR6/6明黄褐色浮石1～30mm大3%。
撹乱	10YR4/6	褐色土	基本的に Ⅸ層より新しい。盛り的に掘り下げた土層と思われる。
Ⅸ層	10YR5/6	黄褐色浮石	1～50mm大の黄褐色浮石を主体とする。下位は10YR7/6明黄褐色と明るい浮石も混入する。八戸火山灰第Ⅵ層に相当する。
Ⅹ層	10YR5/6	黄褐色火山灰	2.5YR4/6オリーブ褐色火山灰1mm以下が部分的に混入している。かたくしまり、クラックがみられる。八戸火山灰第Ⅵ層に相当する。

基本土層No.２(B-B')

Ⅰ層	10YR2/2	黒褐色土	耕作土、やわらくもろい。草根あり。
Ⅵ層	10YR3/4	暗褐色土	火山灰質土、しまりあり。
Ⅷ層	10YR4/4～4/6	褐色土	
Ⅷａ層	10YR5/6	黄褐色	かたくしまる。
Ⅸ層	10YR5/6	黄褐色浮石層	1～30mm大の浮石を主体とする。10YR6/3に近い黄褐色火山灰が部分的に含まれている。
Ⅹ層	10YR5/6	黄褐色火山灰土	
撹乱	10YR3/3	暗褐色土	耕作物の根などによる撹乱と思われる。

図15　基本土層

X層が八戸火山灰第Ⅴ層にそれぞれ相当する。

2　検出遺構と出土遺物の概要

平成24年度に調査を行ったB区のうち、北半では削平の影響も考えられるが遺構は検出されず、南半で多くの遺構が検出された。特に谷部下方にある南端部から多くの遺構が密に検出され、遺物の出土も遺構の占地と同調するように出土した。

検出された遺構は土坑12基、焼土遺構3基、埋設土器遺構1基、ピット6基、溝状土坑1基である。遺物は縄文時代中期後半～後期初頭のものが主体で、段ボール箱3箱分（土器類2箱・石器類1箱）出土した。出土土器の重量は、遺構内からは約6㎏、遺構外からは約8㎏で、合計約14㎏であった。

遺構名称は、調査時に遺構種ごとに1から番号を付したが、整理作業において過去の調査で付した番号に連番となるように表のとおり改称した。

検出遺構番号の振替一覧表

区　分	報告書掲載遺構番号		調査時遺構番号
土坑	SK172	←	SK01
	SK173	←	SK02
	SK174	←	SK03
	SK175	←	SK04
	SK176	←	SK05
	SK177	←	SK06
	SK178	←	SK07
	SK179	←	SK08
	SK180	←	SK09
	SK181	←	SK10
	SK182	←	SK11
	SK183	←	SK12
埋設土器遺構	SR7	←	SR01
溝状土坑	SV7	←	SV01
焼土遺構	SN7	←	SN01
	SN8	←	SN02
	SN9	←	SN03
ピット	SP18	←	SP01
	SP19	←	SP02
	SP20	←	SP03
	SP21	←	SP04
	SP22	←	SP05
	SP23	←	SP06

3　土坑

第172号土坑（SK172（旧SK01）、図16・19、写真11・17）

[位置・確認]調査区南端部、ⅡH-107グリッドに位置する。遺構確認面の標高は39.5ｍ、第Ⅴ層で確認したが、土坑を掘削した際に排出されたと思われる土壌（排出土）を第Ⅲ層で検出している。土坑本体は他遺構との重複は認められなかったが、排出土はSN09より新しくSN07・SR07より古い。

[構造]確認面での平面形は長軸126cm、短軸108cmの楕円形で、底面の平面形は長軸202cm、短軸188cmの楕円形である。確認面から平坦な底面までの深さは92㎝で、断面形はフラスコ状をなしている。また、本土坑掘削時に排出された思われる排出土を南東へ5ｍの地点まで確認した。中撫浮石を含む黒褐色土や暗褐色土が約3×2.5ｍの範囲に広がっている。ただし土坑本体に近い約1.5ｍの範囲では、初期掘削土壌と当時の生活面表土が同質であるため同化してしまったものと考えられ、調査でそれらを識別し検出することができなかった。

[堆積土]6層に分層された。底面付近は黒色土が堆積しており自然堆積の様相を呈するが、堆積土の大半は八戸火山灰と思われるにぶい黄橙色～浅黄色を呈する浮石・火山灰が充填されていた。人為的に埋め戻されたものである。

[出土遺物]遺物は、縄文時代中期から後期にかけてのものが数点出土した。図19－1は粗製深鉢口縁

部片で、後期初頭のものと思われる。２は粘土紐を貼り付けて刺突もみられることから、中期の円筒上層ｃ式期のものと思われる。
[小結]出土遺物や遺構との重複関係等から縄文時代後期初頭に廃絶された遺構と考えられ、その用途は貯蔵であった可能性が高い。

第 173 号土坑（SK173（旧 SK02）、図 17、写真 11・17）
[位置・確認]調査区南端部、Ⅱ G-107 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 39.6 m、第Ⅴ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。
[構造]平面形は長軸 65cm、短軸 50cm の楕円形を呈し、確認面からの深さは 26 cmである。底面は平坦で、断面形はコ字状をなしている。
[堆積土]南部浮石を含む黒色土が堆積している。人為堆積の可能性がある。
[出土遺物]遺物は出土しなかった。
[小結]堆積土の様相や遺構確認面などから、縄文時代中期から後期に廃絶された遺構と考えられるが、その用途は不明である。

第 174 号土坑（SK174（旧 SK03）、図 17・19、写真 12・17）
[位置・確認]調査区南端部、Ⅱ G-107・108 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 39.6 ～ 39.7 m、第Ⅴ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。
[構造]平面形は長軸 152cm、短軸 111cm の楕円形を呈し、確認面からの深さは 32 cmである。底面は平坦で、断面形は皿状をなしている。
[堆積土]２層に分層され、上位は黒色土、下位は黒褐色土で、人為的に埋め戻された可能性がある。
[出土遺物図 19- ３は堆積土から出土した、壺胴部下半と思われる破片である。他に図示していないが縄文時代中期頃と思われる土器片が少量出土している。
[小結]出土遺物から縄文時代後期初頭以降に廃絶された遺構と考えられる。その用途は、遺構の形状から墓の可能性が考えられる。

第 175 号土坑（SK175（旧 SK04）、図 17・19、写真 12・17）
[位置・確認]調査区南端部、Ⅱ G・Ⅱ H-108 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 39.9 ～ 40.1 m、第Ⅴ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。
[構造]確認面での平面形は長軸 200 cm、短軸 180 cmの楕円形で、底面の平面形は長軸 206cm、短軸 193cm の楕円形を呈し、確認面からの深さは 156 cmである。底面は平坦で、全体の形状は円筒状を呈している。
[堆積土]10 層に分層され、上位は黒色土中位に黒褐色土が堆積し、下位は壁から崩落したと思われる黄橙色土や八戸火山灰層、暗褐色土、黒褐色土などがブロック状に堆積している。人為的に埋め戻されたものと思われる。
[出土遺物]底面中央からは赤色顔料が検出されている。堆積土からは図 19- ４の深鉢胴部片が出土した。他に縄文時代中期から後期の土器片が少量出土したが、図示し得なかった。
[小結]出土遺物から縄文時代後期初頭には廃絶された遺構と考えられる。その用途は本来、貯蔵であっ

たと思われるが、赤色顔料の検出から墓に転用された可能性が高い。

第176号土坑（SK176（旧SK05）、図17・19、写真13・17）

[位置・確認]調査区南端部、Ⅱ G-109グリッドに位置する。遺構確認面の標高は40.2ｍ、第Ⅴ層で確認した。SK179と重複し、本遺構が新しい。

[構造]平面形は長軸103cm、短軸98cmのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは36㎝である。底面は平坦だが、SK179と重複している部分はやや沈み込んでいる。断面形は皿状をなしている。

[堆積土]３層に分層され、上位は黒色土、底面付近は黒褐色土が堆積している。炭化物や南部浮石を含むことから人為堆積と思われる。

[出土遺物]図19－５・６はいずれも底面直上から出土した円筒上層ｄ式土器で、５の底部は遺存していない。これら土器の西側から、礫が出土した。

[小結]堆積土の様相、出土遺物、遺構との重複関係等から縄文時代中期円筒上層ｄ式期の遺構と考えられる。その用途は、遺構の形状や底部のない土器の出土などから墓の可能性が考えられる。

第177号土坑（SK177（旧SK06）、図17、写真13・17）

[位置・確認]調査区南端部、Ⅱ H-107・108グリッドに位置する。遺構確認面の標高は39.6ｍ、第Ⅴ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

[構造]確認面での平面形は長軸126cm、短軸124cmの円形を呈し、確認面からの深さは36㎝である。底面の規模は長軸156㎝、短軸133㎝で、底面は平坦に整えられている。壁は中程がすぼまるフラスコ状を呈している。

[堆積土]３層に分層されるが南部浮石を含む黒褐色土が主で、人為堆積の可能性がある。

[出土遺物]遺物は出土しなかった。

[小結]遺物が出土しておらず時期を断定できないが、堆積土の様相や周辺の遺構の状況などから縄文時代中期から後期のものと思われる。その用途は、遺構の形状から貯蔵であった可能性がある。

第178号土坑（SK178（旧SK07）、図18・19、写真14・17）

[位置・確認]調査区南側部、Ⅱ I・Ⅱ J-107グリッドに位置する。遺構確認面の標高は40.0ｍ、第Ⅴ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。

[構造]平面形は長軸172cm、短軸101cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは８㎝である。底面はやや凹凸があるが概ね平坦で、断面形は皿状をなしている。

[堆積土]炭化物を含む黒褐色土が堆積しており、人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物]底面付近から礫が数点、散在した状態で出土した。図19－７はミガキのみられる底部片で、磨石（８）、敲・凹石（９）も出土した。

[小結]堆積土の様相、出土遺物などから縄文時代後期前半の遺構と考えられる。その用途は遺構の形状から墓の可能性が考えられる。

第179号土坑（SK179（旧SK08）、図17・20、写真13・17）

[位置・確認]調査区南端部、Ⅱ G・Ⅱ H-108・109グリッドに位置する。遺構確認面の標高は40.1～

40.2 m、第Ⅴ層で確認した。SK176 と重複し、本遺構が古い。
[構造]確認面での平面形は長軸 140 ㎝、短軸 121 ㎝の楕円形を呈し、底面は長軸 174㎝、短軸 173㎝の円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは 70 ㎝で、底面は平坦である。
[堆積土]３層に分層され、上位は黒褐色土、底面付近は黒色土が堆積し、人為堆積の可能性がある。
[出土遺物]図 20-10 は粘板岩製の二次加工剥片で方側縁に使用痕がみられる。他に、図示していないが中期中葉頃の土器細片が少量出土した。
[小結]堆積土の様相、出土遺物、遺構との重複関係などから縄文時代中期中葉頃に廃絶された遺構と考えられる。フラスコ状土坑であることから、その用途は貯蔵と考えられる。

第 180 号土坑（SK180（旧 SK09）、図 18・20、写真 14・17）
[位置・確認]調査区南側部、Ⅱ I-105･106 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 39.5 ～ 39.6 m、第Ⅴ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。
[構造]平面形は長軸 154㎝、短軸 145㎝のほぼ円形を呈し、確認面からの深さは 22 ㎝である。底面は平坦で、壁上部が遺存していないがやや内側に内湾してフラスコ状を呈する可能性がある。
[堆積土]３層に分層されるが、いずれもアワズナを含む黒色土である。自然堆積の可能性が高い。
[出土遺物]図 20-11 は、堆積土から出土した折り返し状を呈する深鉢口縁部片である。他に図示していないが、縄文時代中期から後期初頭と思われる土器片がごく少量出土している。
[小結]堆積土の様相、出土遺物等から縄文時代後期初頭以後に作られた遺構と考えられる。その用途は不明であるが、SK181 と平面形・規模とも酷似することから同一の機能を有する可能性がある。

第 181 号土坑（SK181（旧 SK10）、図 18・20、写真 14・17）
[位置・確認]調査区南側部、Ⅱ J-105･106 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 39.7 ～ 39.8 m、第Ⅴ層で確認した。他遺構との重複は認められなかった。
[構造]平面形は長軸 167㎝、短軸 162㎝のほぼ円形を呈し、確認面からの深さは 43 ㎝である。底面は平坦で、やや内湾しながら壁が立ち上がり、断面形はフラスコ状をなしている。
[堆積土]アワズナを含む黒色土が主として堆積し、底面壁際はやや明るい色調を帯びている。自然堆積の可能性が高い。
[出土遺物]底面中央部から人頭大の礫や礫片・土器片が出土した。図 20-12 は、縄文時代中期前葉、13 は後期初頭の深鉢土器片である。他に図示していないが、縄文時代中期の円筒上層ｄ式土器の細片が出土している。
[小結]堆積土の様相、出土遺物等から縄文時代後期初頭以後に作られた遺構と考えられる。その用途は不明であるが、SK180 と平面形・規模とも酷似することから同一の機能を有する可能性がある。

第 182 号土坑（SK182（旧 SK11）、図 18、写真 15）
[位置・確認]調査区中央部、Ⅱ L･Ⅱ M-105 グリッドに位置する。遺構確認面の標高は 40.5 m、第Ⅴ層で確認した。SK183 と重複し、本遺構が新しい。
[構造]北西半が調査区域外に延びていて全体の形状は不明だが、隅丸方形を呈する可能性がある。確認できた規模は、長軸 109㎝、短軸（61）㎝で、確認面からの深さは 44 ㎝である。底面は平坦だが、

底面南側でSK183が検出された。断面形はコ字状をなしている。
[堆積土]3層に分層され、アワズナを含む黒色土が主体であるが、中位壁際には南部浮石がやや多く含まれている。人為的に埋め戻された可能性がある。
[出土遺物]底面中央付近で約20㎝大の礫1点が出土したが、土器類などの遺物は出土しなかった。
[小結]遺物が出土しておらず、堆積土の様相、周辺の状況、遺構の重複関係などから縄文時代中期から後期前半の遺構と思われるが、断定できない。またその用途は、底面からの自然礫の出土や遺構の形状等から、墓の可能性が考えられる。

第183号土坑（SK183（旧SK13）、図18、写真15）
[位置・確認]調査区中央部、Ⅱ L-105グリッドに位置する。遺構確認面の標高は40.5m、SK182の底面精査中に確認した。SK182と重複し、本遺構が古い。
[構造]平面形は長軸73㎝、短軸50㎝の楕円形を呈し、確認面からの深さは68㎝である。底面は平坦で、全体の形状は筒状をなしていたものと思われる。
[堆積土]2層に分層され、黒色土～黄褐色土が堆積し、人為堆積の様相を呈している。
[出土遺物]遺物は出土しなかった。
[小結]堆積土の様相、遺構との重複関係などから縄文時代中期から後期初頭の遺構と思われるが、断定できない。またその用途は、遺構の形状や堆積土などから柱穴の可能性が考えられる。

4　溝状土坑

第7号溝状土坑（SV07（旧SV01）、図18・20、写真15・17）
[位置・確認]調査区南端部Ⅱ G-104グリッドに位置し、遺構確認面の標高は38.9m、第Ⅴ層で確認したが、調査区壁の観察によると第Ⅳ層付近から掘り込まれているようである。他遺構との重複は認められなかった。
[構造]北東半は調査区域外に延びていて遺構の全容は不明であるが、確認できた規模は長軸（121）㎝、短軸32mの溝状をなしている。確認面からの深さ151㎝で、上半部の幅は25～30㎝であるが、底面から50㎝ほどまでの下半部は、幅10㎝しかない。また、南西端部はオーバーハングしている。
[堆積土]堆積土は6層に分層されるが黒色土が主体で、壁から崩落した八戸火山灰などが流入している。したがって壁等の崩落土と自然堆積土が互層となったものと思われる。
[出土遺物]図20-14は円筒上層c式とみられる小型の鉢で、15は円筒上層d式とみられる突起部分の土器片である。16は外面がナデ調整で無文であることから、縄文時代後期初頭のものと思われる。
[小結]出土遺物では縄文時代中期の土器が主体となっているが、縄文時代後期とみられる土器片があることから、縄文時代後期に作られた溝状土坑と考えられる。その機能は、一般的に落とし穴とみられている。

5　焼土遺構

第7号焼土遺構（SN07（旧SN01）、図16、写真15）
[位置・確認]調査区南端部Ⅱ G・Ⅱ H-106グリッドに位置し、遺構確認面の標高は39.8m、第Ⅲ層で確認した。SK172排出土と重複し、本遺構が新しい。

[構造・堆積土]規模は長軸76cm、短軸52cmの不整形である。堆積土上位は層厚約５cmの暗赤褐色焼土で、本層上面が火床面の可能性がある。下位は黒色土がみられ、掘り方と思われる。
[出土遺物]遺物は出土しなかった。
[小結]遺物が出土していないが、検出された層位と、他遺構との重複関係などから縄文時代後期初頭頃に形成された焼土遺構と考えられる。

第８号焼土遺構（SN08（旧 SN02）、図 16・20、写真 15・17）
[位置・確認]調査区南端部Ⅱ G・Ⅱ H-106 グリッドに位置し、遺構確認面の標高は 39.6 m、第Ⅲ層下部で確認した。他遺構との重複は認められなかった。
[構造・堆積土]規模は長軸 92cm、短軸 88cm の不整形である。堆積土は層厚約 10 cmの赤褐色焼土で、本層上面が火床面とみられる。下位は地山へ漸移している。
[出土遺物]図 20-17・18 はいずれも確認面から出土した。17 は円筒上層ｄ式、18 は中期後半のものである可能性がある。
[小結]検出された層位と出土遺物等から縄文時代中期円筒上層ｄ式頃に形成された焼土遺構と考えられる。

第９号焼土遺構（SN09（旧 SN03）、図 16、写真 16）
[位置・確認]調査区南端部Ⅱ G-106 グリッドに位置し、遺構確認面の標高は 39.6 m、第Ⅲ層下部で大小２基の焼土を確認した。SK172 掘出土と重複し、その下位から検出されたことから本遺構が古い。
[構造・堆積土]規模は長軸 164cm、短軸 86cm の不整形焼土と、西側の長軸 30 cm、短軸 18 cmの小規模な楕円形焼土である。堆積土は層厚約８～ 14 cmの赤褐色焼土で、本層上面が火床面とみられる。下位は地山へ漸移している。
[出土遺物]遺物は図示していないが、焼土層から縄文時代中期頃と思われる土器細片が出土した。
[小結]検出された層位と出土遺物などから、SN08 と同様、縄文時代中期円筒上層ｄ式頃に形成された焼土遺構と考えられる。

６　ピット

平成 24 年度のＢ区からは合計６基のピットが検出され、それぞれの位置は図 14 及び図 16 に、計測値等は表に示した。すべてがⅡ G・Ⅱ H-107 グリッドにあり、SP20 ～ 23 の４基は隣接して列状に検出され、その延長方向に SP18・19 も検出された。建物跡等の存在も想定して周辺域の精査を進めたが、硬化面や落ち込み、焼土等は確認されなかった。遺構確認面は第Ⅴ層下部であったが、Ｂ区においては縄文時代前期以前の遺物が出土していないことから、本来は上位層から掘り込まれていた可能性が高いと考えられる。また各ピットから遺物も出土していないため時期を断定することができないが、縄文時代中期頃に帰属すると考えるのが妥当と思われる。

SP 一覧表

報告書番号	調査時番号	グリッド	規模(cm)			標高	形状	備考
			長軸	短軸	深さ	(m)		
SP18	SP01	Ⅱ G-106	18	16	11	39.113	円形か	第Ⅴ層下部で検出
SP19	SP02	Ⅱ G-106	31	31	19	39.056	円形	第Ⅴ層下部で検出
SP20	SP03	Ⅱ G-106	29	25	27	38.900	楕円形	第Ⅴ層下部で検出
SP21	SP04	Ⅱ H-106	22	20	13	39.047	円形	第Ⅴ層下部で検出
SP22	SP05	Ⅱ H-106	23	21	25	38.918	楕円形	第Ⅴ層下部で検出
SP23	SP06	Ⅱ H-106	37	34	30	38.897	楕円形	第Ⅴ層下部で検出

7　埋設土器遺構

第７号埋設土器遺構（SR07（旧 SR01）、図 16・20、写真 16・17）

[位置・確認]調査区南端部Ⅱ G・Ⅱ H-106 グリッドに位置し、遺構確認面の標高は 39.6 m、第Ⅲ層で確認した。SK172 排出土・SP20 と重複し、いずれも本遺構が新しい。

[構造]土器は正立状態で埋置され、頭部破片が周辺に散在していたことから、後世の撹乱によって口頭部付近は遺存していない。掘り方の規模は長軸 41cm、短軸 18cm の円形と思われ、確認面からの深さは 19 cmである。

[堆積土]土器内部下位は黒色土、上位は黒褐色土が堆積し、掘り方には黒褐色土が堆積していた。

[出土遺物]図 20-19 は確認面で出土したもので、20 が埋設されていた本体である。埋設されていたのは壺の体部下半で、胴部外面を縦位区画で４つに分割し、沈線文が施文されている。底外面には網代痕らしい圧痕がみられるが、ミガキ調整によって大部分は消された状態である。

[小結]出土遺物から、縄文時代後期の十腰内Ⅰ式期の埋設土器遺構とみられる。

8　遺構外の出土遺物

遺構外の遺物は、層位的には第Ⅲ層から、平面的にはⅡⅠグリッドライン以南から主として出土した。調査区内では、まとまりが２カ所でみられた。「遺物集中地点」とした１カ所目はⅡ G・Ⅱ H-106 グリッドにまたがる地点で、約１m四方の範囲に土器や自然礫を含む遺物が集中していた。２カ所目はⅡ G-104・105 グリッドにまたがる部分で、「東張出部」として遺物の取り上げを行った。なお遺構外出土土器の重量は約８kgであった。

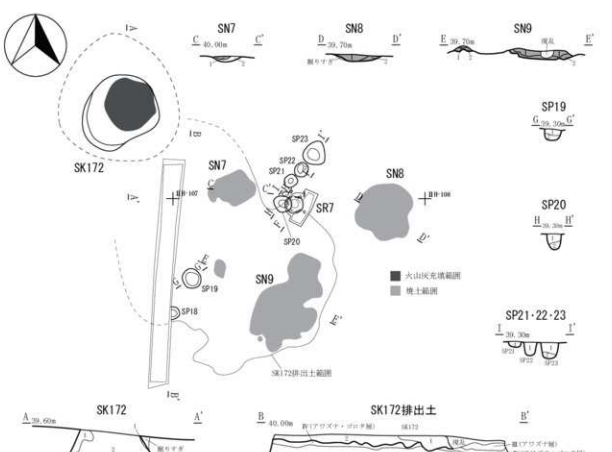
土器（図 21・22、写真 18）

縄文時代中期のもの（21 ～ 30）と縄文時代後期のもの（31・32）がみられる。中期のものは円筒上層ｃ式（21 ～ 23）、円筒上層ｄ式（24 ～ 30）があり、後期のものはいずれも粗製の深鉢土器である。

石器（図 22、写真 18）

尖頭器（33）、敲石（34・36）、磨石（35）、敲・凹石（37）がある。

（神）



SK172 (A-A')
1層　10YR2/3　黒褐色土　10YR7/4明黄褐色浮石10%。
2層　10YR7/4　にぶい黄橙色浮石　浮石は1～10mm大が主体だが、20mm大のものも5%含む。西側は10YR7/6明黄褐色を呈する。
3層　10YR6/4　にぶい黄橙色浮石と10YR2/3黒褐色の混合層。浮石は5～30mm大のものが主体。
4層　10YR7/4　にぶい黄橙色浮石　浮石は5～30mm大が多く、200mm大の八戸火山灰ブロックも含まれる。
5層　7.5YR7/4　浅黄色火山灰　10YR8/2灰白色浮石3～10mm5%含む。10YR2/1黒色土が厚さ5mmの薄層でみられる。
6層　10YR2/1　黒色土　南部浮石1～5mm大1%。

SK172排出土 (B-B')
1層　10YR3/3　暗褐色土　南部浮石1～3mm大1%。
2層　10YR2/2　黒褐色土　南部浮石1～3mm大1%、10YR2/3黒褐色土まだらに5%、アワズナ多く含む。
a層（アワズナ）層　10YR2/1 黒色土　南部浮石1～3mm大1%、アワズナ主体土。
IV（アワズナ・ゴロタ）層　10YR2/1 黒色土　南部浮石1～3mm大2%、アワズナとゴロタの混合層。
V（ゴロタ）層　10YR1.7/1 黒褐色土　南部浮石1～5mm大5%。
VI（無根）層　10YR2/2　黒色土　南部浮石1～5mm大7%、ゴロタ主体土。
VII（千鳥）層　10YR3/4　暗褐色土　南部浮石1～5mm大1%。
現表　10YR1.7/1　黒色土

SN7 (C-C')
1層　5YR3/6　暗赤褐色焼土　10YR3/3暗褐色土5%混入。上面は火床面。SK172の掘りすぎか。
2層　7.5YR1.7/1 黒色土　10YR2/2黒褐色土10%混入。

SN8 (D-D')
1層　5YR4/6　赤褐色焼土　上面が火床面。
2層　5YR3/2　暗赤褐色焼土　10YR3/2黒褐色土10%混入。

SN9 (E-E')
1層　5YR4/8　赤褐色焼土　南部浮石1～2mm大3%、堅くしまる火床面。
2層　5YR3/2　暗赤褐色焼土　南部浮石1～3mm大5%、黒褐色土が焼土化した痕跡層。
現表　7.5YR 2/2　黒褐色土
ゴロタ・アワズナ層 SK172排出土の注記を参照。

SR7 (F-F')
1層　10YR3/1　黒褐色土　南部浮石1mm大1%。
2層　10YR2/1　黒色土
3層　10YR2/2　黒褐色土　南部浮石1～2mm大1%。
アワズナ層　10YR2/1　黒色土　南部浮石1～3mm大2%。
SK-172排出土 10YR2/2 黒褐色土 10YR4/4褐色土10%混入。南部浮石1～5mm大3%。

SP18 (B-B')
1層　10YR1.7/1 黒色土　南部浮石1～5mm大3%、しまりなくやわらかい。

SP19 (G-G')
1層　10YR2/1　黒色土　南部浮石1～3mm大2%、アワズナ多く含む。
2層　10YR1.7/1 黒色土　南部浮石1～3mm大1%、アワズナ少量含む。

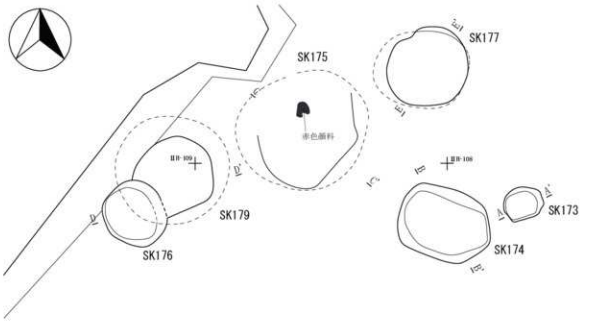
SP20 (H-H')
1層　10YR2/1　黒色土　南部浮石1～5mm大2%。
2層　10YR1.7/1 黒色土　南部浮石1～5mm大2%。

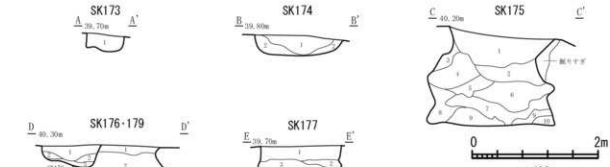
SN21 (I-I')
1層　10YR2/2 黒褐色土　南部浮石1～3mm大2%。

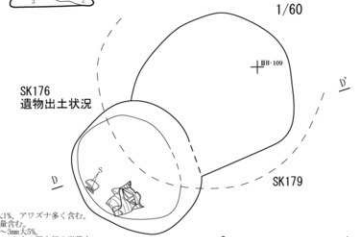
SN22 (I-I')
1層　10YR2/1 黒色土　南部浮石1～5mm大1%。

SN23 (I-I')
1層　10YR2/2 黒褐色土　南部浮石1～5mm大3%、炭化物10mm大1%。アワズナ多く含む。
2層　10YR2/1 黒色土　南部浮石1～3mm大1%、アワズナ少量含む。

図16　土坑・焼土遺構・埋設土器遺構・ピット







SK173(A-A')
1層　10YR2/1　黒色土　黄褐色浮石(ゴロタ)1～5mm大2%.

SK174(B-B')
1層　10YR1.7/1　黒色土　南部浮石1～3mm大2%.
2層　10YR2/2　黒褐色土　南部浮石1～6mm大3%.

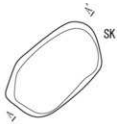
SK175(C-C')
1層　10YR2/1　黒色土　南部浮石1～6mm大3%、焼化物5mm大1%、アワズナ多く含む。
2層　10YR2/1　黒色土　南部浮石1～5mm大2%、アワズナ少量含む。
3層　10YR3/1　黒褐色土　10YR4/4褐色土ブロック入、南部浮石1～3mm大5%。
4層　10YR3/1　黒褐色土　10YR6/6黄褐色土に類似するブロック土、壁土部の崩落土。
5層　10YR1.7/1　黒色土　南部浮石1～5mm大2%。
6層　10YR2/2　黒褐色土　南部浮石1～10mm大3%。
7層　10YR2/1　黒褐色土+10YR3/4褐褐色土の混合層、南部浮石1～3mm大2%、八戸火山灰浮石1～10mm大1%。
8層　10YR6/4　にぶい黄橙色土　八戸火山灰浮石が壁から崩落したもの。
9層　10YR3/4　暗褐色土+10YR6/6黄褐色土+10YR2/1黒褐色土の混合層。
10層　10YR6/4　浅黄橙色土　八戸火山灰浮石が壁から崩落したもの。

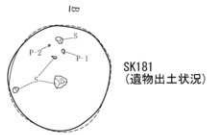
SK176(D-D')
1層　10YR2/1　黒色土　南部浮石1～3mm大2%、アワズナを含む。
2層　10YR1.7/1　黒色土　南部浮石1～5mm大1%、焼化物5%。
3層　10YR2/2　黒褐色土　南部浮石1～5mm大1%。

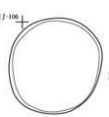
SK177(E-E')
1層　10YR2/2　黒褐色土　ゴロタ1～10mm大5%。
2層　10YR3/3　暗褐色土　ゴロタ1～5mm大2%。
3層　10YR2/3　黒褐色土　ゴロタ1～10mm大3%。

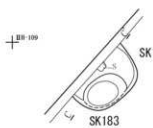
SK179(D-D')
1層　10YR2/3　黒褐色土　10YR3/3暗褐色土まだら状17%、南部浮石1～5mm2%。
2層　10YR2/2　黒褐色土　南部浮石1～2mm大2%。
3層　10YR2/1　黒色土　南部浮石1～5mm大1%。

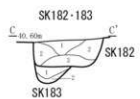
図17　土坑

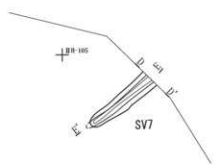












SK178(A-A')
1層　10YR2/2　黒褐色　ゴロタ1～5mm大2%、炭化粒3～20mm大2%。

SK180(B-B')
1層　10YR2/1　黒色土　南部浮石1～3mm大1%、アワズナやや多く含む。
2層　10YR2/1　黒色土　南部浮石1～5mm大5%、アワズナやや多く含む。
3層　10YR1.7/1　黒色土　南部浮石1～5mm大1%、アワズナ少量含む。

SK181(B-B')
1層　10YR2/1　黒色土　南部浮石1～5mm大2%、アワズナやや多く含む。
2層　10YR1.7/1　黒色土　南部浮石1～5mm大1%、アワズナ少量含む。
3層　10YR2/3　黒褐色土　南部浮石3～5mm大2%。

SK182(C-C')
1層　10YR2/1　黒色土　南部浮石1～5mm大1%、アワズナ多く含む。
2層　10YR2/1　黒色土　10YR2/3黒褐色土まだら状に10%、南部浮石1～10mm大5%、アワズナ中量。
3層　10YR1.7/1　黒色土　南部浮石1～5mm大2%、アワズナ中量。

SK183(C-C')
1層　10YR2/1　黒色土と10YR4/6褐色土の混合土、アワズナ少量含む。
2層　10YR5/6　黄褐色土　10YR3/3暗褐色土15%混入。

SV7(D-D')
1層　10YR1.7/1　黒色土　南部浮石1～3mm大1%。
2層　10YR4/4　褐色土と10YR2/1黒色土の混合層。
3層　10YR2/1　黒色土　10YR7/1灰白色火山灰(1～10mm大7%。
4層　10YR1.7/1　黒色土　南部浮石1～3mm大2%。
5層　10YR7/1　灰白土(八戸火山灰)と10YR2/1黒色土の混合層。
6層　10YR2/1　黒色土　南部浮石1～3mm大3%。

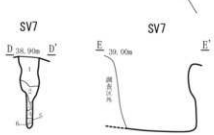


図18　土坑・溝状土坑

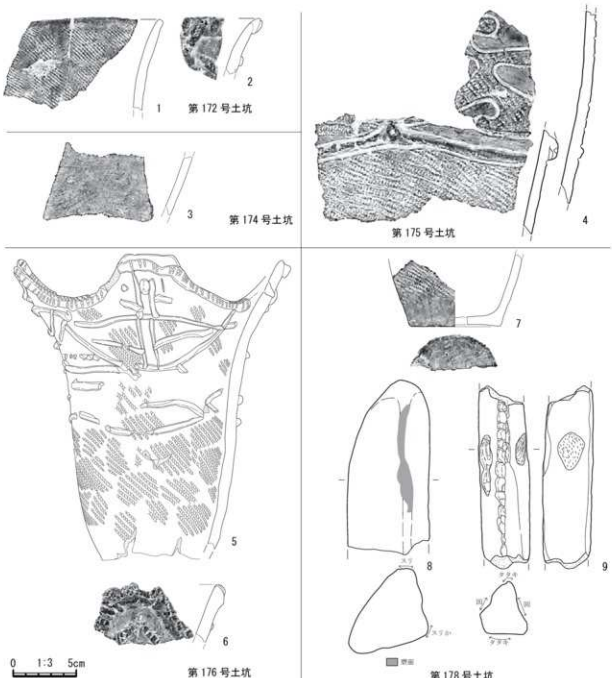


図 19　遺構内出土遺物

遺構内出土土器観察表

番号	出土地点	出遺構名・層位	器種	部位	外面特徴	内面特徴	備考
19-1	SK172	SK01・底面直上、東張出部・覆土	深鉢	口縁部	LR縄	ナデ	図22-32と同一個体か、口短面取り
19-2	SK172	SK01・2層	深鉢	口縁部	粘土紐貼付、L側面圧痕、刷毛	ナデ	
19-3	SK174	SK03・覆土	深か	胴部下半	ミガキ	ミガキ	
19-4	SK175	SK04・覆土	深鉢	胴部	沈線、粘土紐貼付、刷毛、沈線、磨り消し	ナデ、ミガキ	胎土に金雲母含む
19-5	SK176	SK05・底面直上(P1)	深鉢	体部上半	波状口縁、RL横、粘土紐貼付、L側面圧痕	ミガキ	波状口縁内面に穿孔(不貫通)あり、胎土に骨針含む
19-6	SK176	SK05・底面直上(P1)	深鉢	口縁部	波状口縁、粘土紐貼付、刻み	ミガキ	斜落葉裏
19-7	SK178	SK02・覆土	深鉢	底部	胴部RL横、ミガキ、底ーナデ	ナデ、ミガキ	

遺構内出土石器観察表

番号	出土地点	出遺構名・層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質	備考
19-8	SK178	SK07・覆土	磨石	(139)	66	68	794.6	砂岩	
19-9	SK178	SK07・覆土	敲・凹石	(145)	41	42	326.8	流紋岩	

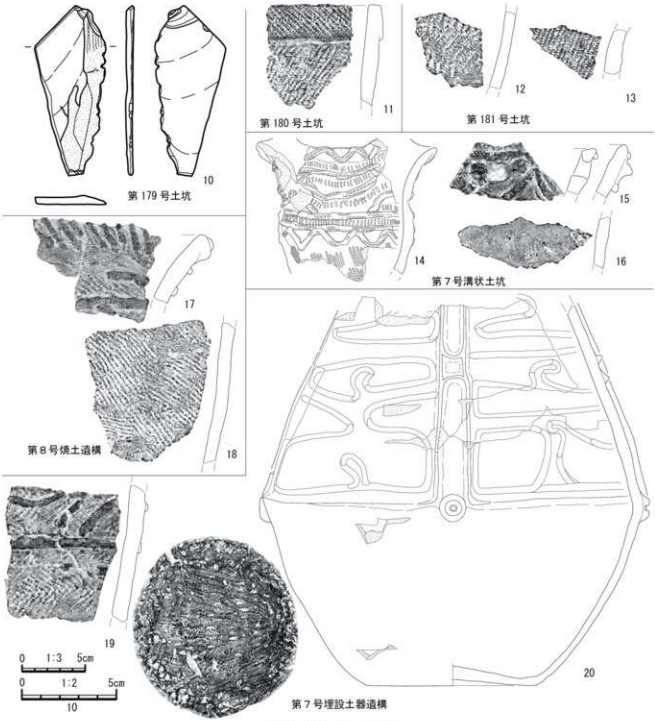


図 20　遺構内出土遺物

遺構内出土土器観察表

番号	出土地点	旧遺構名・層位	器種	部位	外面形態	内面形態	備考
20-11	SK180	SK09・覆土	深鉢	口縁部	口縁部肥厚、胴部肥厚	ナデ、ミガキ	
20-12	SK181	SK10・覆土	深鉢	胴部下半	LR縄	ミガキ	
20-13	SK181	SK10・低地直上(P1)	深鉢	胴部	RL縄	ミガキ	
20-14	SY07	SY01・覆土、南端部・最掘	鉢	体部上半	波状口縁、RL縄、粘土紐貼付、LR無節縄圧痕、爪形刺突	ミガキ	胎土に骨針含む
20-15	SY07	SY01・覆土	深鉢	口縁部	波状口縁、粘土紐貼付、LR無節圧痕	ミガキ	突起部に穿孔あり
20-16	SY07	SY01・覆土	深鉢	胴部下半	ナデ	ミガキ	
20-17	SS08	SS02・確認面、遺物集中地点・最掘	深鉢	口縁部	結束第１種(RL+LR)、粘土紐貼付	ミガキ	図20-19・図21-30と同一個体か、胎土に骨針含む
20-18	SS08	SS02・確認面	深鉢	胴部下半	RL縄	ミガキ	
20-19	SS07	SS01・確認面、遺物集中地点・最掘	深鉢	胴部	結束第１種(RL+LR)、粘土紐貼付	平滑なナデ	図20-17・図21-30と同一個体か、胎土に骨針微量含む
20-20	SS07	SS01-P1	壺	体部下半	粘土紐貼付、沈線、ミガキ	下半部ナデ 上半部ミガキ	底外面網代痕か、ミガキ

遺構内出土石器観察表

番号	出土地点	旧遺構名・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
20-10	SK179	SK06・覆土	二次加工剥片か	84	36	4	15.8	粘板岩	

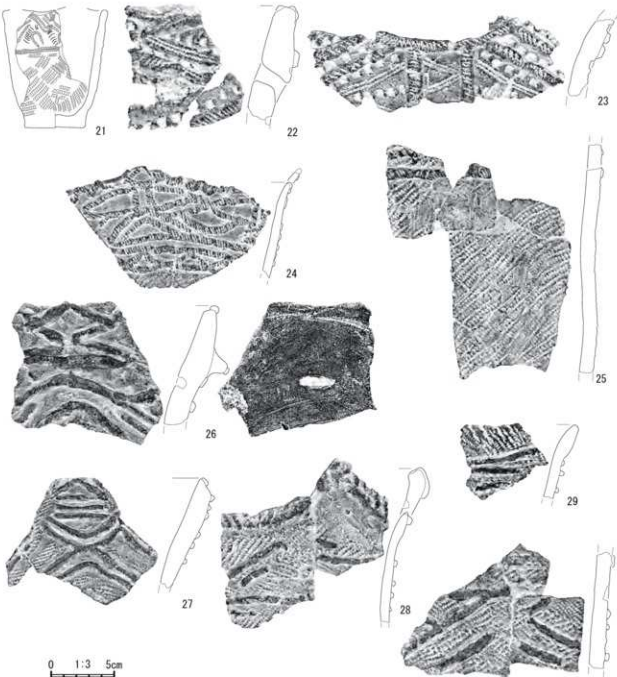


図21　遺構外出土遺物

遺構外出土土器観察表

番号	出土地点	層位	器種	部位	外面特徴	内面特徴	備考
21-21	遺物集中地点 南側 南側	層 Ⅲ層下層	鉢	略完形	波状口縁,LR横,RL斜,L側面圧痕,爪形刺突	オサエ,ミガキ	胎土に骨針含む
21-22	東張出部	層	深鉢	口縁部	波状口縁,粘土紐貼付,L側面圧痕,刺突	ミガキ	図21-23と同一個体か
21-23	東張出部	層	深鉢	頸部	粘土紐貼付,L側面圧痕,刺突	ミガキ	図21-22と同一個体か
21-24	遺物集中地点	層	鉢	口縁部	波状口縁,粘土紐貼付,L側面圧痕,LR横か	ミガキ	
21-25	遺物集中地点 東張出部 南側	層	深鉢	胴部	異端によるLR横,粘土紐貼付,L側面圧痕	ミガキ	胎土に骨針含む
21-26	東張出部	層	深鉢	口縁部	波状口縁,LR横か,粘土紐貼付	ミガキ	内面に煤孔(不貫通)あり
21-27	遺物集中地点	層	深鉢	口縁部	波状口縁,RL横,粘土紐貼付	ミガキ	
21-28	東張出部	層	深鉢	口縁部	波状口縁,結束第1種(RL+LR),粘土紐貼付	ミガキ	種と共に一括,内面炭化物著
21-29	南側	層	深鉢	口縁部	波状口縁,RL横,RL側面圧痕,粘土紐貼付,沈線か	ミガキ	
21-30	遺物集中地点 東張出部 南側	層 Ⅲ層下層	深鉢	胴部	結束第1種(RL+LR),沈線,粘土紐貼付	平滑なナデ	図20-17・図20-19と同一個体か, 胎土に骨針含む

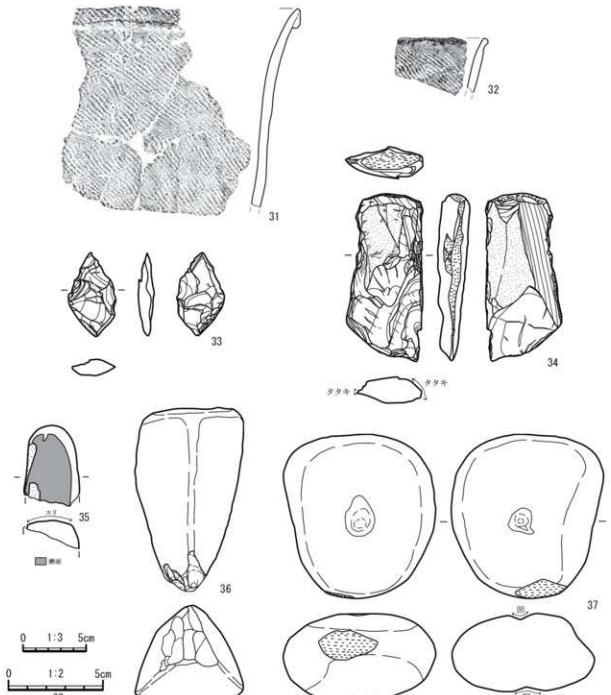


図 22　遺構外出土遺物

遺構外出土土器観察表

番号	出土地点	層位	器種	部位	外面特徴	内面特徴	備考
22-31	遺物集中地点	皿層	深鉢	体部上半	刺り返し状口縁,肌横	ミガキ	
22-32	南側	皿層下層	深鉢	口縁部	以横	平滑なナデ	口唇面取り,図19-1と同一個体か

遺構外出土石器観察表

番号	出土地点	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質	備考
22-33	調査区南端	皿層下層	矢柳器	40	23	8	6.8	珪質頁岩	
22-34	表土	剥片	礫石	116	50	21	125.9	粘板岩	打製石斧の未製品か
22-35	遺物集中地点	皿層	磨石	(67)	(45)	(23)	86.3	凝灰岩	
22-36	遺物集中地点	皿層	礫石	130	77	69	835.7	凝灰岩	
22-37		Ⅴ層	礫・固石	107	99	58	741.7	砂岩	

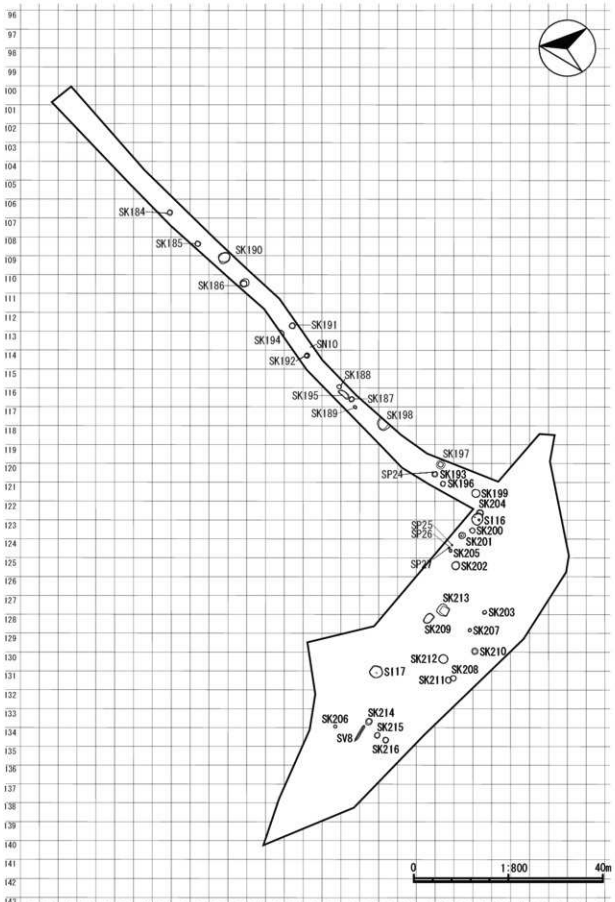


図23　平成25年度 遺構配置図

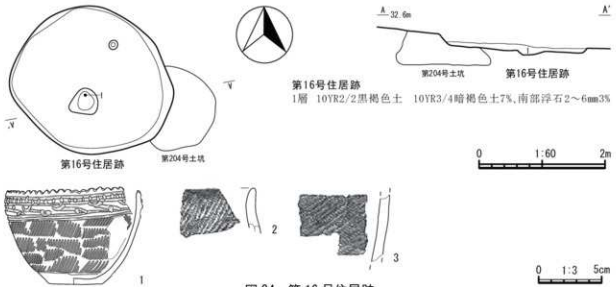


図 24　第 16 号住居跡

遺構内出土土器観察表

番号	遺構名	層位	時期	器種	外面特徴	内面特徴	備考
24-1	第16号住居跡	落ち込み検出面	縄文晩期前葉	鉢	口縁刻目､LR横→沈線→刻目→ミガキ､煤付着､ミガキ底	ミガキ､口縁煤付着	半損､口径10.4cm･底径4.5cm･器高7.8cm
24-2	第16号住居跡	覆土	縄文後･晩期	深鉢	RL縦､煤付着	ナデ	
24-3	第16号住居跡	覆土	縄文後･晩期	深鉢	RL縦､煤付着	ミガキ	

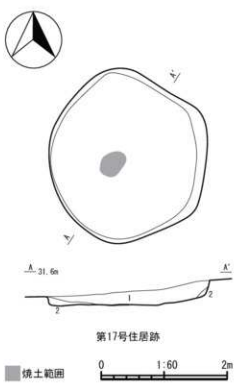


図 25　第 17 号住居跡

第４節　平成 25 年度

1　住居跡

第 16 号住居跡（図 24、写真 19・30）旧 SI 1

[位置・確認]調査区南西側の斜面平場、Ⅰ P-122 グリッド及びその周辺に位置しており、Ⅳ層（黒褐色土）及びⅤ層（漸移層）で黒褐色土の広がりとして検出した。

[重複]東側に第 204 号土坑が重複しており、本遺構が新しい。

[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面は平坦な床面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸 254 ㎝・短軸 226 ㎝、床面の規模は長軸 236 ㎝・短軸 212 ㎝、深さは 52 ㎝、床面積は 4 ㎡であった。床面の中央部南寄りからは、西側が張り出す浅い落ち込みを検出した。開口部は長軸 48 ㎝・短軸 44 ㎝、深さは 10 ㎝であった。また、北壁寄りからは、ピットを１基検出した。平面形状は円形であり、開口部は径約 15 ㎝、深さは５㎝の浅いものであった。

[堆積土]黒褐色土を主体に、暗褐色土や南部浮石が混入している。

[出土遺物]縄文時代後期から晩期と考えられる少量の土器片が出土しており、落ち込みの検出面からは、半損した鉢が割れ口を下にした状態で出土した（1）。1は口唇部に刻みが施され、口縁部は三叉状入組文が横位に展開しており、胴部には横位の沈線間にLRが横方向に施されている。時期は晩期前葉と考えられる。2は深鉢の口頸部、3は胴部であり、共にRLが縦方向に施されている。2・3は縄文のみの破片であり、詳細な時期は判断し難いが、後期から晩期の範疇と考えられる。
[小結]出土した土器から、縄文時代晩期前葉の住居と考えられる。

第17号住居跡（図25、写真20）旧SI 2
[位置・確認]調査区南西側の斜面平場、ⅡB-131グリッド及びその周辺に位置しており、Ⅴ層（漸移層）及びⅥ層（ローム層）で暗褐色土の広がりとして検出した。
[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面は平坦な床面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸260㎝・短軸258㎝、床面の規模は長軸242㎝・短軸238㎝、深さは42㎝、床面積は4.6㎡であった。床面の中央部からは、地床炉を検出した。焼土は円形に広がっており、範囲は長軸48㎝・短軸36㎝であった。
[堆積土]暗褐色土や褐色土を主体に、黒褐色土や南部浮石が混入している。
[出土遺物]確認されなかった。
[小結]詳細は不明である。

2　土坑

第184号土坑（図26、写真21）旧SK 1
[位置・確認]調査区北東側の平坦面、ⅡL-106・ⅡM-106グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒褐色土の広がりとして検出した。
[構造]平面形状は検出面が隅丸方形に近く、底面は円形である。断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸112㎝・短軸106㎝、深さは28㎝であった。
[堆積土]黒褐色土を主体に、南部浮石が混入している。
[出土遺物]確認されなかった。
[小結]詳細は不明である。

第185号土坑（図26、写真21）旧SK 2
[位置・確認]調査区北東側の平坦面、ⅡK-108グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒褐色土の広がりとして検出した。
[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸116㎝・短軸108㎝、深さは19㎝であった。
[堆積土]黒褐色土を主体に、南部浮石が混入している。
[出土遺物]確認されなかった。
[小結]詳細は不明である。

第 186 号土坑（図 26・31、写真 21・30）旧 SK 3

[位置・確認]調査区北東側の平坦面、Ⅱ H-110・Ⅱ I-110 グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒色土の広がりとして検出した。

[構造]検出面の平面形状は、西側がやや直線的であるが円形に近く、底面は隅丸方形に近い形状である。断面は底部が張り出すフラスコ状であるが、上部は崩落のためか開口部が広がっている。検出面の規模は長軸 186 ㎝・短軸 176 ㎝、底面の規模は長軸 138 ㎝・短軸 132 ㎝、深さは 128 ㎝であった。

[堆積土]黒褐色土や黒色土を主体に、南部浮石や炭化物が混入している。

[出土遺物]縄文時代後期初頭から前葉と考えられる数点の土器片が出土した。図 31- 4 は後期初頭と考えられる壺・鉢・深鉢類の口縁部である。幅 1 ㎜の細い沈線が直線的に施されており、沈線間は LR の地文とミガキによる無文となっている。5 は深鉢の口縁部であり、L が施され口唇部は羽状となっている。縄文のみの破片であり、詳細な時期は判断し難いが、縄文時代後期初頭から前葉と考えられる。

[小結]詳細は不明である。

第 187 号土坑（図 26、写真 21）旧 SK 4

[位置・確認]調査区中央部の斜面、Ⅱ C-116 グリッドに位置しており、Ⅵ層（ローム層）で黒褐色土の広がりとして検出した。北東側には第 195 号土坑が隣接している。

[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面はほぼ平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸 120 ㎝・短軸 104 ㎝、深さは 18 ㎝であった。

[堆積土]黒褐色土を主体に、南部浮石が混入している。

[出土遺物]縄文土器と考えられる破片が 1 点出土したが、細片であることから図示しなかった。

[小結]詳細は不明である。

第 188 号土坑（図 26・31、写真 22・30）旧 SK 5

[位置・確認]調査区中央部の斜面、Ⅱ D-115 グリッド及びその周辺に位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒褐色土や褐色土の広がりとして検出した。南西側には第 195 号土坑が隣接している。

[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面は平坦な底面から壁が外傾か直立する形状である。検出面の規模は長軸 98 ㎝・短軸 86 ㎝、深さは 46 ㎝であった。

[堆積土]黒褐色土や褐色土を主体に、南部浮石が混入している。

[出土遺物]縄文土器の破片が 1 点出土した。図 31- 6 は深鉢の胴部であり、R 単軸絡条体第 1 類が縦方向に施されている。縄文のみの破片であり、詳細な時期は判断し難いが、後期初頭から前葉と考えられる。

[小結]詳細は不明である。

第 189 号土坑（図 26、写真 22）旧 SK 6

[位置・確認]調査区中央部の斜面、Ⅱ C-116・117 グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒褐色土の広がりとして検出した。

[構造]平面形状は、やや不整な円形である。断面は平坦な底面から南側の壁は外傾し、北側は開口部

より底部が張り出す形状である。検出面の規模は長軸 74 ㎝・短軸 58 ㎝、深さは 37 ㎝であった。
[堆積土]黒褐色土を主体に、南部浮石や炭化物が混入している。
[出土遺物]縄文土器の破片が 2 点出土したが、細片であることから図示しなかった。詳細は不明であるが、うち 1 点は後期初頭から前葉と考えられる。
[小結]詳細は不明である。

第 190 号土坑（図 26、写真 22）旧 SK 7
[位置・確認]調査区北東側の平坦面、Ⅱ J-109 グリッド及びその周辺に位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒色土や黒褐色土の広がりとして検出した。
[構造]平面形状はやや不整な楕円形であり、断面は開口部より底部が若干張り出す形状である。検出面の規模は長軸 244 ㎝・短軸 200 ㎝、底面の規模は長軸 240 ㎝・短軸 218 ㎝、深さは 82 ㎝であった。
[堆積土]黒色土や黒褐色土を主体に、南部浮石が混入しており、壁際には崩落による堆積がみられる。
[出土遺物]確認されなかった。
[小結]詳細は不明である。

第 191 号土坑（図 27・31、写真 23・30）旧 SK 8
[位置・確認]調査区中央部の斜面、Ⅱ F-112 グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒褐色土の広がりとして検出した。
[構造]平面形状は、検出面が隅丸三角形で底面は円形である。断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は 128 ㎝、深さは 48 ㎝であった。
[堆積土]黒褐色土や暗褐色土を主体に、南部浮石が混入している。
[出土遺物]縄文時代後期初頭から前葉と考えられる土器片などが少量出土した。図 31- 7 は深鉢の胴部であり、LR が縦方向に施されている。同 8 はミニチュア土器である。鉢の底部であり、内外面はナデによって調整されている。
[小結]詳細は不明である。

第 192 号土坑（図 27・31、写真 23・30）旧 SK 9
[位置・確認]調査区中央部の斜面、Ⅱ E-114 グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で褐色土や黒褐色土の広がりとして検出した。
[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面は南側が階段状となっている。検出面の規模は長軸 110 ㎝・短軸 102 ㎝、深さは 35 ㎝であった。
[堆積土]黒褐色土や褐色土を主体に、南部浮石が混入している。
[出土遺物]縄文時代後期と考えられる土器片などが数点出土したが、細片であることからミニチュア土器のみ図示した（図 31- 9）。鉢の口縁部であり、外面はミガキ、内面はナデによって調整されている。
[小結]詳細は不明である。

第 193 号土坑（図 27、写真 23）旧 SK10

[位置・確認]調査区南西側の斜面、Ⅰ R-120・Ⅰ S-120 グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒褐色土の広がりとして検出した。

[重複]北東側に第 24 号ピットが重複しており、本遺構が古い。

[構造]平面形状は不整な円形であり、断面は底部が若干張り出す形状である。検出面の規模は長軸 122 ㎝・短軸 110 ㎝、深さは 62 ㎝であった。

[堆積土]黒褐色土や暗褐色土を主体に、南部浮石が混入している。

[出土遺物]縄文時代後期初頭の土器片などが数点出土したが、細片であることから図示しなかった。

[小結]詳細は不明である。

第 194 号土坑（図 27・31、写真 23・31）旧 SK11

[位置・確認]調査区中央部の斜面、Ⅱ G-112・113 グリッドに位置しており、Ⅵ層（ローム層）で黒褐色土の広がりとして検出した。

[構造]平面形状は、円形と推定される。断面は底部が張り出すフラスコ状であるが、上部は崩落のためか開口部が広がっている。Ａ土層での規模は、開口部 180 ㎝・底面 168 ㎝・深さ 154 ㎝であった。

[堆積土]黒褐色土や黒色土を主体に、南部浮石や炭化物が混入しており、下位には地山土の混入が顕著である。２層からは深鉢が出土しており、人為的に埋め戻した際に、置かれた可能性が考えられる。

[出土遺物]縄文時代中期中葉から後期前葉と考えられる数点の土器片などが出土しており、２層からは深鉢が底部を下にして、傾いた状態で出土した（図 31-13）。同 10 は中期中葉の円筒上層ｅ式土器と考えられる深鉢の胴部であり、RLR を地文に縦位の貼付隆帯と横位の弧状沈線で施文されている。同 11 は深鉢の胴部であり、Ｌが縦方向に施されている。同 13 は RL が縦方向に施されており、底面はミガキによって調整されている。11・13 は縄文のみの土器であり、詳細な時期は判断し難いが、後期初頭から前葉と考えられる。同 12 はミニチュア土器である。壺・鉢類の胴部であり、内外面はミガキによって調整されている。

[小結]詳細は不明であるが、堆積状況や出土した土器から、縄文時代後期初頭から前葉の土坑と考えられる。

第 195 号土坑（図 27・31、写真 24・31）旧 SK12

[位置・確認]調査区中央部の斜面、Ⅱ C-116・Ⅱ D-116 グリッドに位置しており、Ⅵ層（ローム層）で黒褐色土の広がりとして検出した。北東側には第 188 号土坑、南西側には第 187 号土坑が隣接している。

[構造]平面形状は楕円形であり、断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸 264 ㎝・短軸 102 ㎝、深さは 48 ㎝であった。

[堆積土]黒褐色土を主体に、南部浮石が混入している。

[出土遺物]縄文時代中期中葉から後期初頭と考えられる少量の土器片が出土した。図 31-14 は深鉢の胴部であり、RLR が斜方向に施されている。縄文のみの破片であり、詳細な時期は判断し難いが、中期中葉と考えられる。同 15 は後期初頭と考えられる深鉢の口縁部であり、口唇部に沿って貼付隆帯と

LR の押圧で施文されている。
[小結]詳細は不明である。

第 196 号土坑（図 27・31、写真 24・31）旧 SK13
[位置・確認]調査区南西側の斜面、Ⅰ R-120・121 グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒褐色土の広がりとして検出した。
[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面は底部が若干張り出す形状である。検出面の規模は長軸 102 ㎝・短軸 92 ㎝、深さは 86 ㎝であった。
[堆積土]黒褐色土を主体に、南部浮石や炭化物が混入している。
[出土遺物]縄文時代後期初頭から前葉と考えられる数点の土器片などが出土した。図 31-16 は壺の底部であり、ミガキによる無文となっている。同 17 はミニチュア土器である。鉢の底部であり、内外面はナデによって調整されている。
[小結]詳細は不明である。

第 197 号土坑（図 28・31、写真 24・31）旧 SK14
[位置・確認]調査区南西側の斜面、Ⅰ R-119・120 グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒褐色土の広がりとして検出した。
[構造]平面形状は、やや不整な円形である。断面は底部が張り出すフラスコ状であるが、開口部は崩落のためか少し広がっている。検出面の規模は長軸 114 ㎝・短軸 108 ㎝、底面の規模は長軸 180 ㎝・短軸 174 ㎝、深さは 128 ㎝であった。
[堆積土]黒褐色土や暗褐色土を主体に、南部浮石や炭化物が混入している。
[出土遺物]縄文時代前期前葉から後期初頭と考えられる数点の土器片が出土した。図 31-18 は前期前葉と考えられる深鉢の胴部である。LR 0 段多条が横方向に施されており、胎土には植物繊維が混入している。同 19 は後期初頭と考えられる深鉢の胴部であり、幅 6 ㎜の太い沈線が三角状に施文されている。沈線間は RL の地文とミガキによる無文帯となっている。
[小結]詳細は不明である。

第 198 号土坑（図 28・31、写真 24・31）旧 SK15
[位置・確認] 調査区中央部の斜面、Ⅱ A-117 グリッド及びその周辺に位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒色土の広がりとして検出した。
[構造]平面形状は、やや不整な円形と推定される。断面は底部が若干張り出すフラスコ状であるが、開口部は崩落によって広がっている。A 土層での規模は、開口部 290 ㎝・底面 190 ㎝・深さ 200 ㎝であった。
[堆積土]暗褐色土や黒褐色土を主体に、南部浮石や炭化物が混入している。壁際には崩落による堆積がみられ、地山土の流入が顕著である。
[出土遺物]縄文時代中期中葉から後期前葉と考えられる少量の土器片などが出土した。図 31-20 は中期中葉に位置づけられる円筒上層 d 式土器と考えられる。深鉢の口縁部であり、RL の地文と貼付隆

帯によって施文されている。同 21 は中期中葉と考えられる深鉢の口縁部であり、波状口縁にＲが押圧された隆帯が貼り付けられている。同 22 は中期後葉に位置づけられる最花式土器と考えられる深鉢の口頸部である。口唇部に沿って隆帯が貼り付けられており、頸部には横位に連続する竹管状の刺突が施されている。隆帯と刺突帯の間は、ナデによる幅広の無文帯となっている。同 23・24 は後期初頭から前葉と考えられ、23 は深鉢の口縁部、24 は壷・深鉢類の胴部である。23 は幅６㎜の太い沈線で施文されており、沈線間は地文のＲ単軸絡条体第１類とナデによる無文となっている。24 は沈線で施文されており、沈線間は地文のＲ単軸絡条体第１類とナデによる無文となっている。同 25 は後期前葉に位置づけられる十腰内Ⅰ式土器と考えられる壷・深鉢類の胴部である。沈線で施文されており、沈線間はミガキによる無文となっている。同 26 ～ 28 は土器片を再加工した円盤状土製品である。26・28 は RL、27 は LR が施されている。

[小結]詳細は不明である。

第 199 号土坑（図 28・32、写真 25・31・32）旧 SK16

[位置・確認]調査区南西側の斜面、Ⅰ P-121・Ⅰ Q-121 グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で明黄褐色土や黒褐色土の広がりとして検出した。

[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面は底部が若干張り出す形状である。検出面の規模は径 167 ㎝、深さは 90 ㎝であった。

[堆積土]黒褐色土や黒色土を主体に、南部浮石や炭化物が混入しており、１層にはローム土が堆積している。

[出土遺物]縄文時代後期初頭から前葉と考えられる少量の土器片などが出土した。図 32-29・30 は、後期前葉に位置づけられる十腰内Ⅰ式土器と考えられる。29 は深鉢の口縁部であり、２・３条を単位とする幅１㎜の細い平行沈線で、直線や鋸歯状の文様が施文されている。30 は壷の胴部であり、最大径部分に貼付隆帯が巡り、上半に沈線で施文されている。沈線間は LR の地文とミガキによる無文となっている。同 31 ～ 33 は深鉢である。31・32 は口縁部であり、31 は RL が横方向、32 は RL が縦方向に施されている。33 は胴部であり、RL が縦方向に施されている。31 ～ 33 は縄文のみの破片であることから、詳細な時期は判断し難いが、後期初頭から前葉と考えられる。同 34 はミニチュア土器である。壷・鉢類の胴部であり、内外面はナデによって調整されている。同 35 は礫器で頁岩を石材としている。正面には敲きや磨りの痕跡があり、側縁の剥離には潰れがみられる。

[小結]詳細は不明である。

第 200 号土坑（図 28・32、写真 25・32）旧 SK17

[位置・確認]調査区南西側の斜面平場、Ⅰ P-123・Ⅰ Q-123 グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒褐色土の広がりとして検出した。

[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸 112 ㎝・短軸 106 ㎝、深さは９㎝であった。

[堆積土]黒褐色土を主体に、南部浮石が混入している。

[出土遺物]縄文時代中期後葉と考えられる土器片が１点出土した（図 32-36）。深鉢の胴部であり、

縦位の沈線で施文されている。沈線間はRLの地文とミガキによる無文となっている。
[小結]詳細は不明である。

第201号土坑（図28、写真25）旧SK18
[位置・確認]調査区南西側の斜面平場、Ⅰ Q-123グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒色土の広がりとして検出した。
[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸146 cm・短軸136 cm、深さは86 cmであった。
[堆積土]暗褐色土や黒色土を主体に、南部浮石が混入している。
[出土遺物]縄文時代後期初頭から前葉と考えられる土器片が数点出土したが、細片であることから図示しなかった。
[小結]詳細は不明である。

第202号土坑（図29・32、写真25・32）旧SK19
[位置・確認]調査区南西側の斜面平場、Ⅰ Q-125・Ⅰ R-125グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒色土の広がりとして検出した。
[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸180 cm・短軸162 cm、深さ42 cmであった。
[堆積土]黒色土や黒褐色土を主体に、南部浮石が混入している。
[出土遺物]縄文時代後期初頭から前葉と考えられる土器片が数点出土した。図32-37は壺の胴部であり、貼付隆帯と沈線で施文され、沈線間はミガキによる無文となっている。
[小結]詳細は不明である。

第203号土坑（図29、写真26）旧SK20
[位置・確認]調査区南西側の斜面、Ⅰ P-127グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒色土の広がりとして検出した。
[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸88 cm・短軸78 cm、深さは22 cmであった。
[堆積土]黒色土を主体に、南部浮石が混入している。
[出土遺物]確認されなかった。
[小結]詳細は不明である。

第204号土坑（図29・32、写真26・32）旧SK21
[位置・確認]調査区南西側の斜面平場、Ⅰ P-122グリッドに位置しており、Ⅳ層（黒褐色土）で黒褐色土の広がりとして検出した。
[重複]西側に第16号住居跡が重複しており、本遺構が古い。
[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面は底部が張り出すフラスコ状である。検出面の規模は

径 129 ㎝、底面の規模は長軸 154 ㎝・短軸 142 ㎝、深さは 59 ㎝であった。
[堆積土]黒褐色土を主体に、南部浮石が混入している。
[出土遺物]縄文時代中期末から後期前葉と考えられる少量の土器片などが出土しており、東壁際の底面からは深鉢の底部が出土した（図 32-43）。同 38 は中期末に位置づけられる大木 10 式土器と考えられる。深鉢の口頸部であり、沈線による J 字状の文様が横位に展開している。沈線間は RL の充填とミガキによる無文となっている。同 39・40 は後期初頭と考えられる深鉢であり、前者は口縁部、後者は口頸部である。39 は L の押圧とミガキによる無文で文様帯が構成されており、残存する胴部には沈線で施文されている。40 は RL の押圧とミガキによる無文で文様帯が構成されており、残存する胴部には RL が縦方向に施されている。同 41 は深鉢の口縁部、同 42・43 は底部である。41 は LR が施されており、口唇部は羽状となっている。42 は RL が横方向に施され、底面には網代痕がみられる。43 は輪積み痕に沿って割れており、割れ口を壁に向けた状態で出土した。RL が横方向に施されており、底面はナデによって調整されている。内外面の所々に輪積み痕がみられ、内面には煤が帯状に付着している。41 ～ 43 は縄文のみであることから、詳細な時期は判断し難いが、後期初頭から前葉と考えられる。同 44 は台石・石皿類で溶結凝灰岩を石材としている。使用面には敲きと磨りの痕跡がみられる。
[小結]詳細は不明であるが、出土した土器から、縄文時代後期初頭から前葉の土坑と考えられる。

第 205 号土坑（図 29、写真 26）旧 SK22
[位置・確認]調査区南西側の斜面平場、Ⅰ R-124 グリッドに位置しており、Ⅵ層（ローム層）で黒褐色土の広がりとして検出した。東側には第 25 ～ 27 号ピットが隣接している。また、平成８年度の調査で検出された第 11 号住居跡と重複する可能性が考えられる。
[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸 70 ㎝・短軸 60 ㎝、深さは 18 ㎝であった。
[堆積土]黒褐色土を主体に、南部浮石が混入している。
[出土遺物]確認されなかった。
[小結]詳細は不明である。

第 206 号土坑（図 29、写真 27）旧 SK23
[位置・確認]調査区南西側の斜面平場、Ⅱ D-133・134 グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒褐色土の広がりとして検出した。
[構造]平面形状は円形であり、断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は径 67 ㎝、深さは 12 ㎝であった。
[堆積土]黒褐色土を主体に、南部浮石や炭化物が混入している。
[出土遺物]弥生時代後期と考えられる土器片が１点出土したが、細片であることから図示しなかった。
[小結]詳細は不明である。

第 207 号土坑（図 29、写真 27）旧 SK24
[位置・確認]調査区南西側の斜面、Ⅰ Q-128 グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒褐色土の

広がりとして検出した。
[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸74㎝・短軸68㎝、深さは18㎝であった。
[堆積土]黒褐色土を主体に、南部浮石が混入している。
[出土遺物]確認されなかった。
[小結]詳細は不明である。

第208号土坑（図29、写真27）旧SK25
[位置・確認]調査区南西側の斜面、ⅠQ・ⅠR-131グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒色土の広がりとして検出した。北西側には第211号土坑が隣接している。
[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸120㎝・短軸114㎝、深さは48㎝であった。
[堆積土]黒色土を主体に、南部浮石が混入している。
[出土遺物]確認されなかった。
[小結]詳細は不明である。

第209号土坑（図29・32、写真27・32）旧SK26
[位置・確認]調査区南西側の斜面、ⅠS-127・128グリッドに位置しており、Ⅵ層（ローム層）で黒褐色土の広がりとして検出した。
[構造]平面形状はやや不整な長方形であり、断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸236㎝・短軸160㎝、深さは38㎝であった。
[堆積土]黒褐色土を主体に、南部浮石が混入している。
[出土遺物]縄文時代後期初頭から前葉と考えられる土器片が1点出土した（図32-45）。壺・鉢・深鉢類の口縁部であり、粗雑な沈線と貼付隆帯で施文されている。
[小結]詳細は不明である。

第210号土坑（図29、写真28）旧SK27
[位置・確認]調査区南西側の斜面、ⅠP-129グリッド及びその周辺に位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒色土の広がりとして検出した。
[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は径132㎝、深さは88㎝であった。
[堆積土]黒色土や黒褐色土を主体に、南部浮石が混入している。
[出土遺物]確認されなかった。
[小結]詳細は不明である。

第211号土坑（図29、写真28）旧SK28
[位置・確認]調査区南西側の斜面、ⅠR-131グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒色土の広

がりとして検出した。南東側には第 208 号土坑が隣接している。
[構造]平面形状は楕円形であり、断面は平坦な底面から南西側の壁は外傾し、北東側は底部が若干張り出す形状である。検出面の規模は長軸 130 ㎝・短軸 104 ㎝、深さは 56 ㎝であった。
[堆積土]黒色土を主体に、南部浮石が混入している。
[出土遺物]確認されなかった。
[小結]詳細は不明である。

第 212 号土坑（図 30、写真 28）旧 SK29
[位置・確認]調査区南西側の斜面、Ⅰ R-130 グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒色土や黒褐色土の広がりとして検出した。
[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面は平坦な底面から南側の壁は外傾し、北側は底部が若干張り出す形状である。検出面の規模は径 179 ㎝、深さ 76 ㎝であった。
[堆積土]１・２層は黒色土や黒褐色土、３～７層は暗褐色土や褐色土が主体に堆積している。３～７層は互層やブロック状に堆積して堅く締まっており、人為的に底面に貼られた可能性が考えられる。
[出土遺物] 縄文時代後期初頭から前葉と考えられる土器片が１点出土したが、細片であることから図示しなかった。
[小結]詳細は不明である。

第 213 号土坑（図 30・32、写真 28・32）旧 SK30
[位置・確認]調査区南西側の斜面、Ⅰ R-127・128 グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒褐色土の広がりとして検出した。
[構造]平面形状はやや不整な方形であり、断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は 243 ㎝、深さは 74 ㎝であった。
[堆積土]黒褐色土を主体に、南部浮石が混入している。１・３層にはブロック状の堆積がみられ、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。
[出土遺物]縄文時代後期初頭から前葉と考えられる土器片が数点出土しており、南西側を主体に礫が散在した状況であった。図 32-46 は深鉢の胴部であり、LR が斜方向に施されている。同 47 は台石・石皿類で花崗閃緑岩を石材としている。使用面には磨りの痕跡がみられる。
[小結]詳細は不明である。

第 214 号土坑（図 30、写真 29）旧 SK31
[位置・確認]調査区南西側の斜面、Ⅱ B-133 グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で焼土や暗褐色土の広がりとして検出した。
[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸 142 ㎝・短軸 132 ㎝、深さは 72 ㎝であった。
[堆積土]暗褐色土や黒褐色土の混合土を主体に、焼土や南部浮石が混入しており、１層には焼土が形成されている。焼土の形成や混合土の堆積から、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

[出土遺物]確認されなかった。
[小結]詳細は不明である。

第215号土坑（図30、写真29）旧SK32
[位置・確認]調査区南西側の斜面、ⅡA・ⅡB-134グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒褐色土の広がりとして検出した。
[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は径120㎝、深さは44㎝であった。
[堆積土]黒褐色土を主体に、南部浮石や炭化物が混入している。
[出土遺物]縄文土器の破片が1点出土したが、細片であることから図示しなかった。
[小結]詳細は不明である。

第216号土坑（図30、写真29）旧SK33
[位置・確認]調査区南西側の斜面、ⅡA-134グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒色土の広がりとして検出した。
[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸120㎝・短軸108㎝、深さは42㎝であった。
[堆積土]黒色土を主体に、南部浮石が混入している。
[出土遺物]縄文土器の破片が2点出土したが、細片であることから図示しなかった。
[小結]詳細は不明である。

3　溝状土坑

第8号溝状土坑（図30、写真30）旧SV 1
[位置・確認]調査区南西側の斜面、ⅡB-134グリッド及びその周辺に位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒色土の広がりとして検出した。
[構造]平面形状は細長い楕円形であり、断面は短軸が狭小な底面から壁が外傾し、長軸は開口部より底部が張り出す形状である。検出面の規模は長軸354㎝・短軸54㎝、底面の規模は長軸403㎝・短軸16㎝、深さは151㎝であった。
[堆積土]黒色土を主体に、南部浮石が混入する自然堆積である。
[出土遺物]同一個体と考えられる縄文土器の破片が3点出土したが、細片であることから図示しなかった。
[小結]詳細は不明であるが、形状や出土した土器から、縄文時代の落とし穴と考えられる。

4　焼土遺構

第10号焼土遺構（写真30）旧SN 1
[位置・確認]調査区中央部の斜面、ⅡE-113グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で焼土の広がりとして検出した。

[構造]焼土は長軸 34 cm・短軸 24 cmの範囲に広がっている。
[堆積土]黒褐色土が橙色に焼けており、焼土面には南部浮石や炭化物がみられる。
[出土遺物]周辺から縄文時代後期初頭から前葉の土器片が出土している。
[小結]詳細は不明であるが、検出面の状況や周辺の出土遺物から、縄文時代に形成された可能性が考えられる。

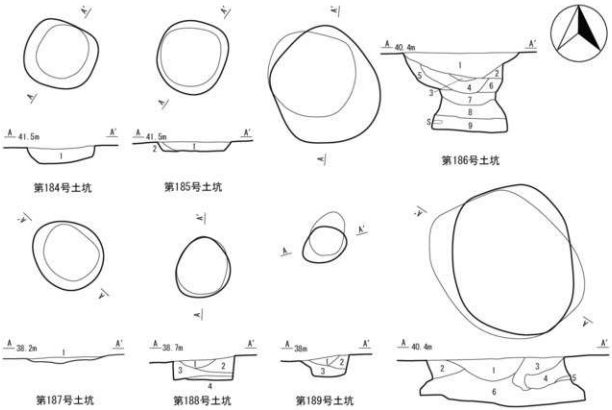
5　ピット（図 23）

[位置・確認]４基検出した。第 24 号ピットは、調査区南西側の斜面、Ⅰ S-120 グリッドに位置しており、Ⅴ層（漸移層）で黒褐色土の広がりとして検出した。第 25 ～ 27 号ピットは、調査区南西側の斜面平場、Ⅰ R-124 グリッドに位置しており、Ⅵ層（ローム層）で検出した。西側には第 205 号土坑が隣接しており、平成８年度の調査で検出された第 11 号住居跡と重複する可能性が考えられる。
[重複]第 24 号ピットは、南西側に第 193 号土坑が重複しており、本遺構が新しい。
[構造]平面形状は第 24 号ピットが楕円形で、以外はやや不整な円形である。規模は観察表のとおりである。
[堆積土]第 24 号ピットは、黒褐色土を主体に南部浮石が混入している。
[出土遺物]第 25 号ピットから縄文土器の破片が１点出土したが、細片であることから図示しなかった。
[小結]第 25 ～ 27 号ピットは、平成８年度の調査で検出された第 11 号住居跡に関連する可能性が考えられる。

ピット観察表

遺構名	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	旧遺構名
第24号ピット	36	28	11	SP1
第25号ピット	34	28	11	SP2
第26号ピット	24	20	38	SP3
第27号ピット	30	24	14	SP4

※長軸・短軸は検出面の計測値を記載。



第184号土坑

1層　10YR2/3黒褐色土　10YR4/6褐色土10%,南部浮石2～8mm1%

第185号土坑

1層　10YR2/3黒褐色土　10YR4/6褐色土5%,南部浮石2～6mm2%

2層　10YR3/4暗褐色土　南部浮石2～6mm2%

第186号土坑

1層　10YR2/1黒色土　10YR2/3黒褐色土10%,南部浮石1～10mm2%,炭化物1～3mm1%

2層　10YR2/3黒褐色土　10YR2/1黒色土20%,南部浮石1～5mm1%,炭化物1～3mm1%

3層　10YR2/2黒褐色土　10YR2/2黒褐色土20%,10YR1.7/1黒色土1%,南部浮石1～20mm2%,炭化物1～5mm1%

4層　10YR2/1黒色土　10YR2/3黒褐色土5%,南部浮石1～8mm1%

5層　10YR2/3黒褐色土　10YR2/1黒色土3%,南部浮石1～10mm1%

6層　10YR3/4暗褐色土　10YR2/1黒色土7%,南部浮石1～8mm1%

7層　10YR2/3黒褐色土　10YR4/4褐色土10%,南部浮石1～10mm1%

8層　10YR5/8黄褐色土　10YR2/3黒褐色土15%,南部浮石1～10mm1%

9層　10YR2/2黒褐色土　南部浮石1～5mm1%

第187号土坑

1層　10YR2/3黒褐色土　10YR3/4暗褐色土10%,南部浮石1～5mm1%

第188号土坑

1層　10YR2/3黒褐色土　10YR3/4暗褐色土3%,南部浮石1～10mm1%

2層　10YR4/6褐色土　10YR2/3黒褐色土2%,南部浮石1～8mm1%

3層　10YR3/3暗褐色土　10YR4/6褐色土15%,南部浮石2～10mm2%

4層　10YR4/6褐色土　南部浮石2～10mm1%

第189号土坑

1層　10YR2/2黒褐色土　10YR3/4暗褐色土10%,南部浮石2～10mm2%,炭化物1～2mm1%

2層　10YR2/3黒褐色土　10YR5/6黄褐色土7%,南部浮石2～5mm1%,炭化物1～2mm1%

3層　10YR2/3黒褐色土　10YR4/6褐色土5%,南部浮石1～5mm1%,炭化物1～2mm1%

第190号土坑

1層　10YR2/1黒色土　南部浮石1～2mm1%

2層　10YR2/3黒褐色土　10YR4/4褐色土10%,南部浮石1～10mm1%

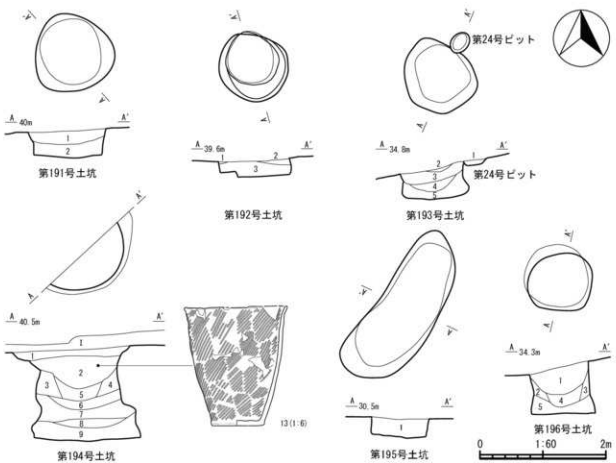
3層　10YR2/3黒褐色土　10YR4/4褐色土10%,10YR2/1黒色土5%,南部浮石1～8mm1%

4層　10YR4/6褐色土　南部浮石1～10mm1%

5層　南部浮石1～5mm　10YR2/3黒褐色土10%

6層　10YR2/1黒色土　10YR4/4褐色土2%,南部浮石1～8mm1%

図26　土坑



第191号土坑
1層　10YR2/3黒褐色土　南部浮石2～10mm2%
2層　10YR3/3暗褐色土　南部浮石2～15mm2%

第192号土坑
1層　10YR4/6褐色土
2層　10YR4/6褐色土　　10YR3/4暗褐色土1%,南部浮石1～8mm1%
3層　10YR2/2黒褐色土　南部浮石2～20mm2%

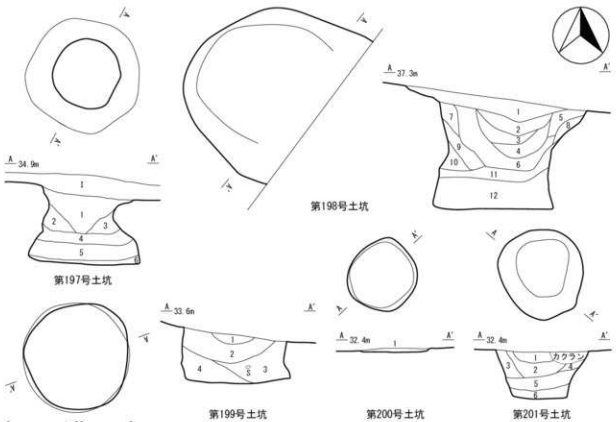
第193号土坑・第24号ピット
1層　10YR2/2黒褐色土　10YR3/4暗褐色土3%,南部浮石1～3mm1%
2層　10YR2/3黒褐色土　南部浮石1～5mm1%
3層　10YR2/3黒褐色土　10YR3/4暗褐色土10%,南部浮石1～3mm1%
4層　10YR3/4暗褐色土　10YR2/3黒褐色土5%,南部浮石1～8mm1%
5層　10YR3/4暗褐色土　10YR4/6褐色土10%,南部浮石1～10mm1%

第194号土坑
1層　10YR2/3黒褐色土　10YR2/1黒色土5%,南部浮石1～5mm1%,炭化物1～3mm1%
2層　10YR2/1黒色土　　10YR2/3黒褐色土10%,南部浮石1～10mm2%,炭化物1～10mm1%
3層　10YR2/2黒褐色土　10YR3/4暗褐色土7%,南部浮石1～5mm2%,炭化物1～5mm1%
4層　10YR2/3黒褐色土　10YR4/6褐色土3%,南部浮石1～5mm1%,炭化物1～10mm1%
5層　10YR2/2黒褐色土　10YR2/3黒褐色土5%,南部浮石2～10mm2%,炭化物1～8mm1%
6層　10YR2/3黒褐色土　10YR3/4暗褐色土10%,10YR5/8黄褐色土7%,南部浮石1～5mm1%,炭化物1～5mm1%
7層　10YR5/8黄褐色土　10YR8/2灰白色粘土5%,10YR2/2黒褐色土3%,南部浮石1～5mm1%
8層　10YR2/3黒褐色土　10YR3/4暗褐色土10%,南部浮石1～5mm1%
9層　10YR2/3黒褐色土　10YR4/6褐色土7%,10YR8/2灰白色粘土3%,南部浮石1～3mm1%

第195号土坑
1層　10YR2/3黒褐色土　10YR3/4暗褐色土20%,10YR4/6褐色土3%,南部浮石1～10mm2%

第196号土坑
1層　10YR2/2黒褐色土　10YR2/3黒褐色土7%,南部浮石2～10mm2%
2層　10YR2/3黒褐色土　10YR4/6褐色土15%,南部浮石1～3mm1%
3層　10YR2/3黒褐色土　10YR4/6褐色土10%,南部浮石1～3mm1%
4層　10YR2/3黒褐色土　10YR2/2黒褐色土7%,南部浮石2～8mm1%,炭化物1～3mm1%
5層　10YR2/2黒褐色土　10YR3/4暗褐色土7%,南部浮石1～5mm1%

図27　土坑



第197号土坑

1層 10YR2/3黒褐色土　10YR3/4暗褐色土10%、10YR4/2灰黄褐色土2%、南部浮石1～10mm2%、炭化物1～2mm1%
2層 10YR3/4暗褐色土　10YR5/8黄褐色土5%、南部浮石1～5mm1%
3層 10YR2/3黒褐色土　10YR3/4暗褐色土5%、南部浮石1～5mm1%
4層 10YR2/2黒褐色土　南部浮石1～8mm1%、炭化物1～2mm1%、
5層 10YR3/4暗褐色土　南部浮石2～10mm2%、炭化物1～2mm1%
6層 10YR2/2黒褐色土　南部浮石2～10mm1%

第198号土坑

1層 10YR2/1黒色土　10YR2/3黒褐色土10%、南部浮石1～10mm2%、炭化物1～2mm1%
2層 10YR3/4暗褐色土　10YR6/6明黄褐色土10%、10YR2/1黒色土7%、南部浮石1～15mm3%、炭化物1～2mm1%
3層 10YR2/2黒褐色土　10YR3/4暗褐色土7%、南部浮石1～10mm2%
4層 10YR3/4暗褐色土　10YR2/3黒褐色土3%、南部浮石2～8mm2%
5層 10YR3/4暗褐色土　10YR2/3黒褐色土7%、南部浮石1～10mm2%、炭化物1～3mm1%
6層 10YR2/2黒褐色土　10YR3/4暗褐色土10%、南部浮石1～15mm3%
7層 10YR2/3黒褐色土　10YR3/4暗褐色土15%、南部浮石1～8mm2%
8層 10YR4/6褐色土　10YR3/4暗褐色土10%、南部浮石1～5mm2%、炭化物1～2mm1%
9層 10YR4/6褐色土　10YR2/2黒褐色土3%、南部浮石1～5mm1%
10層 10YR8/2灰白色粘土　10YR7/6明黄褐色土15%、10YR5/4にぶい黄褐色土3%、南部浮石1～5mm1%
11層 10YR2/1黒色土　10YR4/6褐色土15%、10YR3/3暗褐色土10%、10YR8/1灰白色粘土2%、南部浮石1～15mm3%
12層 10YR3/4暗褐色土　10YR8/2灰白色粘土15、10YR5/4にぶい黄褐色粘土5%、10YR2/2黒褐色土7%、10YR4/6褐色土2%、南部浮石2～15mm3%

第199号土坑

1層 10YR6/8明黄褐色土　10YR3/4暗褐色土20%、南部浮石1～8mm1%、炭化物1～2mm1%
2層 10YR2/2黒褐色土　10YR3/3暗褐色土10%、10YR4/6褐色土2%、南部浮石2～10mm2%、炭化物1～2mm1%
3層 10YR2/1黒色土　10YR3/3暗褐色土5%、南部浮石2～8mm1%、炭化物1～2mm1%
4層 10YR2/2黒褐色土　10YR4/6褐色土10%、南部浮石1～8mm1%

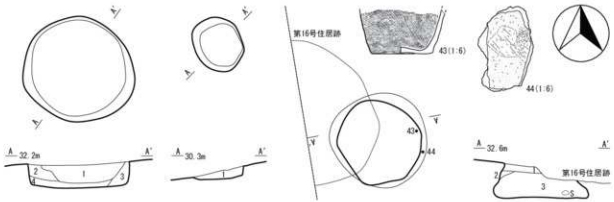
第200号土坑

1層 10YR2/2黒褐色土　10YR2/3黒褐色土5%、南部浮石1～3mm1%

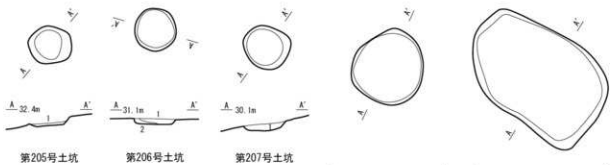
第201号土坑

1層 10YR2/1黒色土　南部浮石2～8mm2%
2層 10YR2/1黒色土　10YR2/3黒褐色土3%、南部浮石2～10mm2%
3層 10YR3/4暗褐色土　10YR2/1黒色土3%、南部浮石2～10mm2%
4層 10YR3/4暗褐色土　10YR2/3黒褐色土2%、南部浮石1～3mm1%
5層 10YR2/2黒褐色土　10YR3/4暗褐色土5%、南部浮石2～10mm2%
6層 10YR3/4暗褐色土　10YR2/3黒褐色土5%、南部浮石1～10mm1%

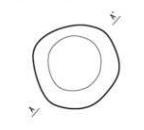
図28　土坑



第202号土坑　第203号土坑　第204号土坑

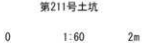


第205号土坑　第206号土坑　第207号土坑　第208号土坑　第209号土坑



第210号土坑

第211号土坑



第202号土坑
1層　10YR1.7/1黒色土　10YR3/3暗褐色土15%,南部浮石1～8mm2%
2層　10YR2/2黒褐色土　10YR2/3黒褐色土7%,南部浮石1～5mm2%
3層　10YR2/3黒褐色土　10YR3/4暗褐色土7%,南部浮石1～8mm2%
4層　10YR1.7/1黒色土　10YR2/3黒褐色土5%,10YR4/6褐色土3%,南部浮石1～5mm1%

第203号土坑
1層　10YR2/1黒色土　10YR2/3黒褐色土5%,10YR3/1黒褐色土3%,南部浮石1～3mm1%

第204号土坑
1層　10YR3/2黒褐色土　10YR3/4暗褐色土3%,南部浮石2～4mm1%
2層　10YR3/3暗褐色土　南部浮石3～5mm10%
3層　10YR3/1黒褐色土　10YR3/3暗褐色土15%,南部浮石2～4mm7%

第205号土坑
1層　10YR3/2黒褐色土　10YR4/4褐色土10%,南部浮石3～5mm2%

第206号土坑
1層　10YR2/3黒褐色土　10YR3/4暗褐色土3%,南部浮石1～3mm1%,炭化物1～2mm1%
2層　10YR3/4暗褐色土　南部浮石1～2mm1%

第207号土坑
1層　10YR2/3黒褐色土　10YR3/4暗褐色土10%,南部浮石1～8mm1%

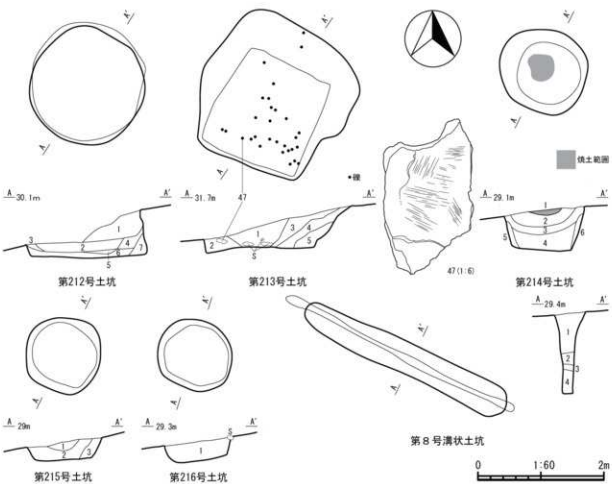
第208号土坑
1層　10YR2/1黒色土　南部浮石1～5mm2%
2層　10YR2/1黒色土　10YR2/3黒褐色土10%,南部浮石1～5mm1%

第209号土坑
1層　10YR2/3黒褐色土　10YR3/4暗褐色土10%,南部浮石1～5mm1%

第210号土坑
1層　10YR1.7/1黒色土　10YR3/4暗褐色土10%,南部浮石2～15mm3%
2層　10YR2/3黒褐色土　10YR3/4暗褐色土10%,10YR4/6褐色土2%,南部浮石2～15mm3%
3層　10YR2/2黒褐色土　南部浮石2～10mm1%

第211号土坑
1層　10YR2/1黒色土　南部浮石1～10mm2%
2層　10YR2/1黒色土　10YR3/4暗褐色土3%,南部浮石1～10mm1%

図29　土坑



第212号土坑

1層	10YR2/1黒色土	10YR2/3黒褐色土5%,南部浮石1～8mm2%
2層	10YR2/2黒褐色土	10YR2/3黒褐色土7%,南部浮石1～15mm3%
3層	10YR4/6褐色土	南部浮石1～15mm2%
4層	10YR2/2黒褐色土	10YR3/4暗褐色土7%,10YR4/6褐色土5%,南部浮石2～10mm3%
5層	10YR4/6褐色土	南部浮石1～3mm1%
6層	10YR3/4暗褐色土	10YR4/6褐色土7%,南部浮石1～8mm2%
7層	10YR3/4暗褐色土	10YR4/6褐色土2%,南部浮石1～5mm1%

第213号土坑

1層	10YR2/3黒褐色土	10YR2/2黒褐色土10%,10YR4/6褐色土5%,南部浮石2～10mm2%
2層	10YR2/3黒褐色土	10YR3/4暗褐色土3%,南部浮石1～3mm1%
3層	10YR2/2黒褐色土	10YR2/3黒褐色土5%,10YR3/4暗褐色土2%,南部浮石1～8mm1%
4層	10YR3/4暗褐色土	10YR2/3黒褐色土5%,南部浮石1～5mm1%
5層	10YR4/6褐色土	10YR3/4暗褐色土2%,南部浮石1～10mm1%

第214号土坑

1層	5YR5/8明赤褐色焼土	10YR3/4暗褐色土5%,南部浮石1～3mm1%
2層	10YR3/4暗褐色土	10YR2/3黒褐色土10%,5YR5/8明赤褐色焼土3%,南部浮石1～15mm3%
3層	10YR2/3黒褐色土	10YR3/4暗褐色土5%,南部浮石1～10mm2%
4層	10YR3/4暗褐色土	10YR2/3黒褐色土15%,7.5YR5/8明褐色焼土2%,南部浮石1～15mm1%
5層	10YR3/4暗褐色土	10YR2/3黒褐色土2%,南部浮石1～5mm1%
6層	10YR3/4暗褐色土	10YR2/3黒褐色土3%,10YR4/6褐色土2%,南部浮石1～5mm1%

第215号土坑

1層	10YR2/2黒褐色土	10YR3/4暗褐色土7%,南部浮石1～3mm1%,炭化物10mm1%
2層	10YR2/2黒褐色土	10YR3/4暗褐色土10%,南部浮石1～8mm1%
3層	10YR2/3黒褐色土	10YR2/2黒褐色土10%,10YR3/4暗褐色土5%,南部浮石1～5mm1%

第216号土坑

1層	10YR2/1黒色土	10YR2/3黒褐色土10%,南部浮石1～5mm1%

第８号溝状土坑

1層	10YR1.7/1黒色土	10YR3/4暗褐色土8%,南部浮石1～mm1%
2層	10YR2/3黒褐色土	10YR3/4暗褐色土3%,南部浮石1～3mm1%
3層	10YR4/6褐色土	10YR3/4暗褐色土10%,南部浮石1～2mm1%
4層	10YR1.7/1黒色土	10YR3/4暗褐色土5%,南部浮石1～mm1%

図30　土坑・溝状土坑

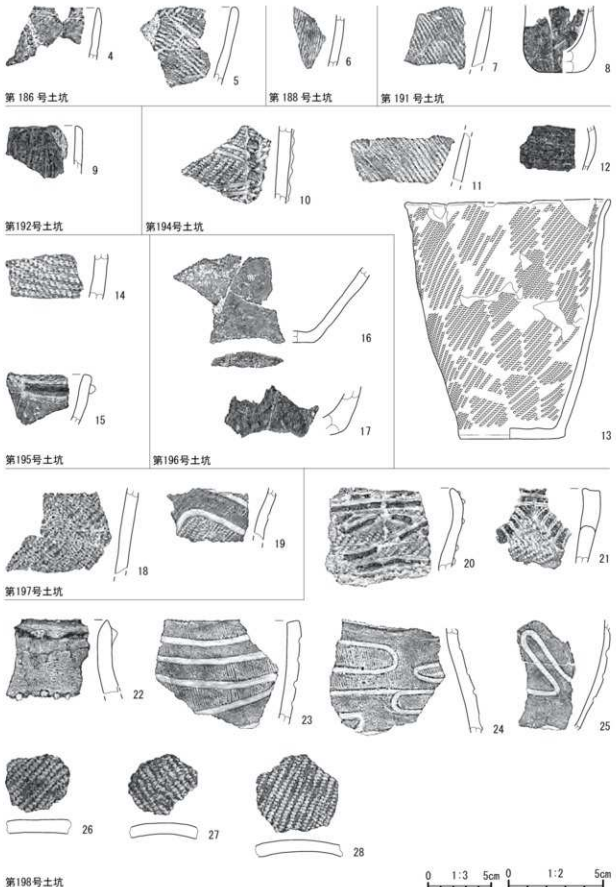

4
5
第 186 号土坑
6
第 188 号土坑
7
8
第 191 号土坑
9
第192号土坑
10
11
12
第194号土坑
14
15
第195号土坑
16
17
第196号土坑
13
18
19
第197号土坑
20
21
22
23
24
25
26
27
28
第198号土坑
0　1:3　5cm
0　1:2　5cm
8·9·12·17·26 ～ 28

図 31　遺構内出土遺物

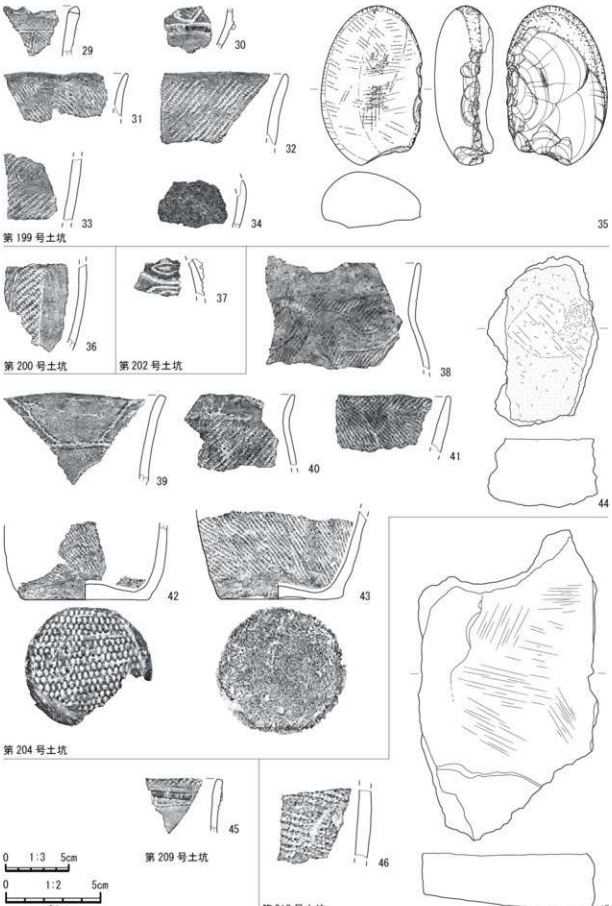

29
30
31
32
33
34
35
第 199 号土坑
36
第 200 号土坑
37
第 202 号土坑
38
39
40
41
44
42
43
第 204 号土坑
45
第 209 号土坑
46
第 213 号土坑
47
0 1:3 5cm
0 1:2 5cm
34

図 32　遺構内出土遺物

遺構内出土土器観察表

番号	遺構名	層位	時期	器種	外面特徴	内面特徴	備考
31-4	第186号土坑	覆土	縄文後期初頭	壺・鉢・深鉢類	LR→沈線→ミガキ	ミガキ	波状口縁の可能性あり
31-5	第186号土坑	覆土	縄文後期前半	深鉢	L縦→口唇部L横	ミガキ	
31-6	第188号土坑	覆土	縄文後期前半	深鉢	R単軸絡条体1縦	ミガキ	
31-7	第191号土坑	覆土	縄文後期前半	深鉢	LR縦	ミガキ	
31-10	第194号土坑	底面直上	縄文中期中葉	深鉢	RLR縦→貼付隆帯(押圧)→沈線	ナデ	海綿骨針混入
31-11	第194号土坑	5層	縄文後期前半	深鉢	L縦	ミガキ	
31-13	第194号土坑	6層	縄文後期前半	深鉢	RL縦、煤付着、ミガキ底	ミガキ	口径16cm、底径8.2cm、器高19.2cm
31-14	第195号土坑	7層	縄文中期中葉	深鉢	RLR斜	ナデ	
31-15	第195号土坑	8層	縄文後期初頭	深鉢	波状口縁、ナデ→貼付隆帯(ナデ)→LR押圧	ミガキ	海綿骨針混入
31-16	第196号土坑	9層	縄文後期前半	壺	ミガキ	ナデ	海綿骨針・金雲母混入
31-18	第197号土坑	10層	縄文前期前葉	深鉢	LR0段多条横	ナデ	植物繊維混入
31-19	第197号土坑	11層	縄文後期初頭	深鉢	RL縦→沈線→ミガキ	ミガキ	
31-20	第198号土坑	12層	縄文中期中葉	深鉢	RL縦→貼付隆帯(ナデ)	ミガキ	
31-21	第198号土坑	13層	縄文中期中葉	深鉢	波状口縁(頂部押圧)、貼付隆帯(R押圧)→LR結束1	ミガキ	
31-22	第198号土坑	14層	縄文中期後葉	深鉢	貼付隆帯→ナデ→刺突	ナデ	波状口縁の可能性あり、海綿骨針混入
31-23	第198号土坑	15層	縄文後期前半	深鉢	R単軸絡条体1縦→沈線→ナデ、煤付着	ミガキ	
31-24	第198号土坑	16層	縄文後期前半	壺・深鉢類	R単軸絡条体1縦→沈線→ナデ	ミガキ	海綿骨針混入
31-25	第198号土坑	17層	縄文後期前葉	壺・深鉢類	沈線→ミガキ	ミガキ	
32-29	第199号土坑	18層	縄文後期前葉	深鉢	口唇部押圧、ナデ・沈線	ミガキ	
32-30	第199号土坑	19層	縄文後期前葉	壺	LR縦・貼付隆帯→沈線→ナデ・ミガキ	ミガキ	海綿骨針混入
32-31	第199号土坑	20層	縄文後期前半	深鉢	RL横	ミガキ	
32-32	第199号土坑	21層	縄文後期前半	深鉢	RL縦	ミガキ	
32-33	第199号土坑	22層	縄文後期前半	深鉢	RL縦、煤付着	ミガキ	
32-36	第200号土坑	23層	縄文中期後葉	深鉢	RL縦→沈線→ミガキ，煤付着	ミガキ	
32-37	第202号土坑	24層	縄文後期前半	壺	貼付(沈線・刺突)→沈線→ミガキ	ミガキ	
32-38	第204号土坑	25層	縄文中期末	深鉢	沈線→RL縦→ミガキ、煤付着	ミガキ、口縁部煤付着	波状口縁の可能性あり、金雲母混入
32-39	第204号土坑	26層	縄文後期初頭	深鉢	LRH圧・沈線・ミガキ	ミガキ	海綿骨針混入
32-40	第204号土坑	27層	縄文後期初頭	深鉢	頭部RL押圧→RL縦→口縁部ミガキ、煤付着	ミガキ	海綿骨針混入
32-41	第204号土坑	28層	縄文後期前半	深鉢	LR縦→口唇部LR横、煤付着	ミガキ	
32-42	第204号土坑 I Q-123	29層 30層	縄文後期前半	深鉢	RL横→底部ユビナデ、網代底	ナデ	底径10cm
32-43	第204号土坑	31層	縄文後期前半	深鉢	RL横→底部ナデ、ナデ底	ナデ・ミガキ、煤付着	底径9.8cm
32-45	第209号土坑	32層	縄文後期前半	壺・鉢・深鉢類	LR横→ミガキ→沈線→貼付隆帯(縄文→沈線)	ミガキ	海綿骨針混入
32-46	第213号土坑	33層	縄文後期前半	深鉢	LR斜	ミガキ	海綿骨針混入

遺構内出土石器観察表

番号	遺構名	層位	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
32-35	第199号土坑	覆土	礫器	頁岩	127	80	47	645	石核の可能性あり
32-44	第204号土坑	覆土	台石・石皿類	溶結凝灰岩	137	89	54	736.8	
32-47	第213号土坑	覆土	台石・石皿類	花崗閃緑岩	249	146	57	2184.9	

遺構内出土土製品観察表

番号	遺構名	層位	種類	外面特徴	内面特徴	備考
31-8	第191号土坑	覆土	ミニチュア土器	ナデ	ナデ	底径[2]cm
31-9	第192号土坑	覆土	ミニチュア土器	ミガキ	ナデ	
31-12	第194号土坑	底面直上・覆土	ミニチュア土器	ミガキ	ミガキ	
31-17	第196号土坑	覆土	ミニチュア土器	ナデ	ナデ	
31-26	第198号土坑	覆土	円盤状土製品	RL縦、煤付着	ミガキ	重量11g
31-27	第198号土坑	覆土	円盤状土製品	LR縦、煤付着	ミガキ	海綿骨針混入、重量9.1g
31-28	第198号土坑	覆土	円盤状土製品	RL縦	ミガキ	重量19.1g
32-34	第199号土坑	覆土	ミニチュア土器	ナデ	ナデ	

6　遺構外出土遺物

出土総数は少なく、段ボール箱２箱である。遺物はⅡＬグリッドライン以南から散在した状況で出土しており、大半は土器片であった。石器や土製品は希少であり、土器片は風化などによる劣化や細片化が顕著であった。

土器（図 33、写真 32・33）

縄文時代後期初頭から前葉・晩期、弥生時代後期と考えられる破片が出土しており、縄文時代後期初頭から前葉を主体としている。

１・２は縄文時代後期前葉に位置づけられる十腰内Ⅰ式土器と考えられる。１は壺・鉢類の口頸部であり、口唇部には刻みが施されている。口縁部はミガキによる無文帯となっており、頸部には沈線が横位に施されている。２は壺・深鉢類の胴部である。幅１㎜の細い沈線で施文されており、沈線間はナデによる無文となっている。

３～ 10 は縄文時代後期初頭から前葉と考えられる。３は壺・鉢類の口頸部である。幅１㎜の細い沈線で施文されており、沈線間はナデによる無文となっている。４は深鉢の胴部であり、沈線が円状に施文されている。沈線間は RL の地文とミガキによる無文となっている。５～ 10 は深鉢であり、５・６は口頸部、以外は胴部である。５はＬが斜方向に施されている。６は LR が縦方向に施されている。７・10 はＲの単軸絡条体第５類が縦方向に施され、網目状となっている。また、10 は他の土器に比べ煤の付着が顕著である。８・９は RL が縦方向に施されている。

11・12 は縄文時代晩期と考えられる。11 は壺の口頸部である。口縁部はナデによる無文帯となっており、残存する胴部には LR が斜方向に施されている。口縁部の内面には、１条の沈線が横位に施されている。12 は深鉢の胴部であり、櫛状工具による条痕が施されている。

13 は壺の口頸部である。口縁部はナデによる無文帯となっており、残存する胴部には LR が羽状に施文されている。破片であることから、詳細な時期は判断し難いが、縄文時代後期から晩期の範疇と考えられる。

14 ～ 17 は弥生時代後期と考えられる甕・深鉢類である。14 は口縁部で地文として RL が横方向に施されており、沈線と竹管状工具による交互刺突文が施文されている。15 は胴部で地文として RL が斜方向に施されており、沈線と刻み状の刺突による交互刺突文が施文されている。16 は口頸部で RL が横方向に施されている。17 は胴部で条間が広いＬの単軸絡条体第１類が横と斜方向に施されている。

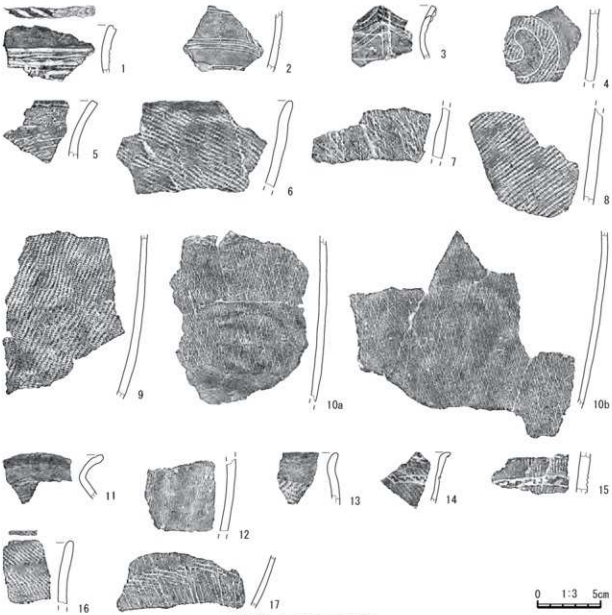


図 33　遺構外出土遺物

遺構外出土土器観察表

番号	出土地点	層位	時期	器種	外面特徴	内面特徴	備考
33-1	ⅠR-126	V層	縄文後期前葉	壺・鉢類	口唇部刻目、沈線→口縁部ミガキ	ミガキ	
33-2	ⅡA-128	V層	縄文後期前葉	壺・深鉢類	ナデ・沈線	ミガキ	
33-3	ⅡA-128	V層	縄文後期前半	壺・鉢類	波状口縁、RL縦・ナデ・沈線・波状部貼付(刻目)	ミガキ	
33-4	ⅠR-120	V層	縄文後期前半	深鉢	RL縦→沈線→ミガキ	ミガキ	
33-5	ⅡH-110	V層	縄文後期前半	深鉢	波状口縁か、L斜→口縁部ナデ	ミガキ	海綿骨針混入
33-6	ⅡD-115	V層	縄文後期前半	深鉢	LR縦閉端	ナデ	海綿骨針混入
33-7	ⅡA-129	V層	縄文後期前半	深鉢	R単軸絡条体5縦	ヘラナデ	
33-8	ⅠR-125	V層	縄文後期前半	深鉢	RL縦	ミガキ	
33-9	ⅠQ-123	V層 Ⅰ層	縄文後期前半	深鉢	RL縦	ミガキ	
33-10a	ⅠR-120	V層	縄文後期前半	深鉢	R単軸絡条体5縦→底部ミガキ、煤付着	ミガキ、煤付着	10b同一個体
33-10b	ⅠR-120	V層	縄文後期前半	深鉢	R単軸絡条体5縦、煤付着	ミガキ、煤付着、剥落顕著	10a同一個体

遺構外出土土器観察表

番号	出土地点	層位	時期	器種	外面特徴	内面特徴	備考
33-11	Ⅰ S-119	V層	縄文晩期	壺	LR斜→口縁部ナデ、赤色顔料付着か	口縁部沈線→ナデ	金雲母混入
33-12	Ⅱ A-129	V層	縄文晩期	深鉢	櫛条痕	ミガキ	
33-13	Ⅱ A-132	V層	縄文後・晩期	壺	LR縦→LR横→口縁部ナデ、煤付着	ミガキ	
33-14	Ⅰ S-126	V層	弥生後期	甕・深鉢類	RL横→沈線→刺突	ナデ	
33-15	Ⅱ C-133	V層	弥生後期	甕・深鉢類	RL斜→沈線→刺突	ナデ	
33-16	Ⅱ E-114	V層	弥生後期	甕・深鉢類	RL横	ナデ	海綿骨針混入
33-17	Ⅱ C-132 Ⅱ C-133	V層	弥生後期	甕・深鉢類	L単軸絡条体1横・斜	ナデ、煤付着	

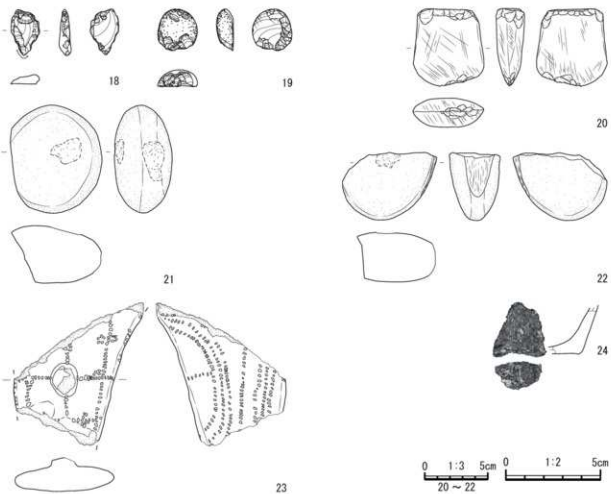


図 34　遺構外出土遺物

遺構外出土石器観察表

番号	出土地点	層位	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
34-18	Ⅱ D-115	V層	石錐	珪質頁岩	2.5	1.5	0.7	2.1	
34-19	Ⅱ A-128	V層	掻・削器	玉髄質珪質頁岩	2.2	2.1	0.9	5.2	
34-20	Ⅱ D-115	V層	磨製石斧	閃緑岩	62	57	23	124.9	
34-21	Ⅰ R-124	V層	敲石	安山岩	87	74	47	396	
34-22	Ⅱ A-129	V層	敲磨器	砂岩	55	74	41	206.9	

遺構外出土土製品観察表

番号	出土地点	層位	種類	外面特徴	内面特徴	備考
34-23	Ⅱ B-117	V層	土偶	突起貼付→刺突、背面沈線(割付線)		重量54.4g
34-24	Ⅱ A-129	V層	ミニチュア土器	ナデ、ナデ底	ナデ	

石器（図 34、写真 33）

剥片石器は石錐、掻・削器、礫石器は磨製石斧・敲石・敲磨器が出土した。

18 は石錐で珪質頁岩を石材としている。19 は掻・削器で玉髄質珪質頁岩を石材としている。

20 は磨製石斧で閃緑岩を石材としている。21 は敲石で安山岩を石材としており、正面と側面に敲きの痕跡がみられる。22 は敲磨器で砂岩を石材としており、正面に敲き、側面に磨りの痕跡がみられる。

土製品（図 34、写真 33）

土偶とミニチュア土器が出土した。

23 は板状土偶の体部であり、正面の中央には円柱状の突起が貼り付けられている。表面の文様は連続する刺突で表現されており、正面は格子状、裏面は弧状に施文されている。裏面の刺突は、沈線上や沈線に沿って施されており、腕部の割れ口には縦位の貫通痕がみられる。

24 はミニチュア土器である。壷・鉢類の底部であり、内外面はナデによって調整されている。

（野村）

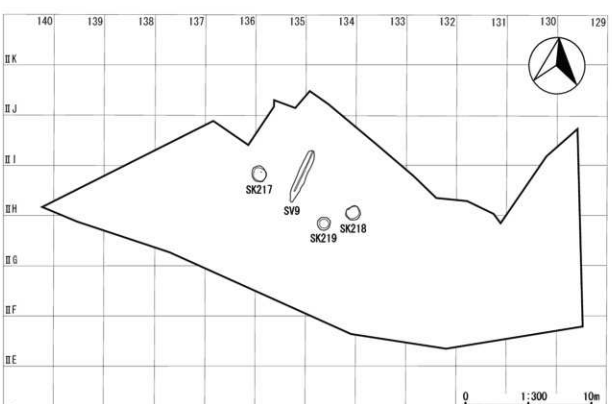
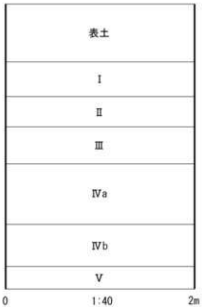


図35　平成27年度 遺構配置図

第5節　平成27年度

1　基本土層（図36、写真34）

5層に分層しており、Ⅳ層は上位からａ・ｂ層に細分した。Ⅰ層は黒色土を主体に、浮石が混入している。Ⅱ層は黒褐色土を主体に、白色浮石が混入している。Ⅲ層は暗褐色土を主体に、浮石や中撫浮石が混入している。Ⅳａ層は黒色土、Ⅳｂ層は黒褐色土を主体としている。Ⅳａ・ｂ層には浮石が混入しており、下位から上位に希薄となっている。Ⅴ層は褐色土を主体に、浮石が混入するローム層であり、遺構検出を行った層である。



Ⅰ層　10YR2/1黒色土　浮石3%
Ⅱ層　10YR2/2黒褐色土　白色浮石5%
Ⅲ層　10YR3/4暗褐色土　浮石3%、中撫浮石混入
Ⅳａ層　10YR2/1黒色土　浮石5%
Ⅳｂ層　10YR2/2黒褐色土　浮石10%
Ⅴ層　10YR4/4褐色土　浮石3%

図36　基本土層

2　土坑

第217号土坑（図37、写真34・35）旧SK 1

[位置・確認]調査区西側、Ⅱ H-135・136グリッドに位置しており、Ⅴ層（ローム層）で暗褐色土や褐色土の広がりとして検出した。

[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面は底部が若干張り出す形状である。底面はほぼ平坦に仕上げられており、北側に逆茂木痕と考えられるピットを検出した。検出面の規模は長軸122・短軸111㎝、底面の規模は長軸109・短軸97㎝、深さは71㎝である。ピットの平面形状は円形であり、開口部は径約5㎝、深さは21㎝であった。

[堆積土]黒褐色土や褐色土を主体に、ローム土や中撫浮石が混入している。

[出土遺物]縄文時代中期初頭から前葉に位置づけられる円筒上層ａ式土器と考えられる破片が1点出土した（1）。深鉢の口縁部であり、LRの押圧と隆帯で文様帯が構成されている。

[小結]底面から逆茂木痕と考えられるピットが検出されたことから、縄文時代の落とし穴と考えられる。

第218号土坑（図37、写真35）旧SK 2

[位置・確認]調査区西側、Ⅱ H-134グリッド及びその周辺に位置しており、Ⅴ層（ローム層）で暗褐色土の広がりとして検出した。

[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は径111㎝、底面の規模は径94㎝、深さは63㎝であった。

[堆積土]暗褐色土や黒褐色土を主体に、ローム土が混入している。

[出土遺物]縄文時代前期前葉と弥生時代後期と考えられる土器片が数点出土したが、後者は細片であり、根やカクランに混入した可能性が考えられる。2は深鉢の胴部であり、LLR前々段半撚が横方向に施され、胎土には植物繊維が混入している。時期は縄文時代前期前葉と考えられる。

[小結]詳細は不明である。

第219号土坑（図37、写真35）旧SK３

[位置・確認]調査区西側、Ⅱ G-134 グリッドに位置しており、Ⅴ層（ローム層）で黒褐色土の広がりとして検出した。

[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸106・短軸101㎝、底面の規模は長軸74・短軸72㎝、深さは49㎝であった。

[堆積土]黒褐色土や褐色土を主体に、ローム土が混入している。

[出土遺物]縄文時代前期前葉と考えられる破片が４点出土した。３は深鉢の胴部であり、RLが斜方向に施され、胎土には植物繊維が混入している。

[小結]詳細は不明である。

３　溝状土坑

第９号溝状土坑（図37、写真35）旧SV１

[位置・確認]調査区西側、Ⅱ H-135 グリッド及びその周辺に位置しており、Ⅴ層（ローム層）から黒褐色土の広がりとして検出した。

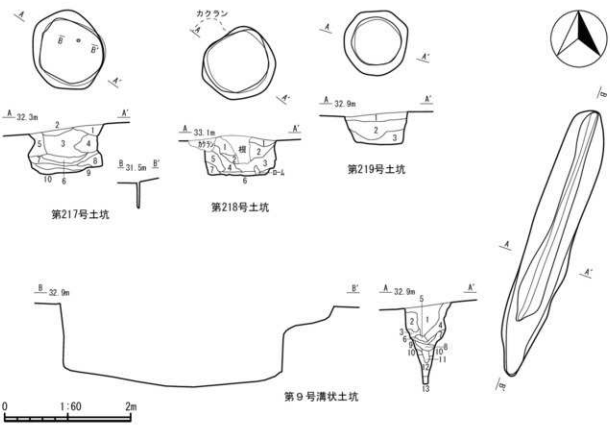
[構造]平面形状は細長い楕円形であり、断面は狭小な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸440・短軸68㎝、底面の規模は長軸349・短軸100㎝、深さは125㎝であった。

[堆積土]上位には黒褐色土や暗褐色土、下位には黄褐色土や褐色土が主体となって堆積し、ローム土や南部浮石が混入している。壁土の崩落を主体とした自然堆積と考えられる。

[出土遺物]確認されなかった。

[小結]詳細は不明であるが、形状から縄文時代の落とし穴と考えられる。

（野村）



第217号土坑
1層　10YR4/4褐色土　ローム1%
2層　10YR3/3暗褐色土　ローム1%,中散浮石混入
3層　10YR2/2黒褐色土　ローム5%
4層　10YR3/4暗褐色土　ローム1%
5層　10YR4/6褐色土　ローム1%
6層　10YR2/2黒褐色土　ローム3%
7層　10YR4/4褐色土　ローム1%
8層　10YR4/6褐色土　ローム3%(八戸火山灰崩落土主体)
9層　10YR2/3黒褐色土　ローム1%
10層　10YR5/6黄褐色土　(ローム混合土層)

第218号土坑
1層　10YR3/3暗褐色土　ローム1%
2層　10YR2/3黒褐色土　ローム2%
3層　10YR4/4褐色土　ローム2%
4層　10YR3/3暗褐色土　ローム2%
5層　10YR4/4褐色土　ローム1%
6層　10YR2/2黒褐色土　ロームブロック混入
7層　10YR3/3暗褐色土　ローム1%

第219号土坑
1層　10YR2/3黒褐色土　ローム3%
2層　10YR4/6褐色土　ローム5%
3層　10YR5/6黄褐色土　ローム2%

第9号溝状土坑
1層　10YR2/2黒褐色土　ローム3%
2層　10YR4/6褐色土　(ローム主体層)
3層　10YR3/4暗褐色土　(ローム主体層)
4層　10YR3/3暗褐色土　(ローム主体層)
5層　10YR2/2黒褐色土　ローム1%
6層　10YR3/4暗褐色土　(ローム主体層)
7層　10YR4/4褐色土　(南部浮石主体層)
8層　10YR2/2黒褐色土　ローム1%
9層　10YR4/4褐色土　(南部浮石主体層)
10層　10YR4/6褐色土　(南部浮石主体層)
11層　10YR4/4褐色土　南部浮石主体層に10YR2/1黒色土混在
12層　10YR5/6黄褐色土　(八戸火山灰崩落土層)
13層　10YR2/2黒褐色土

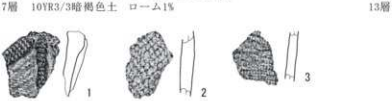


図37　土坑・溝状土坑

遺構内出土土器観察表

番号	遺構名	層位	時期	器種	外面特徴	内面特徴	備考
37-1	第217号土坑	覆土	縄文中期前半	深鉢	波状口縁,LR押圧→貼付隆帯(LR押圧)	ミガキ	
37-2	第218号土坑	覆土	縄文前期前葉	深鉢	LR前々段半燃横	ナデ	植物繊維混入
37-3	第219号土坑	覆土	縄文前期前葉	深鉢	RL斜	ナデ	植物繊維混入

第４章　自然科学分析

第１節　放射性炭素年代測定

株式会社　パレオ・ラボ
AMS 年代測定グループ

1.　はじめに

青森県八戸市に位置する弥次郎窪遺跡の貝層を構成する貝について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

2.　試料と方法

測定試料の情報、調製データは表１のとおりである。

試料は、第 171 号土坑から検出された貝層（貝中面１、１層）から採取された。貝層の考古学的な想定年代は、縄文時代後期である。貝層は海産のイガイとフジツボ類から構成され、これらのうちイガイの右殻１点を測定の対象とした。イガイの腹縁から破片を割り取り、試料とした。

超音波洗浄と塩酸によるエッチングを行った後、リン酸との反応による CO_2 ガス化、CO_2 ガスの精製、水素還元によるグラファイト化を行った。

グラファイトは、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表1　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	考古学的手法による想定年代	前処理データ	前処理
PLD-24305	試料番号：試料1 位置：貝中面1 層位：1層	種類:貝（イガイ，右殻） 状態:dry	縄文時代後期	前処理前重量:510.70mg 燃焼量:49.22mg 精製炭素量:4.43mg 炭素回収量:0.99mg	超音波洗浄 酸エッチング(塩酸:1.2N)

3.　結果

表２に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta\ ^{13}C$）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、図１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（^{13}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

表2　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	測定回数	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-24305 試料番号：試料1	8	−2.42±0.27	4061±22	4060±20	Marine09(ΔR=12±24)： 2186BC(68.2%)2062BC	Marine09(ΔR=12±24)： 2254BC(95.4%)2012BC

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：Marine09）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4.　考察

海産物の ^{14}C 年代は、同時代の陸産物に比べて、地球平均で ^{14}C 年代にして約 400 年古くなる。これは海洋リザーバー効果と呼ばれる。さらに、海域ごとに海洋リザーバー効果の大きさは異なる。

今回測定したイガイの ^{14}C 年代（4060 ± 20 BP）も当時の陸産物の ^{14}C 年代よりも古く、この値をそのまま用いるのは正しくない。そこで今回は、暦年較正に海産物用の較正曲線である Marine09 を用いると共に、八戸における海洋リザーバー効果の補正値（Δ R）12 ± 24（Yoshida et al., 2010）で海洋リザーバー効果の海域差の補正を行った。海洋リザーバー効果を補正した暦年較正値である 2254-2012 cal BC（2σ暦年代範囲：確率 95.4%）をイガイの暦年代として扱う。小林謙一による縄文土器編年と暦年較正値との対応関係（小林, 2008）に照らすと、イガイの年代は縄文時代後期前葉に相当する。

伊藤　茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎

引用・参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

榎本剛治（2008）十腰内Ⅰ式土器．小林達雄編「総覧縄文土器」：530-535，アム・プロモーション．

小林謙一（2008）縄文時代の暦年代．小杉　康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学2　歴史のものさし－縄文時代研究の編年体系－」：257-269，同成社．

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」：3-20，日本第四紀学会．

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

Yoshida, K., Hara, T., Kunikita, D., Miyazaki, Y., Sasaki, T., Yoneda, M. and Matsuzaki, H. (2010) Pre-Bomb Marine Reservoir Ages in the Western Pacific. Radiocarbon, 52, 1197-1206.

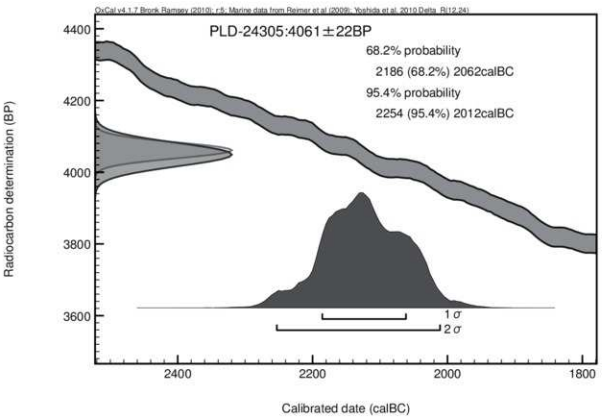


図１　暦年較正結果

第２節　弥次郎窪遺跡出土の貝類と甲殻類

株式会社　パレオ・ラボ

1.　はじめに

青森県八戸市大字十日市字弥次郎窪に位置する弥次郎窪遺跡でまとまって出土した貝類（甲殻類も含む）について、同定結果を報告する。なお、イガイ１点の 14C 年代測定を行っており、海洋リザーバー効果を補正した暦年較正結果は 2254-2012 cal BC（2 σ暦年代範囲：確率 95.4%）で、縄文時代後期前葉に相当する年代が得られている（放射性炭素年代測定の項参照）。

2.　試料と方法

試料は、50 cmほどの広がりを持つ第 171 号土坑の１層から出土した貝類である。土坑に廃棄された可能性が考えられている。

試料は、１層中の位置により貝上面と、貝中面１、貝中面２、貝中面３に区分され、取上日（120530 か 120531）で分けられていた。また試料は、青森県埋蔵文化財調査センターにより、２㎜メッシュと４㎜メッシュの篩を用いた節分けが行われていた。試料数は 12 試料である。

貝類については、２㎜メッシュと４㎜メッシュで回収された試料から選別した。貝類のうち、二枚貝綱は殻頂のある試料、腹足綱（巻貝）は２巻以上残る試料を全て選別し、同定と計数の対象とした。甲殻類については、４㎜メッシュで回収された全ての試料を選別し、同定と計数の対象とした。選別は肉眼と実体顕微鏡を併用した。同定は肉眼と実体顕微鏡下で標本との比較により行った。同定後の試料は、青森県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

3.　結果と考察

表１に同定された分類群の一覧を示す。同定されたのは、貝類が腹足綱のチヂミボラと二枚貝綱のイガイの２分類群、甲殻類がフジツボ亜目の一種の１分類群、計３分類である。チヂミボラは、表面平滑な巻貝で、殻高 29.4 ㎜。イガイは、長楕円形の二枚貝で、内面に真珠光沢があり、殻頂が尖り鷲鼻状に曲がる。殻長の残存長は最大で 60 ㎜程度。フジツボ類（亜目）とした分類群は、破片のみであり、フジツボ類に含まれる種も多いことから、科以上の詳細な同定に至らなかった。海産微小巻貝と陸産微小巻貝とした分類群は現生標本の不足から同定に至らなかった。海産微小巻貝は殻が厚く不透明、陸産微小巻貝は殻が薄く透明感があるものを分類した。

表1　弥次郎窪遺跡出土の動物遺体

軟体動物門	Vertebrata
腹足綱	Gastropoda
チヂミボラ	*Nucella freycineti*
二枚貝綱	Bivalvia
イガイ	*Mytilus coruscus*
節足動物門	Arthropoda
甲殻亜門	Crustacea
フジツボ亜目の一種	Balanomorpha fam., gen. et sp. Indet.

表２に計数結果を示す。貝類では、イガイが 297 個体と最も多かった。他にチヂミボラ１個体が同定された。海産微小巻貝２個体、陸産微小巻貝４個体が見られた。また、甲殻類のフジツボ類が 136

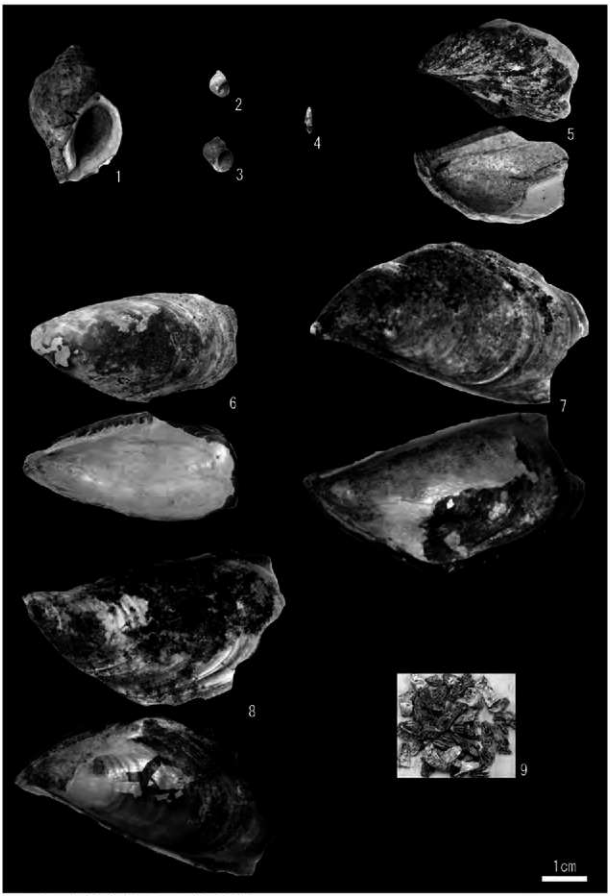
破片見られた。

イガイは潮間帯から水深 20m 程度までの岩礁に付着して生息する。チヂミボラは潮間帯下部の岩礁に生息する。フジツボ類も潮間帯から浅海の岩礁に付着して生息する。したがって、岩礁においてイガイを主な対象として貝類採集が行われ、それに伴いチヂミボラやフジツボ類が採取されたと考えられる。いずれも食用可能なので、食用とされた後に廃棄されたと考えられる。陸産微小巻貝は貝殻の廃棄前か後に地表に生息しており、貝層の間隙に侵入した可能性が考えられる。

中村賢太郎

表2　弥次郎窪遺跡出土の貝類と甲殻類の計数結果

層位	位置(メッシュ、取上日)\分類群	貝類					甲殻類	備考
		腹足綱			二枚貝綱			
		チヂミボラ	海産微小巻貝	陸産微小巻貝	イガイ		フジツボ類(破片数)	
					左殻	右殻		
1層	貝上面(4nn、120530)				10	14	9	
	貝上面(2nn、120530)				2	1	—	
	貝中面1(4nn、120530)				40	27	24	右殻1点14C年代測定
	貝中面1(4nn、120531)				28	25	9	
	貝中面1(2nn、120530)			1	3	3	—	
	貝中面1(2nn、120531)		1		5	3	—	
	貝中面2(4nn、120530、大タッパー)				64	61	47	
	貝中面2(4nn、120530、小タッパー)				41	42	21	
	貝中面2(2nn、120530)			2	14	6	—	
	貝中面2(2nn、120530)				7	6	—	イガイ殻頂左右各1含む
	貝中面3(4nn、120531)	1	1		73	66	26	
	貝中面3(2nn、120531)			1	10	9	—	
	合計	1	2	4	297	263	136	



図版1　弥次郎窪遺跡出土の貝類と甲殻類
1．チヂミボラ（貝中面3）　2．海産微小巻貝（貝中面1）　3．海産微小巻貝（貝中面3）
4．陸産微小巻貝（貝中面1）　5．イガイ左殻（貝中面1）　6．イガイ右殻（貝中面1、^{14}C年代測定試料）
7．イガイ左殻（貝中面2）　8．イガイ右殻（貝中面2）　9．フジツボ類（貝中面2）

第５章　総括

弥次郎窪遺跡は、新井田川とその支流である松館川の合流地点付近、新井田川右岸に発達する高館段丘西縁の標高 20 ～ 45 mの緩斜面に立地している。

本遺跡は、一般国道 45 号洋野階上道路建設事業に伴い、平成８・21・24・25・27 年度に発掘調査が実施された。調査の結果、縄文時代中期中葉から後期前葉と弥生時代前期を主体に、縄文時代早期から平安時代に至る遺構・遺物が検出された。また、縄文時代における地滑りなどの地殻変動の痕跡も確認されている。調査は平成８年度を主体としており、その調査成果は報告書として刊行されている（青森県教育委員会 1998）。平成 21 年度以降の調査は、平成８年度の未調査部分及び隣接地を対象としている。

これまでに検出された遺構数は、住居跡 17 軒、竪穴遺構８基、土坑 206 基、溝状土坑（溝状ピット）９基、埋設土器遺構７基、焼土遺構 10 基、屋外炉１基、製鉄炉１基、ピット 27 基である。

住居跡は縄文時代後期初頭から前葉を主体に、晩期前葉や弥生時代前期のものが検出された。平成 25 年度の調査で検出された第 16 号住居跡は、縄文時代晩期前葉と考えられる。

竪穴遺構は住居の可能性が考えられるが、炉や硬化面などが確認されなかった遺構である。縄文後期前葉を主体に、晩期前葉や弥生時代のものが検出された。

土坑は縄文時代中期中葉から後期前葉を主体に、縄文時代中期から弥生時代後期のものが検出された。平成 27 年度の調査で検出された第 218・219 号土坑は、縄文時代前期前葉の可能性も考えられるが、位置づけの指標は数点の土器片であり、明確には判断し難い。

溝状土坑（溝状ピット）は詳細不明なものが多いが、縄文時代後期と考えられるものが検出された。平成 24 年度の調査で検出された第７号溝状土坑は、出土した土器片から縄文時代後期の可能性が考えられる。

埋設土器遺構は縄文時代後期前葉を主体に、弥生時代前期のものも検出された。平成 24 年度の調査で検出された第７号埋設土器遺構は、縄文時代後期前葉に位置づけられる十腰内Ⅰ式期のものと考えられる。

焼土遺構は詳細不明なものが多いが、縄文時代後期初頭と考えられるものが検出された。

屋外炉は１基検出された。本来は住居内の炉であった可能性があり、重複や形状から縄文時代後期の可能性が考えられる。

製鉄炉は１基検出された。詳細は不明であるが、土師器片が数点出土したことから、平安時代の可能性が考えられる。

ピットは平成 24・25 年度の調査で検出された。平成 25 年度の調査で検出された第 25 ～ 27 号ピットについては、平成８年度の調査で検出された第 11 号住居跡に関連する可能性が考えられる。

平成 21 年度以降の調査成果については、平成８年度の調査成果を補足するものであった。縄文時代前期前葉の土器片が僅かであるが出土しており、前回の調査で確認された縄文時代早期と中期を繋ぐ新たな知見となった。

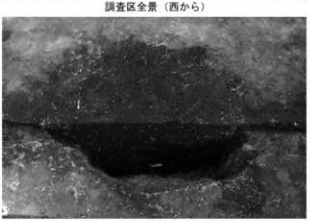
（野村）

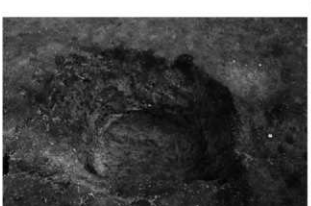
参考文献

青森県教育委員会 1998『見立山（１）遺跡 弥次郎窪遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 238 集

調査区全景（西から）

調査区全景（東から）


第165号土坑堆積状況（北西から）


第165号土坑完掘状況（北西から）

第6号溝状土坑完掘状況（北から）

写真1　平成21年度 調査区全景・土坑・溝状土坑

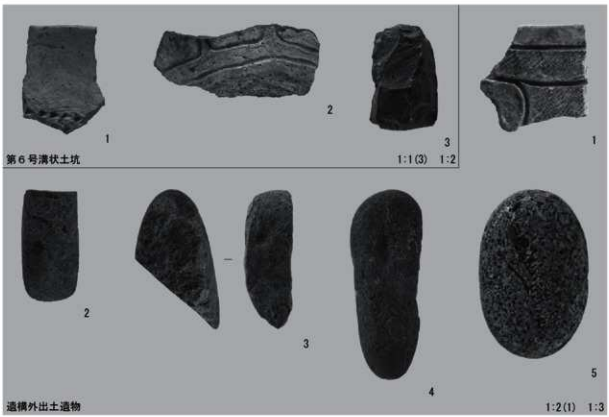


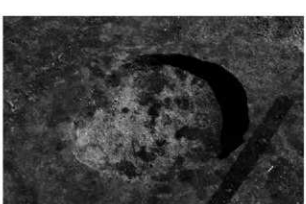
写真２　平成 21 年度 遺構内出土遺物・遺構外出土遺物

調査区完掘状況（西から）

IM-110 グリッド付近完掘状況（西から）

IM-111 グリッド付近基本土層（南から）

第 166 号土坑堆積状況（南東から）



第 166 号土坑完掘状況（南から）

写真３　平成 24 年度Ａ区 調査区完掘状況・基本土層・土坑

第 167 号土坑堆積状況（北西から）

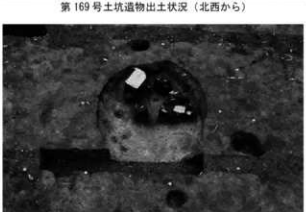
第 167 号土坑完掘状況（北西から）

第 168 号土坑堆積状況（北西から）

第 168 号土坑遺物出土状況（北西から）

第 169 号土坑遺物出土状況（北西から）

第 169 号土坑堆積状況（北西から）


第 169 号土坑遺物出土状況（北西から）

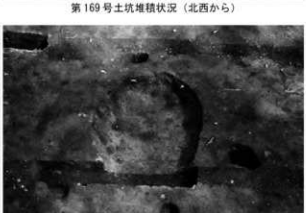
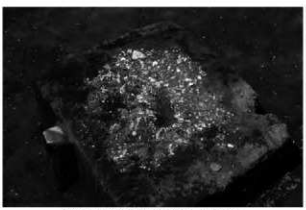

第 169 号土坑完掘状況（北西から）

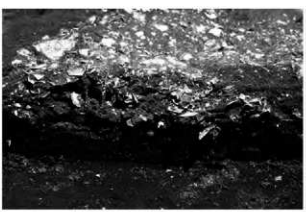
写真 4　平成 24 年度 A 区 土坑

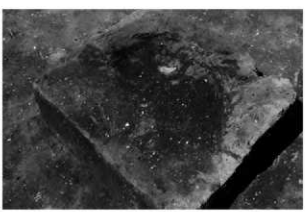
第 170 号土坑堆積状況（南東から）

第 170 号土坑完掘状況（南東から）


第 171 号土坑貝殻検出状況（南から）

第 171 号土坑堆積状況（南西から）


第 171 号土坑堆積状況（南西から）


第 171 号土坑完掘状況（南から）

第６号焼土遺構堆積状況（南東から）

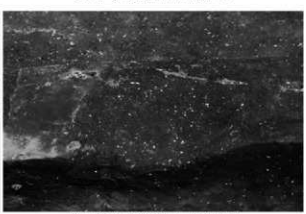

第６号焼土遺構完掘状況（南東から）

写真５　平成 24 年度Ａ区 土坑・焼土遺構

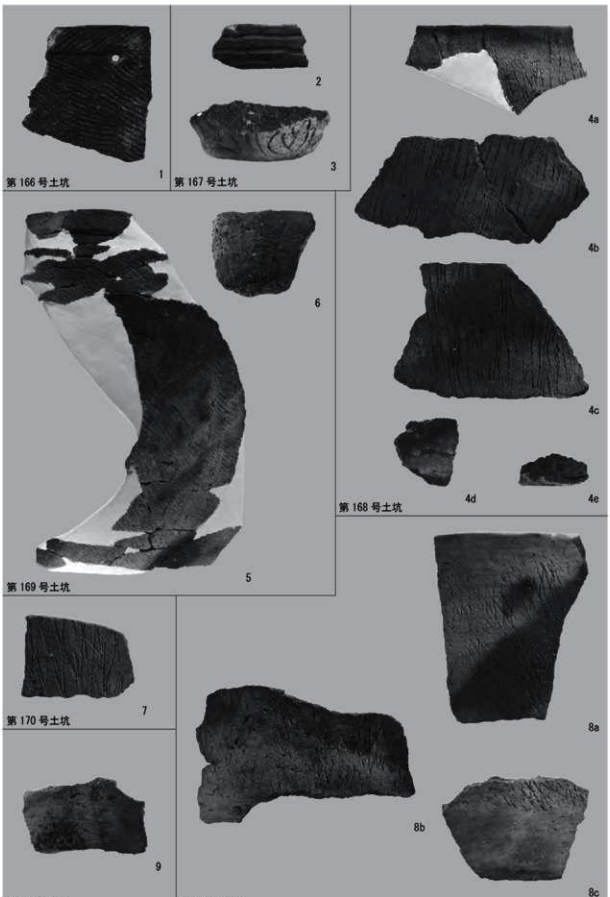


写真6　平成24年度A区 遺構内出土遺物　1:3(5)　1:1(3・6)　1:2

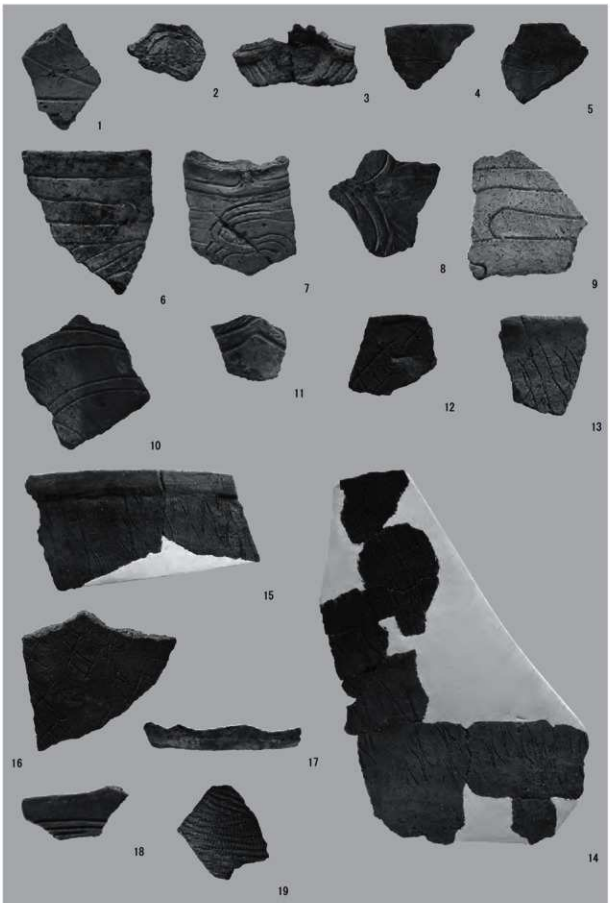
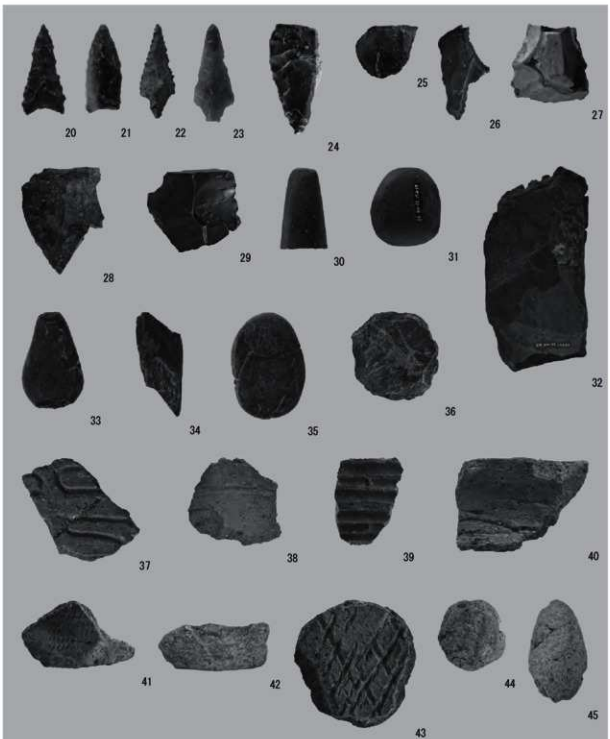


写真7　平成24年度A区 遺構外出土遺物　1:2



1:3(31・32・34)　1:2(25～28・33・35・36)　1:1

写真8　平成24年度A区 遺構外出土遺物

調査区全景（南西から）

調査区南半完掘状況（北東から）

写真9　平成24年度B区 調査区完掘状況

調査区遠景　（南東から）

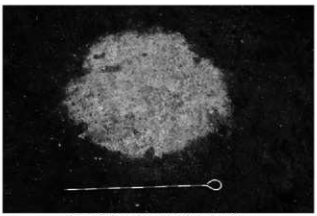
調査区北半完掘状況（北東から）

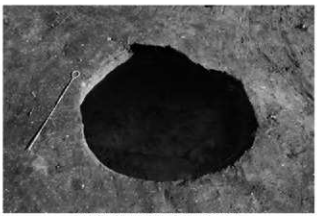
調査前風景（南西から）

基本土層№１（北西から）

基本土層№２（北西から）

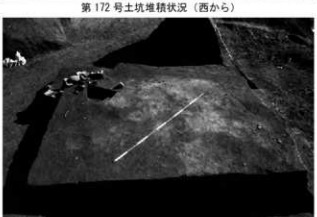
写真 10　平成 24 年度Ｂ区 調査区遠景・調査前風景・調査区北半完掘状況・基本土層


第 172 号土坑検出状況（西から）

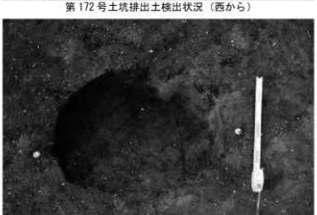

第 172 号土坑完掘状況（北西から）

第 172 号土坑堆積状況（西から）

第 172 号土坑堆積状況（北西から）

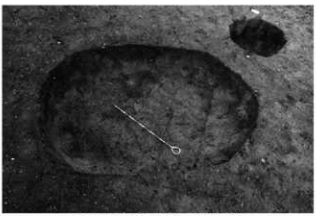

第 172 号土坑排出土検出状況（西から）

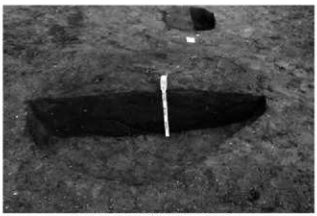
第 172 号土坑排出土堆積状況（西から）


第 173 号土坑完掘状況（南東から）

第 173 号土坑堆積状況（南東から）

写真 11　平成 24 年度Ｂ区 土坑

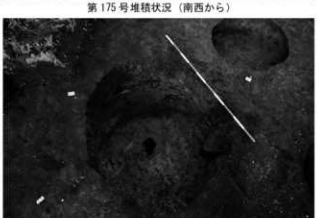

第 174 号土坑完掘状況（南西から）

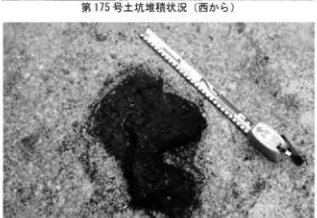

第 174 号土坑堆積状況（南西から）

第 175 号土坑完掘状況（南西から）

第 175 号堆積状況（南西から）

第 175 号土坑堆積状況（西から）

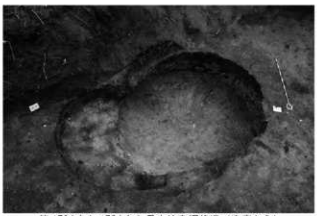

第 175 号土坑赤色顔料出土状況（南西から）


第 175 号土坑赤色顔料出土状況（南西から）

第 175 号土坑周辺調査風景（南西から）

写真 12　平成 24 年度Ｂ区 土坑

第 176 号土坑完掘状況（東から）

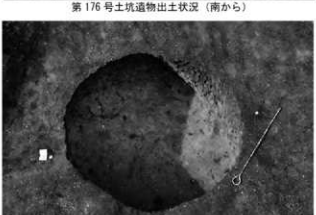

第 176（左）・179（右）号土坑完掘状況（南東から）

第 176（左）・179（右）号土坑堆積状況（南東から）

第 176（左）・179（右）号土坑堆積状況アップ（東から）

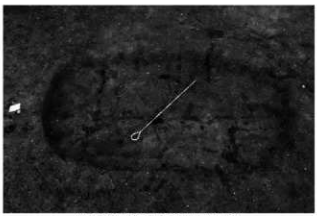
第 176 号土坑遺物出土状況（南から）

第 176 号土坑遺物出土状況（西から）


第 177 号土坑完掘状況（南東から）

第 177 号土坑堆積状況（南東から）

写真 13　平成 24 年度Ｂ区 土坑


第 178 号土坑完掘状況（南東から）

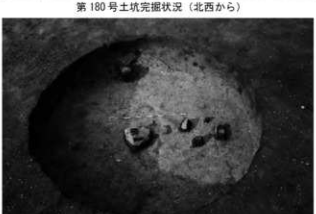
第 178 号土坑堆積状況（南東から）

第 178 号土坑遺物出土状況（南東から）

第 180･181 号土坑完掘状況（北西から）

第 180 号土坑完掘状況（北西から）

第 180 号土坑堆積状況（西から）


第 181 号土坑遺物出土状況（東から）

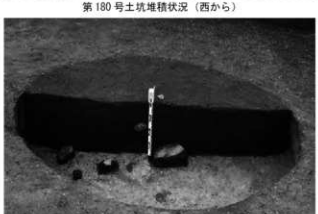
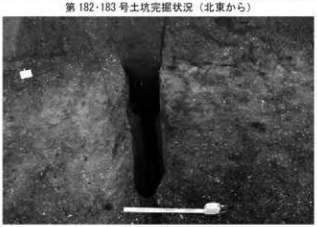
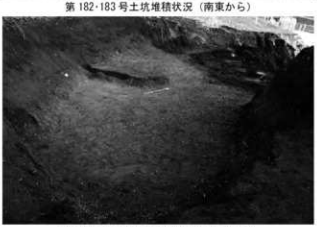

第 181 号堆積状況（西から）

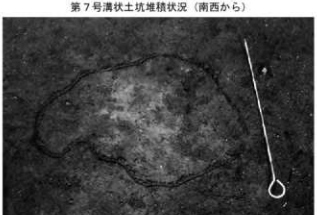
写真 14　平成 24 年度Ｂ区 土坑

第 182・183 号土坑完掘状況（北東から）

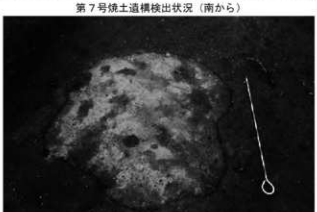
第 182・183 号土坑堆積状況（南東から）


第７号溝状土坑堆積状況（南西から）


第７号溝状土坑周辺完掘状況（北西から）


第７号焼土遺構検出状況（南から）

第７号焼土遺構堆積状況（南から）


第８号焼土遺構検出状況（南から）

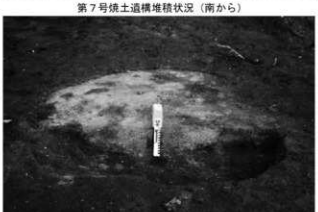
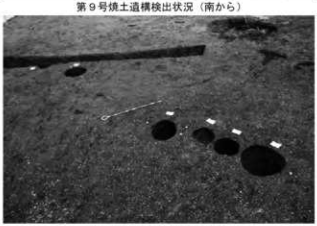
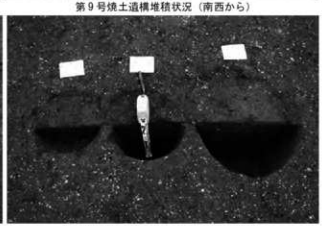

第８号焼土遺構堆積状況（南西から）

写真 15　平成 24 年度Ｂ区　土坑・溝状土坑・焼土遺構

第９号焼土遺構検出状況（南から）

第９号焼土遺構堆積状況（南西から）


ピット群完掘状況（東から）


第 21 ～ 23 号ピット堆積状況（南東から）

第７号埋設土器遺構検出状況（南東から）

第７号埋設土器遺構堆積状況（南東から）

第７号埋設土器遺構周辺調査状況（南西から）

Ⅱ H-106 グリッド調査状況（北から）

写真 16　平成 24 年度Ｂ区 焼土遺構・ピット・埋設土器遺構・調査状況

写真17　平成24年度B区 遺構内出土遺物　1:4(20)　1:3

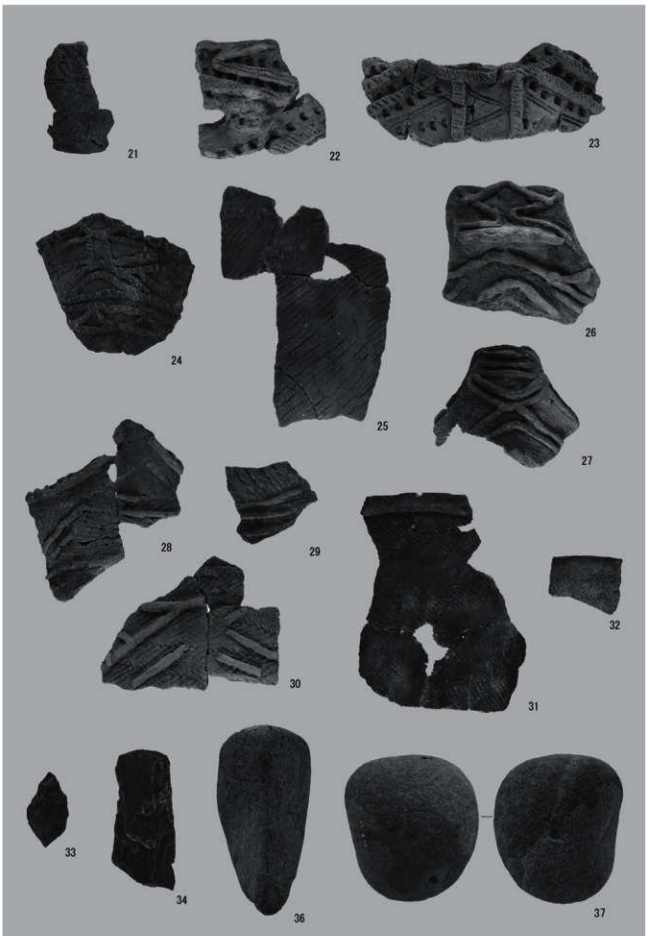
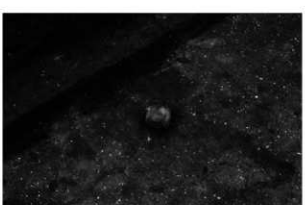


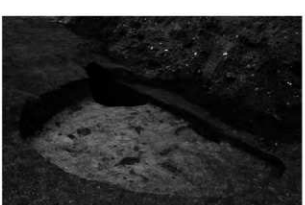
写真 18　平成 24 年度Ｂ区 遺構外出土遺物　1:2(33)　1:3

完掘状況（東から）

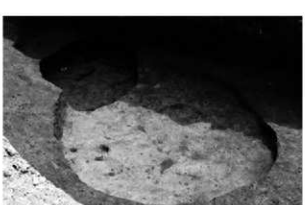


土器出土状況（北東から）

土器出土状況（北東から）

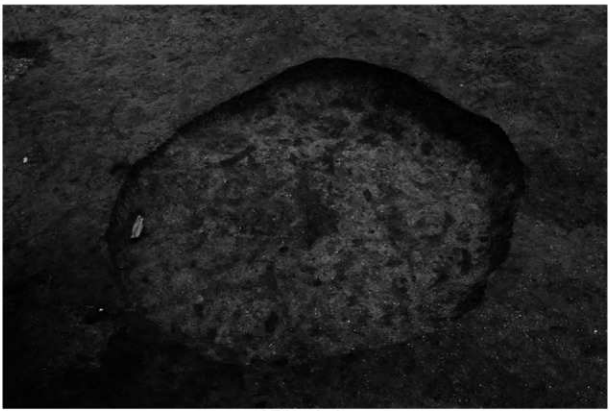


堆積状況（北西から）



完掘状況（北西から）

写真 19　平成 25 年度 第 16 号住居跡



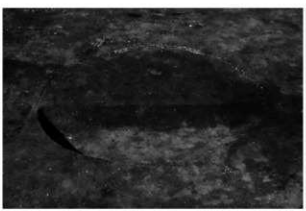
完掘状況（南から）

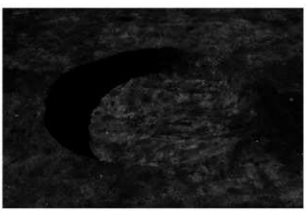
堆積状況（南東から）

写真 20　平成 25 年度 第 17 号住居跡

第 184 号土坑堆積状況（南東から）

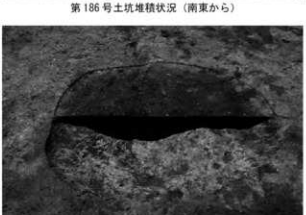
第 184 号土坑完掘状況（南東から）


第 185 号土坑堆積状況（南東から）


第 185 号土坑完掘状況（南東から）

第 186 号土坑堆積状況（南東から）

第 186 号土坑完掘状況（北西から）


第 187 号土坑堆積状況（北東から）

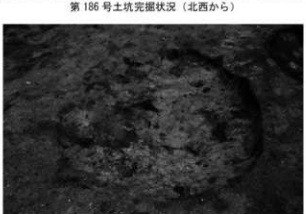
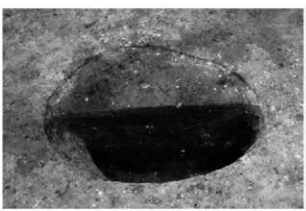
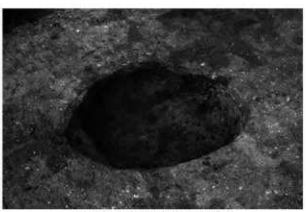

第 187 号土坑完掘状況（南東から）

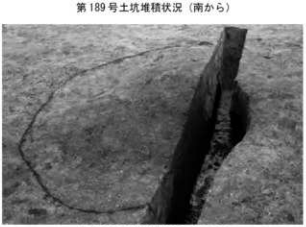
写真 21　平成 25 年度 土坑

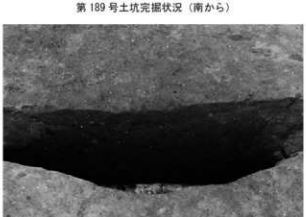
第 188 号土坑堆積状況（東から）

第 188 号土坑完掘状況（南から）


第 189 号土坑堆積状況（南から）


第 189 号土坑完掘状況（南から）


第 190 号土坑堆積状況（東から）


第 190 号土坑堆積状況（北東から）

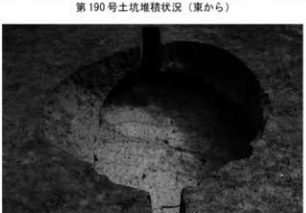
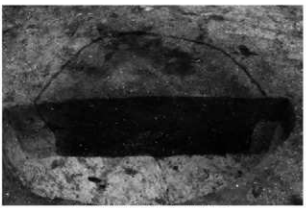

第 190 号土坑完掘状況（南東から）

写真 22　平成 25 年度 土坑

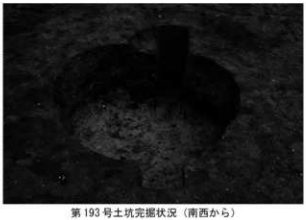

第 191 号土坑堆積状況（北東から）

第 191 号土坑完掘状況（北東から）

第 192 号土坑堆積状況（東から）

第 192 号土坑完掘状況（南から）

第 193 号土坑堆積状況（南東から）


第 193 号土坑完掘状況（南西から）

第 194 号土坑堆積状況（南東から）

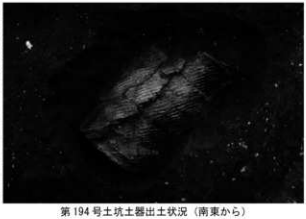
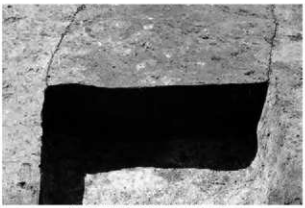
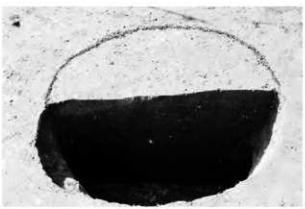

第 194 号土坑土器出土状況（南東から）

写真 23　平成 25 年度 土坑

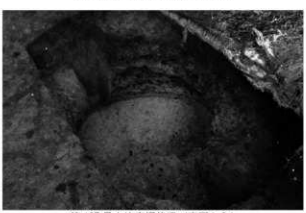

第 195 号土坑堆積状況（北東から）

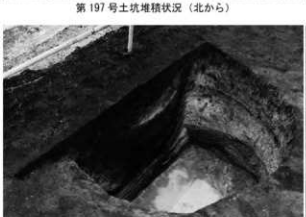
第 195 号土坑完掘状況（南から）


第 196 号土坑堆積状況（東から）

第 196 号土坑完掘状況（西から）

第 197 号土坑堆積状況（北から）


第 197 号土坑完掘状況（南西から）


第 198 号土坑堆積状況（北から）

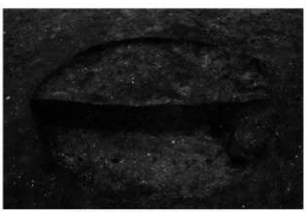
第 198 号土坑堆積状況（西から）

写真 24　平成 25 年度 土坑

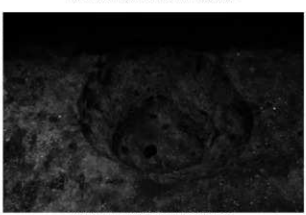
第 199 号土坑堆積状況（北西から）

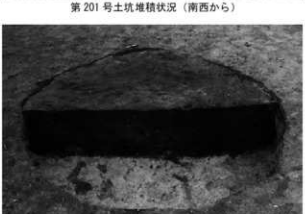
第 199 号土坑完掘状況（南西から）

第 200 号土坑堆積状況（南東から）


第 200 号土坑完掘状況（南東から）

第 201 号土坑堆積状況（南西から）


第 201 号土坑完掘状況（南西から）


第 202 号土坑堆積状況（南東から）

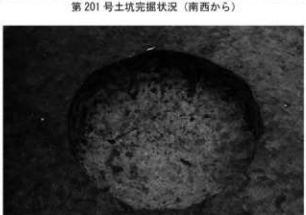
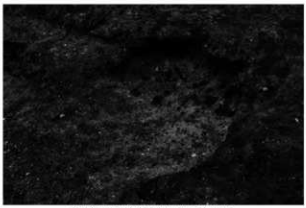

第 202 号土坑完掘状況（南東から）

写真 25　平成 25 年度 土坑

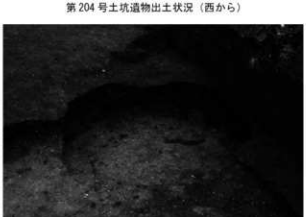
第 203 号土坑堆積状況（南東から）

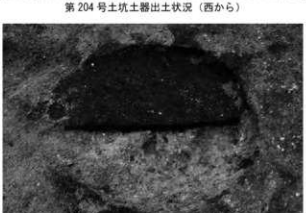

第 203 号土坑完掘状況（南東から）

第 204 号土坑堆積状況（北西から）

第 204 号土坑遺物出土状況（西から）

第 204 号土坑土器出土状況（西から）


第 204 号土坑完掘状況（北西から）


第 205 号土坑堆積状況（南東から）

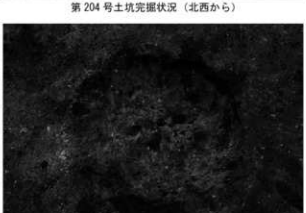
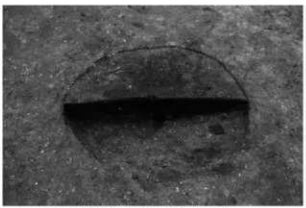
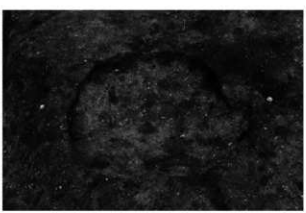

第 205 号土坑完掘状況（南東から）

写真 26　平成 25 年度 土坑

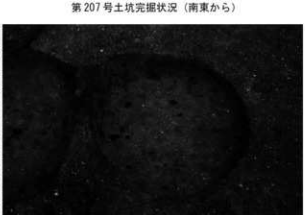

第 206 号土坑堆積状況（北から）

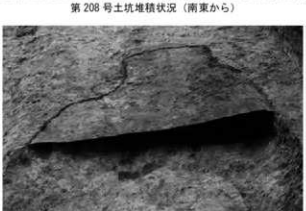
第 206 号土坑完掘状況（北から）

第 207 号土坑堆積状況（南東から）


第 207 号土坑完掘状況（南東から）

第 208 号土坑堆積状況（南東から）


第 208 号土坑完掘状況（西から）


第 209 号土坑堆積状況（南東から）

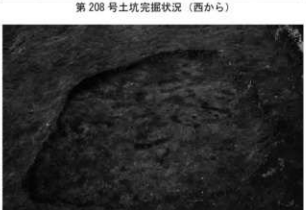
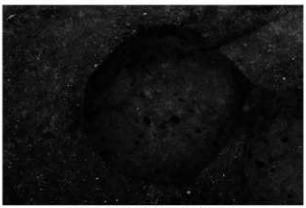

第 209 号土坑完掘状況（南東から）

写真 27　平成 25 年度 土坑

第 210 号土坑堆積状況（南東から）

第 210 号土坑完掘状況（南東から）

第 211 号土坑堆積状況（南から）


第 211 号土坑完掘状況（南西から）

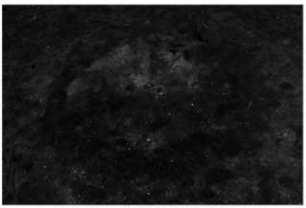
第 212 号土坑堆積状況（南東から）

第 212 号土坑完掘状況（南東から）

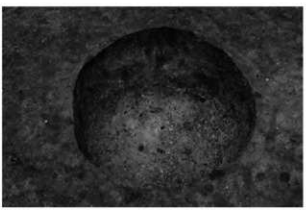
第 213 号土坑堆積状況（東から）

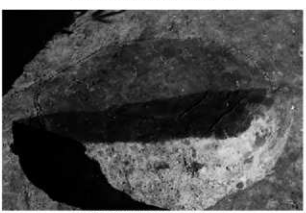
第 213 号土坑完掘状況（南西から）

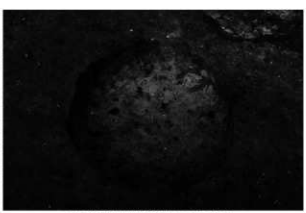
写真 28　平成 25 年度 土坑


第 214 号土坑焼土検出状況（南東から）

第 214 号土坑堆積状況（南東から）


第 214 号土坑完掘状況（南東から）


第 215 号土坑堆積状況（南東から）


第 215 号土坑完掘状況（南西から）

第 216 号土坑堆積状況（南東から）

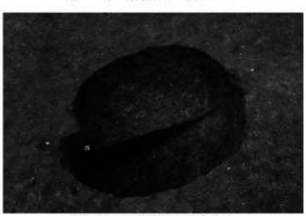

第 216 号土坑完掘状況（南東から）

写真 29　平成 25 年度 土坑

第８号溝状土坑堆積状況（南東から）

第８号溝状土坑完掘状況（南東から）

第 10 号焼土遺構検出状況（北東から）

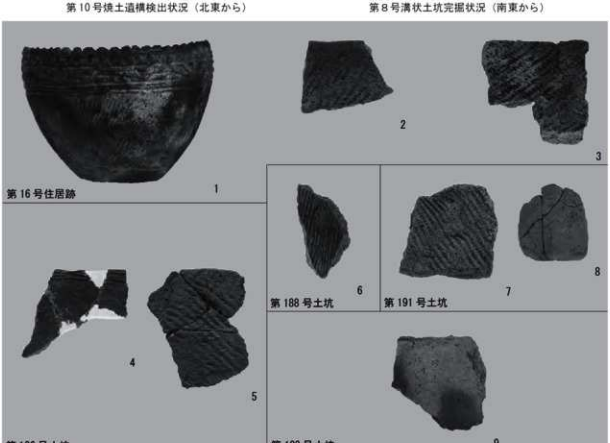


写真 30　平成 25 年度 第８号溝状土坑・第 10 号焼土遺構・遺構内出土遺物

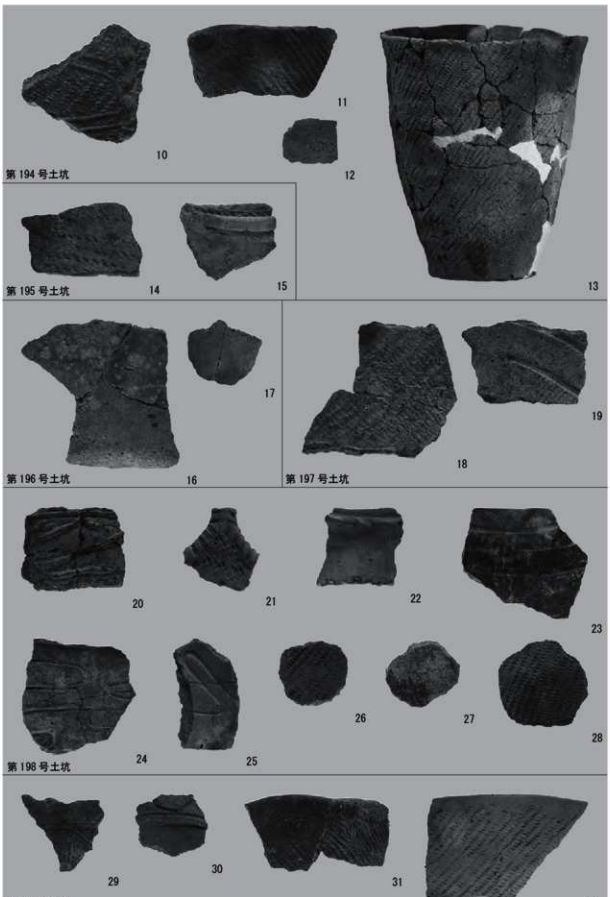


写真 31　平成 25 年度 遺構内出土遺物　1:3(13・20 ～ 25)　1:2

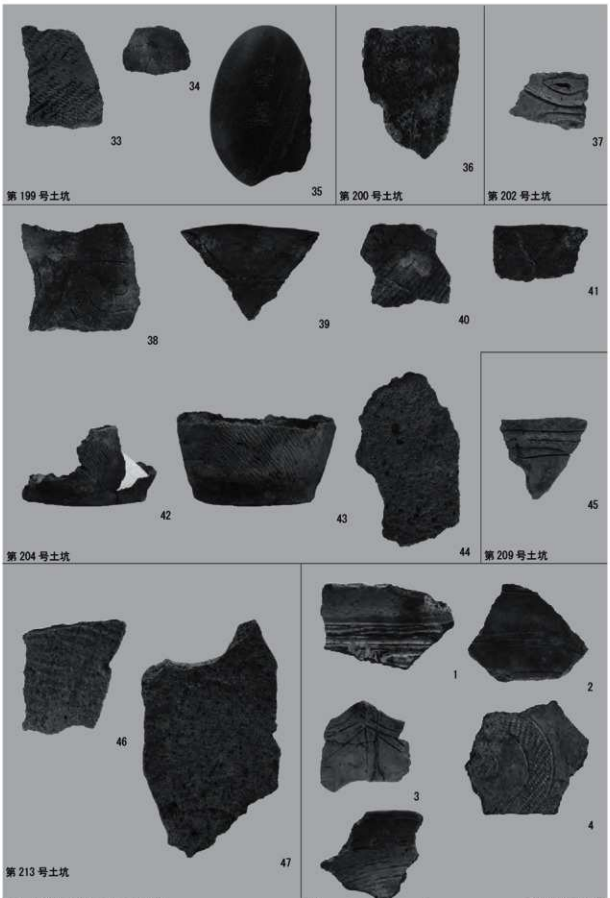


写真 32　平成 25 年度 遺構内出土遺物・遺構外出土遺物

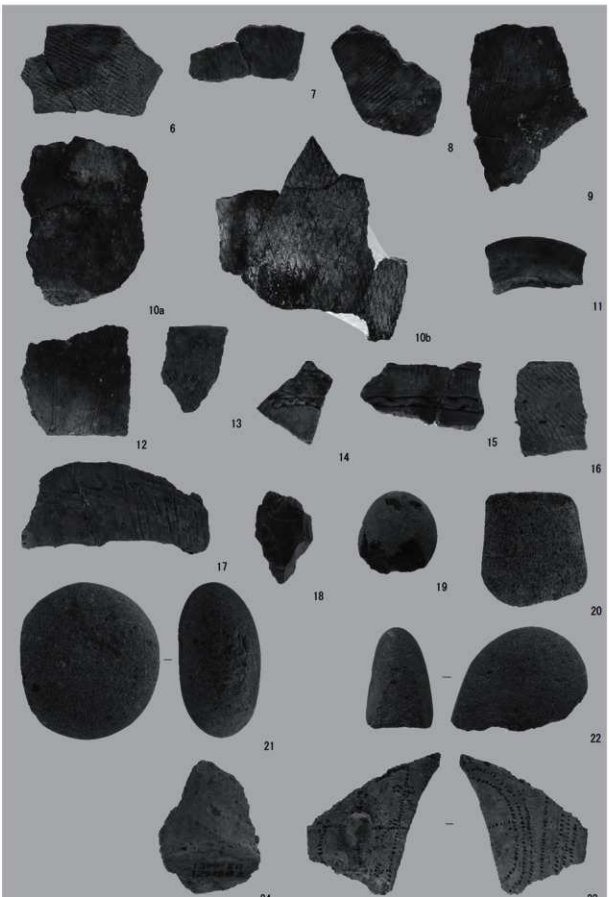


写真 33　平成 25 年度 遺構外出土遺物　　1:1(18･19) 1:3(6 ～ 10)　1:2

調査区完掘状況（東から）

調査区完掘状況（北から）

基本土層（東から）

第 217 号土坑堆積状況（南西から）

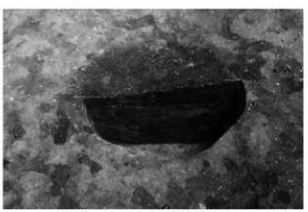
第 217 号土坑完掘状況（南西から）

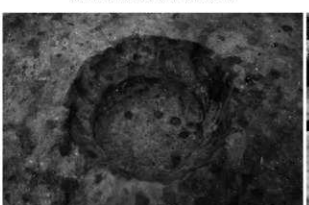
写真 34　平成 27 年度 調査区完掘状況・基本土層・土坑

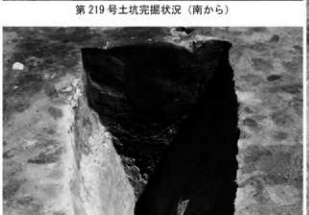
第 217 号土坑逆茂木痕堆積状況（南から）

第 218 号土坑堆積状況（南西から）

第 218 号土坑完掘状況（南西から）


第 219 号土坑堆積状況（南西から）


第 219 号土坑完掘状況（南から）


第９号溝状土坑堆積状況（南西から）

第９号溝状土坑完掘状況（南西から）

写真 35　平成 27 年度 土坑・溝状土坑

第２編　潟野遺跡Ⅳ

第２編　潟野遺跡Ⅳ

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経過

八戸南環状道路、八戸南道路、洋野階上道路は、八戸久慈自動車道の一部を構成し、起点の八戸JCTから侍浜ICに至る自動車専用道路として事業が着手されている。

当該事業に係る周知の埋蔵文化財包蔵地の取扱については、平成７年度に建設省東北建設局青森工事事務所（現・国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所）から工事予定地内の埋蔵文化財包蔵地の有無について青森県教育庁文化課（現・青森県教育庁文化財保護課）に照会があり、路線内に所在する遺跡を確認し橋館遺跡・弥次郎崖遺跡・大開遺跡・新田遺跡・潟野遺跡について事業者と文化課および青森県埋蔵文化財調査センター（以下、当センター）による踏査及び協議が行われた。これにより、試掘調査を先行させ、発掘調査の条件の整った遺跡から順次調査を実施することとなり、工事の優先個所も合わせ、平成８年度から調査が行われている。

潟野遺跡は、平成16・17年度に当センターによって発掘調査が実施された。その後、事業計画の変更などを受け、平成19年10月に国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所（以下、青森河川国道事務所）と青森県教育庁文化財保護課（以下、文化財保護課）及び当センターにより現地踏査及び協議が行われた。平成20年12月に文化財保護課が分布調査を実施し、事業予定地内に遺跡の広がりを確認したことから、平成21年１月に遺跡の範囲を変更し、平成22・23年度に当センターによって発掘調査が実施された。平成23年６月に青森河川国道事務所と文化財保護課及び当センターによって再度協議し、残存部分の調査はトンネル掘削終了後に行うこととなった。平成25年４月に青森河川国道事務所と文化財保護課及び当センターで残存部分の発掘調査にかかる協議が行われ、同年５月と平成26年11月に発掘調査を実施した。

事業者側からの本報告に伴う土木工事等のための発掘に関する通知は、青森河川国道事務所長から平成22年４月付け国東整青二調第８号及び平成23年４月付け国東整青二調第２号でなされ、これを受けて青森県教育委員会教育長から埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査の実施を平成22年５月付け青教文第182号及び平成23年４月付け教文第113号で通知されている。

（中嶋）

第２節　調査の方法

１　発掘作業の方法

今回の調査は、平成22・23年度に当センターが実施した調査（以下、前回調査）のＦ区平場エリアの継続であるため、基本的には同様の作業方法を採用している。縄文時代早期から晩期に至る遺構・遺物が確認されているため、当該期に重点をおいて調査を実施した。

〔測量基準点・水準点の設置・グリッド設定〕測量基準杭及び標高値は、本事業にあたって設定された４級基準点を用い、必要に応じて任意杭を設置した。グリッドは前回調査を踏襲した。具体的には、

グリッドはＡＡ－０（世界測地系でＸ＝53,200・Ｙ＝55,100）を起点とし一辺４ｍで設定し、グリッド名は、南から北にアルファベット、西から東に算用数字を付けてその組み合わせで呼称し、その名称は南西隅で代表させた。

〔基本土層〕基本土層についても前回調査を基準とした。

〔表土等の調査〕前回調査で第Ⅱ層まで除去されていたものの、工事による盛り土がされていたため、重機を使用して掘削の省力化を図った。表土から遺構確認面までの土層から出土した遺物は、適宜地区単位で取り上げた。

〔遺構の調査〕遺構名は前回調査で使用したものを継続して使用した。堆積土層観察用のセクションベルトは、遺構の形態、大きさ等に応じて４分割又は２分割で設定した。遺構内の堆積土層には算用数字を付け、ローマ数字を付けた基本土層と区別した。遺構の図面は、簡易遣り方測量と、（株）CUBIC製「遺構実測支援システム」を用いてトータルステーションによる測量を状況に応じて適宜選択し、作成した。遺構内の出土遺物については、層位毎又は堆積土層一括で取り上げたほか、トータルステーションや簡易遣り方測量により、必要に応じて縮尺1/20・1/10のドットマップ図・形状実測図等を作成した後、取り上げた。

〔遺物包含層の調査〕上層から層位毎に人力で掘削した。出土遺物の取り上げは、原則としてグリッド単位で層位毎に取り上げた。

〔写真撮影〕原則として35㎜モノクローム、35㎜カラーリバーサルの各フィルム及び18,000万画素のデジタルカメラを併用し、発掘作業状況、土層の堆積状態、遺物の出土状況、遺構の検出状況・精査状況、完掘後の全景等について記録した。

２　整理・報告書作成作業の方法

平成25・26年度の発掘調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡１軒、土坑５基（うち１基は前回調査の継続）、焼土跡１基、集石遺構１基、柱穴１基を検出し、また、縄文時代の土器・石器等の遺物が段ボール箱で11箱分出土した。これらの調査結果を調査年ごとに整理・報告書作成を進めた。

〔図面類の整理〕遺構の平面図は主にトータルステーションによる測量で作成したため、整理作業ではこれを縮尺20分の１で図化し、簡易遣り方測量で作成した土層断面図等との調整を行った。

〔写真類の整理〕35㎜モノクロームフィルムは撮影順に整理してネガアルバムに収納した。デジタルカメラのデータ及び35㎜カラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、包含層遺物の出土状況、遺構毎に整理した。

〔遺物の洗浄・注記と接合・復元〕土器の洗浄では文様が消えないように留意した。遺物の注記は、調査年度、遺跡名、出土区・遺構名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器等直接注記できないものについては、収納したポリ袋に注記した。接合・復元にあたっては、遺構間接合、及び遺構内と遺構外の接合状況に留意した。

〔報告書掲載遺物の選別〕遺物全体の分類を適切に行った上で、遺構の構築・廃絶時期等を示す資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料、所属時代（時期）・形式・器種等の分かる資料等を主として選別した。

〔遺物の観察・図化〕遺物の特徴を適切に表現するように図化した。図化した遺物に関しては観察表も

作成し、遺物の属性を記載した。
〔遺物の写真撮影〕業者に委託して行ったが、実測図では表現し難い質感・雰囲気・文様表現等を伝えられるように留意した。
〔遺構・遺物のトレース・版下作成〕遺構・遺物の実測図やその他の挿図のトレースは、(株) CUBIC製「トレースくん」、Adobe社製「Illustrator」、及びロッドリングペンによる手作業を併用して行った。実測図版・写真図版の版下作成についても、Adobe社製「Illustrator」又は「Indesign」、及び紙図版による手作業を併用した。
〔遺構の検討・分類・整理〕遺構毎に種類・構造的特徴・出土遺物・他の遺構との新旧関係等に関するデータを整理し、構築時期や同時性・性格等について検討を加えた。
〔遺物の検討・分類・整理〕遺物を時代・時期・種類毎に整理し、出土遺物全体の分類・品種構成・個体数等について検討した。
〔調査成果の検討〕遺構・遺物の検討結果を踏まえて、縄文時代の集落の時期・構造・変遷等について検討・整理した。

第3節　調査の経過

1　発掘作業の経過

発掘作業の体制及び経過は年度毎に記載する。

平成25年度

発掘調査は300㎡を対象として、5月22日から6月14日までの発掘作業期間で実施した。
発掘調査体制は、以下のとおりである。

調査主体　青森県埋蔵文化財調査センター

所　長	柿崎　隆司	(平成27年3月定年退職、現文化財保護課主幹専門員)
次　長 (総務GM)	高橋　雅人	(現中南教育事務所　所長)
調査第一GM	中嶋　友文	
文化財保護主幹	神　康夫	(発掘調査担当者)
文化財保護主査	平山　明寿	(発掘調査担当者)

専門的事項に関する指導・助言

調査員	藤沼　邦彦	前弘前大学教授 (考古学)
調査員	福田　友之	青森県考古学会会長 (考古学)
調査員	松山　　力	日本地質学会会員 (地質学)

発掘作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

5月中旬　調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置、駐車場の整備等、事前の準備作業を行った。
5月22日　発掘器材等を現地へ搬入し、環境整備を行った。
5月下旬　基本層序及び遺物の出土状況確認のため、調査区の端部及び中央部にトレンチを設定して深掘りをしたところ、中央部のトレンチから縄文時代晩期の遺構と縄文時代早期の土器が確認された。

6月上旬　縄文時代早期の土器が出土する深さまで掘り進めたところ、同時代の竪穴住居跡が検出された。

6月14日 すべての調査を終了し、発掘器材・出土品等を搬出した後、現地から撤収した。

（平山）

平成26年度

発掘調査は800㎡を対象として、11月25日から12月12日までの発掘作業期間で実施した。

発掘調査体制は、以下のとおりである。

調査主体　青森県埋蔵文化財調査センター

所　長	三上　盛一
次　長（総務GM）	髙橋　雅人（現中南教育事務所　所長）
調査第一GM	中嶋　友文
文化財保護主幹	野村　信生（発掘調査担当者）
文化財保護主幹	佐々木　雅裕（発掘調査担当者）
文化財保護主査	小山　浩平（発掘調査担当者）

専門的事項に関する指導・助言

調査員　藤沼　邦彦　前弘前大学教授（考古学）

調査員　福田　友之　青森県考古学会会長（考古学）

調査員　松山　力　日本地質学会会員（地質学）

発掘作業の経過は、以下のとおりである。

11月下旬　表土の掘削を先行し、11月25日に発掘調査器材などを現地に搬入した。環境整備後、遺構検出を行い、順次、精査に移った。

12月上旬　遺構は希薄であったが、降雪により調査環境が整わない状況であった。

12月中旬　全ての調査が終了し、12月12日に調査器材などを搬出した。

2　整理作業の経過

整理・報告書作成作業は、平成27年4月1日から平成28年3月31日までの期間で行った。

整理・報告書作成体制は、以下のとおりである。

整理主体　青森県埋蔵文化財調査センター

所　長	三上　盛一
次　長（総務GM）	川上　彰雄
調査第一GM	中嶋　友文
文化財保護主幹	神　康夫（平成25年度調査報告書作成担当者）
文化財保護主幹	野村　信生（平成26年度調査報告書作成担当者）
文化財保護主査	平山　明寿（平成25年度調査報告書作成担当者）

整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況などは、以下のとおりである。

4～10月中旬　　図面・写真・出土遺物など、報告書作成に必要な基礎資料を整理し、図面の修正を行った。遺物を選別し、拓本と実測及びトレースを行った。土器の写真撮影はシルバーフォト、石器はフォトショップいなみに委託して行った。

10月下旬～12月　図版作成と原稿執筆を行った。

1～3月　　報告書の割付と編集を行った。印刷業者を選定し、入札を行った。校正を経て報告書を刊行し、記録類・出土品を整理して収納した。

（野村）

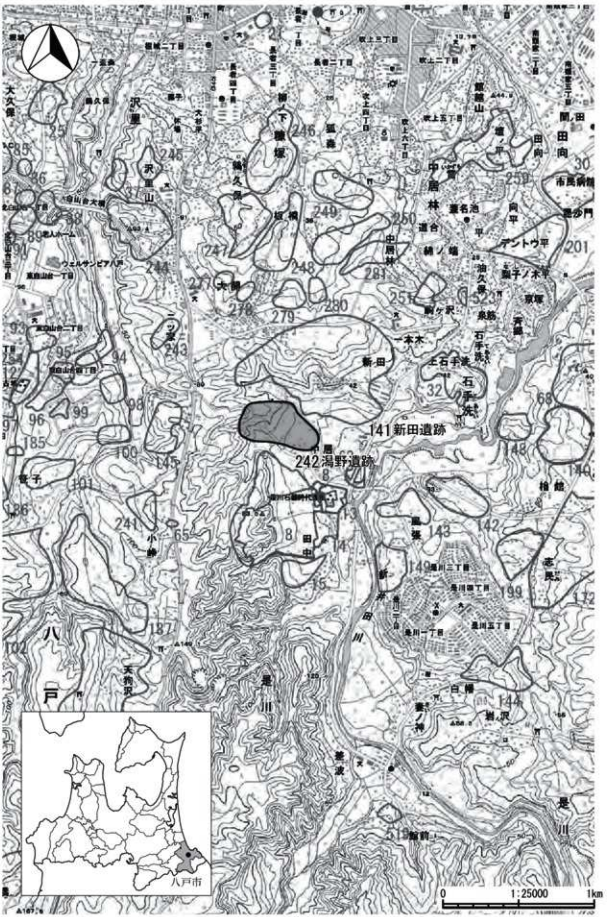


図38　遺跡位置図

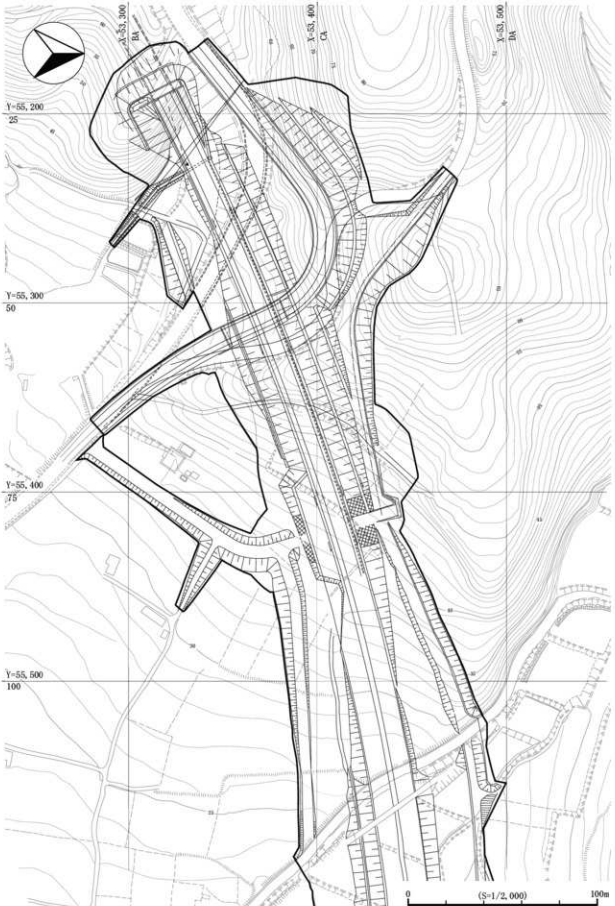

X-53, 300
BA
X-53, 400
CA
X-53, 500
BA
Y=55, 200
25
Y=55, 300
50
Y=55, 400
75
Y=55, 500
100
0
(S=1/2, 000)
100m

図39　路線図

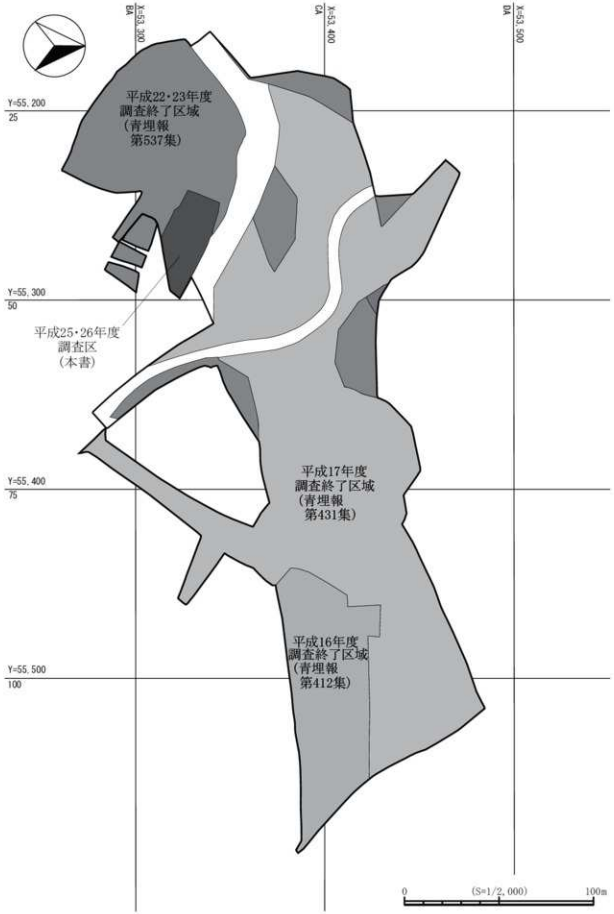

X=52, 300
BA
X=52, 400
CA
X=52, 500
DA
Y=55, 200
25
Y=55, 300
50
Y=55, 400
75
Y=55, 500
100
平成22・23年度
調査終了区域
（青埋報
第537集）
平成25・26年度
調査区
（本書）
平成17年度
調査終了区域
（青埋報
第431集）
平成16年度
調査終了区域
（青埋報
第412集）
0
(S=1/2, 000)
100m

図40　調査区域図

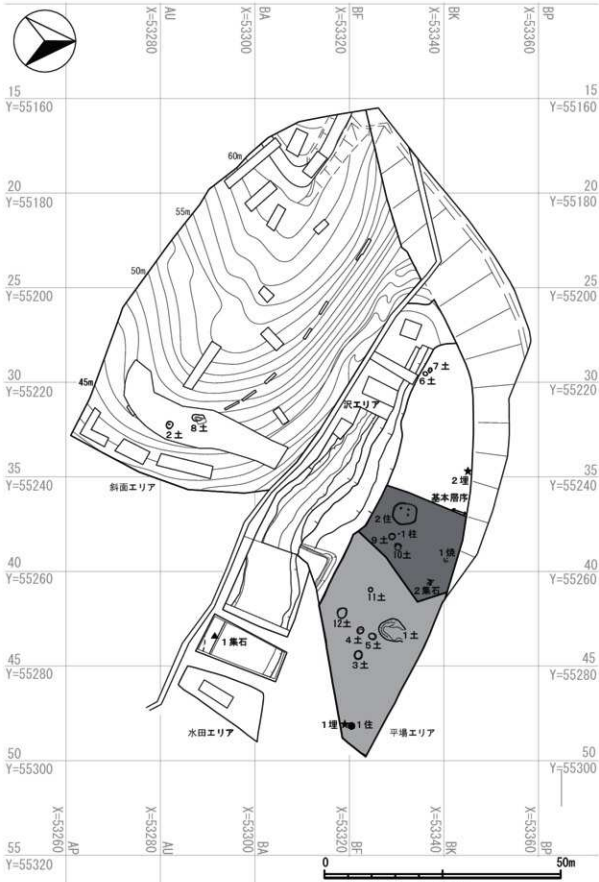

AP X=53260
AU X=53280
BA X=53300
BF X=53320
BK X=53340
BP X=53360
15 Y=55160
20 Y=55180
25 Y=55200
30 Y=55220
35 Y=55240
40 Y=55260
45 Y=55280
50 Y=55300
55 Y=55320
60m
55m
50m
45m
斜面エリア
沢エリア
平場エリア
水田エリア
2土
8土
7土
6土
2埋
基本層序
2住
1柱
9土
10土
1焼
2集石
11土
12土
4土
5土
1土
3土
1集石
1埋
1住
0
50m
(S=1/800)
（1住、2～8土、1・2埋、1集石は前回調査）

図41　Ｆ区　遺構配置図

第２章　遺跡の概要

第１節　遺跡の環境

潟野遺跡は、八戸市の中心部から南へ約３㎞、国道 340 号と県道 138 号（島守八戸線）との間を東西に走る八戸広域農道周辺の新井田川左岸に位置している。本遺跡の南方約 0.7 ㎞には史跡是川石器時代遺跡（一王寺（１）遺跡）が所在している。洋野階上道路建設事業に伴う本遺跡の調査は、平成 16・17・22・23 年に行われた。調査対象範囲は遺跡中央を東西に横断し、八戸広域農道以北の調査は終了している（青森県教育委員会 2006・2007・2014）。調査の結果、縄文時代早期から奈良・平安時代にかけての遺構・遺物が確認されている。特記されるものとしては、縄文時代早期では、室小路式と考えられる早期前葉の土器、吹切沢式の土器に子母口式の要素が加わった早期中葉の土器が出土している。縄文時代前期では、前期初頭の竪穴住居跡と、石鏃 37 点のほかに底面に赤色顔料が散布されていた前期前葉の土坑墓と考えられる土坑が検出されている。また、石斧の埋納事例が確認されている。奈良時代では、竪穴住居跡中から銙帯金具（丸鞆）が、竪穴遺構堆積土中から、精錬～鍛錬鍛冶に関連する遺物が出土している。平安時代では、アワ・アサ等の多種多量の炭化種子が出土した竪穴住居跡がある。

遺跡周辺の遺跡については、既に刊行された報告書中に述べられているので再掲しない。

平成 25・26 年度はＦ区平場の調査を行った。Ｆ区は潟野遺跡の調査対象範囲西端に位置する、八戸広域農道と是川トンネルの間の区間である（図 39 ～ 41）。地形により平場エリア・沢エリア・斜面エリア・水田エリアに細分される。当区は平成 22 年度に範囲・内容確認調査、平成 23・25・26 年度に本発掘調査が行われ、平場エリアを中心として、竪穴住居跡２軒、土坑 12 基、焼土遺構１基、土器埋設遺構２基、集石遺構２基、柱穴１基を検出した。また、遺物は沢エリアを中心として縄文時代の土器や石器等が段ボール箱で 63 箱出土した。うち、平場エリアの一部と、沢エリア・斜面エリア・水田エリアの調査成果（竪穴住居跡１軒、土坑８基、土器埋設遺構２基、集石遺構１基）については、既に報告書が刊行されている（青森県教育委員会 2014）。平成 25・26 年度は、平場エリアの平成 23 年度末了部分を調査した。平成 25 年度調査区はＦ区平場中央、平成 26 年度調査区はＦ区平場東端に該当する。本書では平成 25・26 年度の調査成果について年度ごとに記載することとする。なお、遺構番号は平成 23 年度調査の続き番号を付している。

第２節　遺跡の地質

基本土層については、特に今回調査区は前回調査区と同一丘陵であり、かつ、前回調査において基本層序図を作成した箇所の隣接地でもあることから、前回調査を踏襲した。前回調査の基本土層図を再掲し（図 42）、若干の補足をする。なお、第Ⅰ・Ⅱ層は平成 23 年度の調査で除去されていたものの、それ以外の層位はトレンチ等での層位観察で相違ないことを確認している。また、今回調査の掘削深度は第Ⅳ～Ⅴ層までである。

第Ⅰ層は表土層である。

第Ⅱ層は黒褐色土層である。中撮浮石のほか、十和田ｂ火山灰と思われる白色浮石を混入する。縄文時代後・晩期の遺物を含む。

第Ⅲ層は中撮浮石を含む黒色土層で、中撮浮石混入量によってａ・ｂに細分した。

第Ⅲａ層は中撮浮石の混入が少ない（１％程度）層上位を分層した。黄色浮石を１％程含む。

第Ⅲｂ層は中撮浮石の混入が多い層下位を分層した。径 10 ㎝大の中撮浮石ブロックが所々に混在する。

第Ⅳ層は南部浮石を含む黒褐色土層である。色調や南部浮石の混入量によってａ・ｂに分層した。

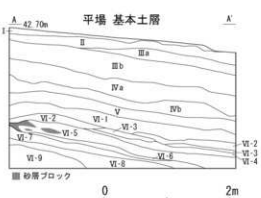
第Ⅳａ層は南部浮石の混入が多め（５％程度）の層上位を分層したものである。

第Ⅳｂ層は南部浮石の混入が少ない（１～２％程度）層下位を分層した。Ｖ層の漸移層である。

第Ⅴ層は八戸火山灰層の上位に堆積する火山灰層と考えられ、色調は暗褐色を呈する。

第Ⅵ層は黒褐～暗褐～褐～オリーブ褐～明黄褐色の砂層もしくは砂質土層で、八戸火山灰層に相当すると考えられる。９層に細分され、Ⅵ－１～３層中には南部浮石が混入する。Ⅵ－９層は八戸火山灰Ⅰ層である。

（平山）



平場 基本土層

Ⅰ層	10YR2/1	黒　色　土	表土。
Ⅱ層	10YR2/2	黒褐色土	中撮浮石、白色浮石（十和田ｂ？）混入。後・晩期の遺物含む。
Ⅲａ層	10YR2/1	黒褐色土	中撮浮石、黄色浮石１％混入。
Ⅲｂ層	10YR2/3	黒褐色土	中撮浮石混入。中撮浮石ブロック（φ10㎝大）所々に混在。下層ａ以降。
Ⅳａ層	10YR2/2	黒褐色土	南部浮石５％混入。
Ⅳｂ層	10YR2/3	黒褐色土	南部浮石１～２％混入。Ⅴ層の漸移層。
Ⅴ層	10YR3/3	暗褐色土	南部浮石１～２％混入。
Ⅵ層	10YR3/4	暗褐色土	南部浮石１～２％混入。
Ⅵ-2層	10YR4/4	褐　色　土	南部浮石５～８％混入。砂ブロック状で混在。
Ⅵ-3層	10YR2/3	黒褐色土	南部浮石１～２％混入。
Ⅵ-4層	10YR4/6	褐　色　土	砂層。
Ⅵ-5層	10YR3/4	暗褐色土	黄褐色砂ブロック混入。
Ⅵ-6層	10YR5/6	黄褐色土	砂層。
Ⅵ-7層	10YR3/3	暗褐色土	砂質。固くしまっている。
Ⅵ-8層	2.5Y4/3	オリーブ褐色土	砂質。非常に固くしまっている。
Ⅵ-9層	10YR7/6	明黄褐色土	八戸火山灰Ⅰ層。

図42　基本土層図

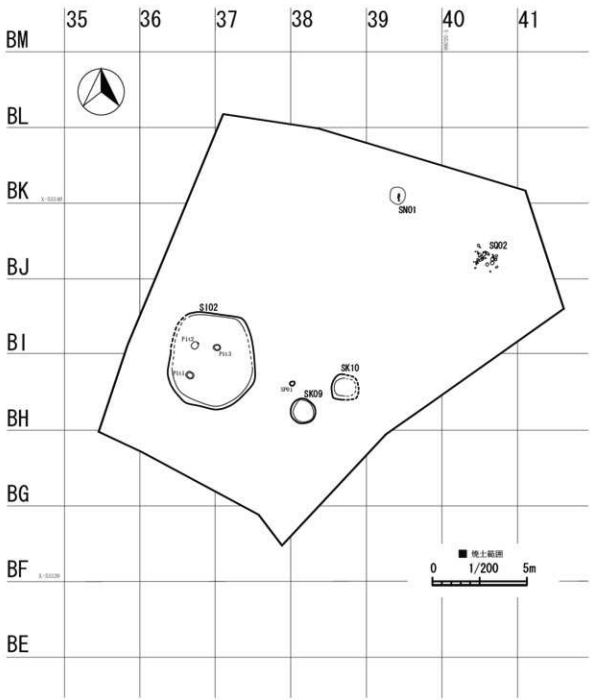


図43　平成25年度遺構配置図

第３章　検出遺構と出土遺物

平成 25・26 年度は、Ｆ区平場の調査を行った。Ｆ区は渇野遺跡の調査対象範囲西端に位置する、八戸広域農道と是川トンネルの間の区間である（図 39 ～ 41）。地形により平場エリア・沢エリア・斜面エリア・水田エリアに細分される。当区は平成 22 年度に範囲・内容確認調査、平成 23・25・26 年度に本発掘調査が行われ、平場エリアを中心として、竪穴住居跡２軒、土坑 12 基、焼土遺構１基、土器埋設遺構２基、集石遺構２基、柱穴１基を検出した。また、遺物は沢エリアを中心として縄文時代の土器や石器等が段ボール箱で 63 箱出土した。うち、平場エリアの一部と、沢エリア・斜面エリア・水田エリアの調査成果（竪穴住居跡１軒、土坑８基、土器埋設遺構２基、集石遺構１基）については、既に報告書が刊行されている（青森県教育委員会 2014）。平成 25・26 年度は、平場エリアの平成 23 年度未了部分を調査した。平成 25 年度調査区はＦ区平場中央、平成 26 年度調査区はＦ区平場東端に該当する。ここでは平成 25・26 年度の調査成果について年度ごとに記載することとする。なお、遺構番号は平成 23 年度調査の続き番号を付している。

第１節　平成 25 年度

１　竪穴住居跡

第２号竪穴住居跡（SI02、図 44 ～ 46、写真 37・40）

[位置・確認]平場エリア中央、平成 25 年度調査区西端のＢＩ・Ｊ -36・37 グリッドに位置している。基本層序第Ⅳａ層掘り下げ中に確認した。

[平面形・規模]平面形は不正な円形で、規模は長軸 495 ㎝・短軸 452 ㎝、確認面からの深さは 67 ㎝である。床面積は 16.7 ㎡である。

[壁・床面]壁は床面から外傾して立ち上がる皿状の断面形状をしている。床面は若干南東方向に傾斜している。

[炉]確認されなかった。

[柱穴]住居中央付近から３基の柱穴を確認した。Pit １は 43 × 38 ㎝・深さ 10 ㎝、Pit ２は 41 × 34 ㎝・深さ 54 ㎝、Pit ３は 39 × 32 ㎝・深さ 14 ㎝である。Pit ２中から土器が１点 3.6 ｇ出土している。

[堆積土]黒褐色土主体の単層である。黄褐色～褐色～灰白色浮石及び炭化物が混入する。

[出土遺物]堆積土中から土器が 11 点（接合前点数）95.6 ｇ・石器が４点 1,549.0 ｇ出土した。うち、土器８点（接合後点数）と石器全てを図示した。図 45- １は尖底の深鉢土器で、遺構外（ＢＨ -36・37）出土のものと接合し、ほぼ完形に近い状況に復元できた。胴部が膨らむ砲弾状の器形で、口縁は４単位の緩やかな波状口縁状をなしている。器厚は６～８㎜前後、焼成は良好であるが軟質で、器面の色調は外面がにぶい黄褐色～にぶい黄橙色、内面は褐灰色～灰黄褐色が主体である。胎土は粗く砂っぽい。繊維のほか小礫を混入する。外面は、口縁部に２条・頸部に１条の隆帯が水平に、派頂部から１条の隆帯が垂直に貼り付けられ口縁部文様帯を区画している。隆帯上には単軸絡条体の側面圧痕が斜位に施されている。隆帯の周囲には沈線が弧状・斜格子状に展開する。胴下半および内面には貝殻条痕が施されている。

図 46- ２は器面に爪形文が施された土器片で、縄文時代草創期の可能性がある。３・４は貝殻腹縁押引文、５・６は貝殻条痕文が施された胴部片である。７・８は無文である。９・10 は削掻器で、

裏面にアスファルトと推定される黒色物付着が飛沫状に付着している。11は断面が三角形の柱状礫を素材とした磨石である。12は敲石で、両端のほか、表裏面にも弱い敲きが観察される。
[小結]出土した土器、特に図45-1は特異な文様構成を持つものであるが、類似した隆帯・沈線をもつものは平成17年度調査のSI09等から出土しており、縄文時代早期中葉吹切沢式土器の範疇に収まるものと考えられていることから、同時期の年代が考えられる。

2 土坑

第9号土坑（SK09、図47、写真38・40）
[位置・確認]平場エリア中央、平成25年度調査区中央南端のBH-38グリッドに位置している。平成22年度の調査で確認されたもので、基本層序第Ⅲ層上面で黒色土の半円形プランとして検出した。確認面の標高は39.3mである。第10号土坑と隣接する。
[平面形・規模]平面形は円形である。規模は、上端で135×129cm、下端で120×107cmである。確認面からの深さは54cmである。
[堆積土]黒色土の単層である。黄褐色浮石・中掫浮石・南部浮石及び炭化物粒を混入する。
[壁・底面]壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、箱状の断面形状をなしている。底面はほぼ平坦である。
[出土遺物]底面及び堆積土から49点（接合前点数）・1,504.2gの土器が出土し、うち、2点（接合後点数）を図示した。図47-1はLRを地文とした深鉢である。中央北寄りの底面から敷かれたように出土した。底部は出土しなかった。3個の口縁部突起がある。縄文時代晩期であるが、詳細な時期は不明である。2はRLを地文とした胴部片で、遺構外（BH-38）出土のものと接合した。
[小結]底面出土遺物から、縄文晩期と考えられるが、詳細な時期は不明である。土器の出土状況から、土坑墓の可能性がある。

第10号土坑（SK10、図47、写真38・40）
[位置・確認]平場エリア中央、平成25年度調査区中央南端のBH-38グリッドに位置している。調査区中央に設定したトレンチの断面観察で第Ⅲ層を掘り込んでいることを確認した。第9号土坑と隣接する。
[平面形・規模]平面形は径1.4m程の円形と推定される。確認面からの深さは45cmである。
[堆積土]黒色土の単層である。黄褐色浮石及び炭化物粒を混入する。
[壁・底面]壁は底面から外傾して立ち上がり、断面形状は逆台形状をなしている。底面はほぼ平坦である。
[出土遺物]土器は1点17.2g・石器は2点812.4g出土し、全て図示した。図47-3は縄文時代晩期後葉の台付鉢の脚部である。遺構外（BH-37・38）出土のものと接合した。脚部の上下端に2本1対の沈線を巡らせているほか、補修孔が施されている。4は無茎尖基の石鏃で、先端を欠損している。5は敲石で、端部の縁辺部を作用面とし、更に上面にも凹状の敲きがある。また。作用面付近には黒色物質が付着している。
[小結]出土土器から縄文時代晩期後葉の遺構と考えられる。

３　柱穴

第１号柱穴（SP01、図 48）

[位置・確認]平場エリア中央、平成 25 年度調査区中央南端のＢＨ－38 グリッドに位置している。第Ⅳ層中から確認された。確認面の標高は 39.4 ｍである。

[平面形・規模]平面形はほぼ円形である。開口部径は約 25 ㎝、底面径は約 16 ㎝で、確認面からの深さは 19 ㎝である。

[堆積土]暗褐色土主体の単層である。黄褐色～褐色の浮石が混入する。

[壁・底面]壁は底面から外傾して立ち上がる逆台形状の断面形状をしている。底面はほぼ平坦である。

[出土遺物]遺物は出土しなかった。

[小結]詳細は不明であるが、確認面から縄文時代早期に構築された可能性がある。

４　焼土遺構

第１号焼土遺構（SN01、図 48、写真 38・40）

[位置・確認]平場エリア中央、平成 25 年度調査区中央北端のＢＪ・Ｋ－39 グリッドに位置している。基本層序第Ⅲ層上面を精査中に確認した。確認面の標高は 40.7 ｍである。

[平面形・規模]被熱範囲は 39 × 10 ㎝の不正形で、厚さは２㎝である。焼土の周囲に、91 × 79 ㎝・深さ５㎝の円形の掘方を有している。掘方は黒色土主体の単層で黒味が強く、焼土を混入する。掘方の壁は底面から外傾して立ち上がり、皿状に近い断面形状であるが、凹凸が見られる。

[出土遺物]掘方中から縄文土器１点（5.2 ｇ）が出土した（図 48－１）。

[小結]詳細は不明であるが、確認面から縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

５　集石遺構

第２号集石遺構（SQ02、図 48、写真 38）

[位置・確認]平場エリア中央、平成 25 年度調査区中央北東端のＢＪ－40 グリッドに位置している。基本層序第Ⅲ層上面を精査中に確認した。確認面の標高は 40.2 ｍである。

[平面形・規模]径５～ 25 ㎝大の礫が約 180 × 150 ㎝の範囲に集中する。

[出土遺物]遺物は出土しなかった。

[小結]詳細は不明であるが、確認面から縄文時代前期中葉以降に構築されたと考えられる。

６　遺構外出土土器

遺構外からは縄文時代早期から晩期の縄文土器と古代の土師器が総数で 848 点（接合前点数）7,246.5 ｇ出土した。うち、土器 52 点（接合後点数）を図示した。なお、基本層序第Ⅳ層以下からは早期中葉から前期初頭までの土器だけが出土している。

縄文時代早期の土器（図 49・50－１～８）

縄文時代早期中葉の土器（図 49－１～７）

主に貝殻が施文されている土器である。１～３・７は内外面に貝殻条痕文が、５・６は外面に貝殻腹縁押引文が施文されているものである。器厚は６～８㎜前後、焼成は良好であるが軟質で、器面の色調は外面がにぶい黄褐色～にぶい黄橙色、内面は褐灰色～灰黄褐色が主体である。胎土は粗く砂っ

ぽい。繊維のほか小礫を混入する。4は無文（ミガキ）であるが、胎土や焼成の特等から本類に含めた。1～3は口縁部片、6・7は底部片で、1～3の口縁部には隆帯が付されている。1の外面には、口縁部に2条・頸部に1条の隆帯が水平に、派頂部から1条の隆帯が垂直に貼り付けられ口縁部文様帯を区画している。隆帯上には単軸絡条体の側面圧痕が斜位に施されている。隆帯の周囲には沈線が弧状・斜格子状に展開する。内面には貝殻条痕が施されている。補修孔が観察される。モチーフが同じであることから、第2号竪穴住居跡出土の図45－1と同一個体と考えられる。1～3は吹切沢式に相当する土器、5・6は吹切沢式と考えられ、4もその範疇と思われる。

縄文時代早期後葉の土器（図50－8）

深鉢の同上部で、内面には貝殻条痕文が、外面には沈線が施されたものである。沈線は、口縁部直下は縦位、その下位は網目状、更にその下位には矢羽根条に施文されている。口唇部には篦状工具による刺突が施されている。文様の特徴からムシリⅠ式と考えられる。

縄文時代前期の土器（図50－9～21）

前期前半の土器（図50－9～15）

9～11はＬＲが施文された口縁～胴～底部片で、同一個体と思われる。丸底の深鉢で、胎土中に小礫を多量に混入する。器面は黒く、また、焦げと思われる黒色物質が付着している。12は結節回転文が施された口縁部片で、口唇部には篦状工具による刺突が施されている。13・14はＬＲが施文された胴部片である。15は非結束の羽状縄文が施文され、胎土中に金雲母が混入する。

前期後半の土器（図50-16～21）

16～19はＲＬが施文された胴部～底部片で、18・19は同一個体と思われる。円筒下層式土器の範疇に収まるものと考えられる。20・21は単軸絡条体第1Ａ類を縦位施文する同一個体と思われる胴部片で、円筒下層ｄ式と考えられる。

縄文時代中期前半の土器（図51-22～25）

22は口縁部文様帯部分の破片で、地文及び隆帯にＬＲの側面圧痕が施文されているものである。文様から円筒上層ａ式と考えられる。23は口縁部片である。地文には上位からＬ・Ｒ・Ｌの側面圧痕が、隆帯にはＬの側面圧痕が施されている。文様から円筒上層ａ～ｃ式と考えられる。24はＲＬ、25は結束第一種の羽状縄文が施された底部片で、円筒上層式土器の範疇に収まるものと考えられる。

縄文時代中期末葉～後期の土器（図51-26～29）

26は単軸絡条体第5Ａ類が施された胴部片、27は横位の沈線間にＲＬが施された口縁部片、28・29は無文の胴部片である。

縄文時代晩期の土器（図51-30～38）

縄文時代晩期中葉の土器（図51-30～33）

30～33は鉢もしくは皿と思われる。30は横位の沈線間に縦位の沈線が刻みに状に施されたものである。器面は黒く、また、焦げと思われる黒色物質が付着している。31は雲形文的な磨消を持つ口縁部片で、口縁に山型突起を有している。32・33は横位の沈線が施された胴部片である。

縄文時代晩期後葉の土器（図51-34～38）

34は略完形の鉢である。口縁部に2対の山形突起とＢ突起を有している。胴部はミガキが、口縁部直下には幅広で浅い沈線が施されている。35は壺の頸部、36は壺の胴部と思われる。横位の沈線が施されている。36は器面の一部が剥落している。37・38は台付鉢の脚部で、沈線が施されている。

縄文時代中期～晩期の土器（図 51-39 ～ 51）

地文しか施文されていないものなど詳細な型式認定できないものをまとめた。

39 ～ 47 は口縁部である。39 はＬを縦位施文、40・42 ～ 44 はＬＲを縦位施文、41・46 はＬＲ、45 はＲＬＲを縦位施文したもので、47 は無文である。39・40 は口縁部が外湾気味に、45・46 は内湾気味に立ち上がるもので、39・47 は口唇部が丸く先細りしている。41 は口唇部には刺突が、39・40 の内面にはミガキが施されている。42 ～ 44 は同一個体と考えられる。48 はＬＬと思われる縄文が施された胴部片である。49 ～ 51 は底部で、49 はＲＬが縦走するもの、50・51 は無文のものである。

平安時代の土器（図 51-52）

坏の底部片が１点出土した。ロクロ坏で、内面黒色処理されている。底外面は回転糸切りであることから、９世紀以降の年代が考えられる。

7　遺構外出土石器

遺構外からは石器が 28 点 5,797.3g 出土した。内訳は石鏃２点、石匙３点、削掻器５点、剥片９点、磨石３点、凹石２点、敲石１点、石錘２点、台石１点である。うち、剥片７点以外の 21 点を図示した。

石鏃（図 52-53・54）

有形凸基（53）とアメリカ式石鏃（54）が各１点出土している。

石匙（図 52-55 ～ 57）

縦型のものが３点出土した。55 は横長剥片を素材としたものである。57 は打面調整剥離技法によってつくられた松原型石匙である。55 には摘まみ部にアルファルトとみられる黒色物質が付着している。また、56 の裏面刃部には使用痕と思われる弱い光沢が認められた。

削掻器（図 52-58 ～ 62）

５点出土し、全てを図示した。二時調整がほとんど施されない剥片の一側縁もしくは二側縁に刃部が形成されているが、刃部調整は粗い。60 は下縁に微細剥離痕が認められる。

剥片（図 52-63・64）

９点 30.0 g 出土し、２点を図示した。

磨石（図 52-65 ～ 67）

65 は断面が三角形の柱状礫、66・67 は扁平礫を素材とし、主に側縁を作用面としたものである。66 は半円形扁平打製石器状としても良いかもしれない。67 は平坦面にあばた状の敲きがみられる。

凹石（図 52-68・69）

68 は小判型の礫の両面にあばた状の凹孔が２か所みられるもので、凹孔はあまりくぼんでいない。69 は円錐状の礫の平坦面にやや深い凹孔が１か所みられるものである。

石錘（図 53-70・71）

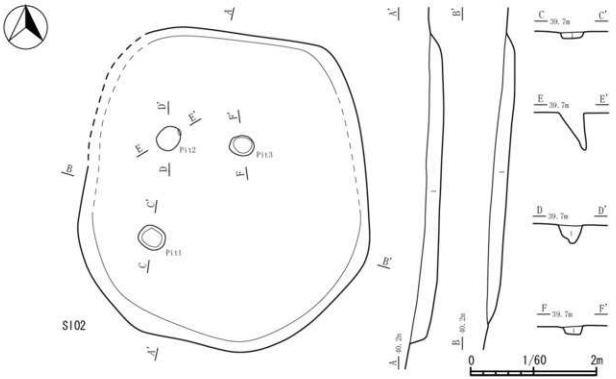
円～楕円形の扁平礫を利用し、長軸端部を打ち欠いているが抉りは浅い。加工は片面のみである。

敲石（図 53-72）

扁平礫の両端部を作用面としているものである。石材はチャートである。

台石（図 53-73）

扁平礫の上面に弱い磨り面が見られるものである。　（平山）



SI02
1層 10YR2/3 黒褐色土 10YR6/6明黄褐色浮石(φ1～5mm)3%が層の上に多数あり。
10YR4/6褐色浮石(φ1mm)2%、
10YR7/1灰白色浮石(φ1mm)1%、炭化物(φ1mm)1%。

SI02 Pit1
1層 10YR5/3 暗褐色土 10YR5/6黄褐色浮石(φ1～2mm)2%、炭化物(φ1mm)1%。
SI02 Pit2
1層 10YR2/2 黒褐色土 10YR6/6明黄褐色浮石(1～3mm)5%、炭化物(φ1～2mm)1%。
SI02 Pit3
1層 10YR2/3 黒褐色土 10YR5/6黄褐色浮石(φ1～2mm)2%。

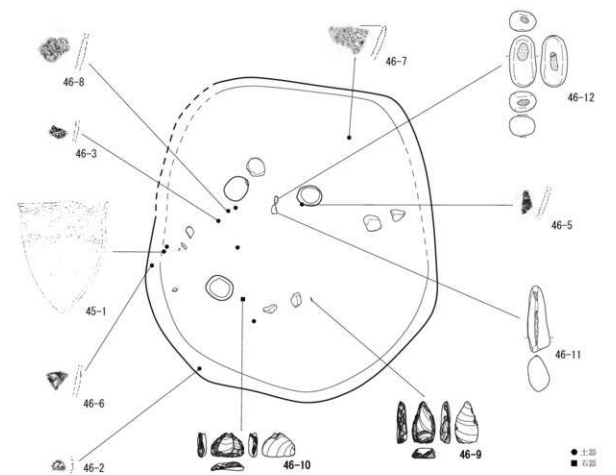


図44　第２号竪穴住居跡

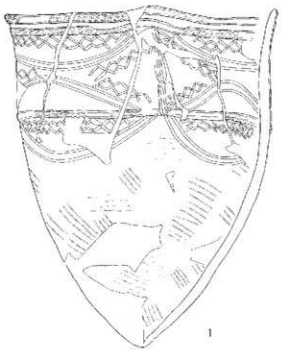
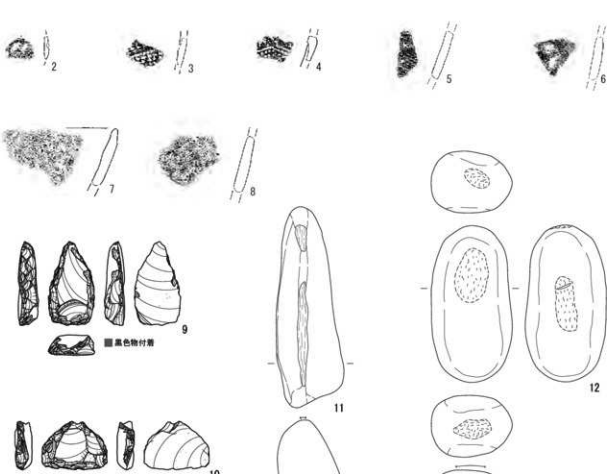


図45　第２号竪穴住居跡出土遺物



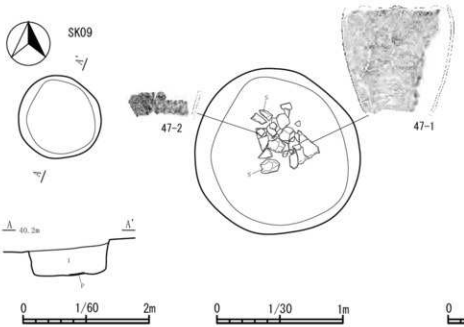
SI出土土器観察表

番号	出土地点	層位	時期	器種	部位	外面特徴	内面特徴	備考
45-1	第2号竪穴住居跡遺構外	I層 BH-36 III層・IVa層 BH-37 IVa層	縄文	深鉢	口縁～胴部	隆帯、沈線、貝殻条痕文 隆帯上に単軸絡条体第1類	貝殻条痕文	P-1。図49-1と同一個体 (E)側面圧痕(斜位)
46-2	第2号竪穴住居跡	覆土	縄文	深鉢	胴部	爪形	剥落	金雲母混入。P-10
46-3	第2号竪穴住居跡	I層	縄文	深鉢	胴部	貝殻腹縁押引文		P-7
46-4	第2号竪穴住居跡 P112	覆土	縄文	深鉢	胴部	貝殻腹縁押引文		
46-5	第2号竪穴住居跡	I層	縄文	深鉢	胴部	貝殻条痕文		P-8
46-6	第2号竪穴住居跡	I層	縄文	深鉢	胴部	貝殻条痕文		P-2
46-7	第2号竪穴住居跡	I層	縄文	深鉢	胴部	無文		P-9
46-8	第2号竪穴住居跡	I層	縄文	深鉢	胴部	無文		P-6

SI出土石器観察表

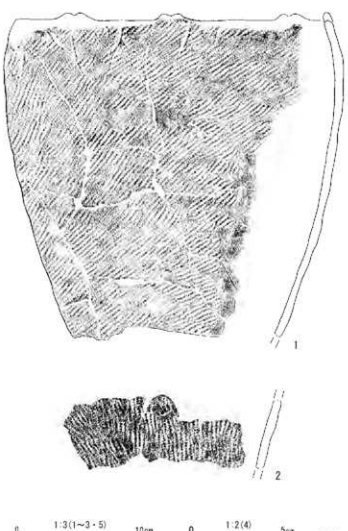
番号	出土地点	層位	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
46-9	第2号竪穴建物跡	床面	削器・掻器	珪質頁岩	44.4	24.7	10.8	12.9	S-2
46-10	第2号竪穴建物跡	床面	削器・掻器	珪質頁岩	25.8	34.8	9.2	7.5	S-3
46-11	第2号竪穴建物跡	1層	磨石	砂岩	158.4	53.5	84.4	915.8	S-5
46-12	第2号竪穴建物跡	1層	敲石	砂岩	123.6	63.2	47.5	612.8	S-4

図46　第2号竪穴住居跡出土遺物



SK09
1層 10YR2/1 黒 色 土 10YR5/6黄褐色浮石（φ1～10mm）2%、
10YR4/6褐色アリスアイ（φ1mm）2%小粒状にあり、
10YR4/4褐色ゴロタ（φ1～3mm）1%、炭化物（φ1mm）1%、

SK10
1層 10YR2/1 黒 色 土 10YR5/6黄褐色浮石（φ1～10mm）2%、
炭化物（φ1mm）1%、



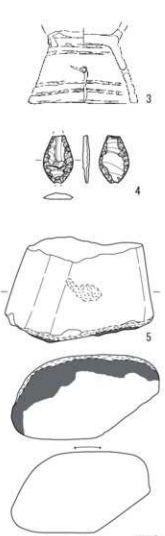
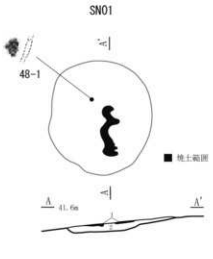
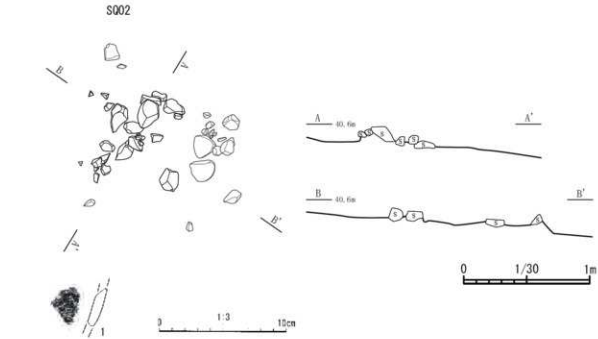


図47　土坑

SP01
1層 10YR3/4　暗褐色土 10YR5/6黄褐色浮石(φ1～2mm)5%、
7.5YR4/4褐色浮石(φ1mm)1%、炭化物(φ1mm)1%。



SN01
1層 7.5YR4/4　褐色焼土 10YR2/3黒褐色土が10%含む。炭化物(φ1～3mm)1%。
2層 10YR2/1　黒 色 土 7.5YR4/4褐色焼土が25%含む。



遺構内出土土器観察表

番号	出土地点	層位	時期	器種	部位	外面特徴	内面特徴	備考
47-1	第９号土坑	1層	縄文	深鉢	口縁～胴部	LR		突起３個、P-1
	第９号土坑	1層						
47-2		覆土	縄文	深鉢	胴部	RL、縦走		P-2
	遺構外	BH-38　Ⅲa層						
	第10号土坑	1層						
47-3	遺構外	BH-37　Ⅲa層、撹乱　縄文		台付鉢	脚部	沈線、補修孔		
		BH-38　Ⅲa層						
48-1	第１号焼土遺構	2層	縄文	深鉢	胴部	無文		P-1

遺構内出土石器観察表

番号	出土地点	層位	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
47-4	第10号土坑	1 層	石鏃	珪質頁岩	25.3	15.9	3.6	1.5	
47-5	第10号土坑	1 層	敲石	砂岩	83.7	117.3	64.2	810.9	

図48　柱穴・焼土跡・集石遺構

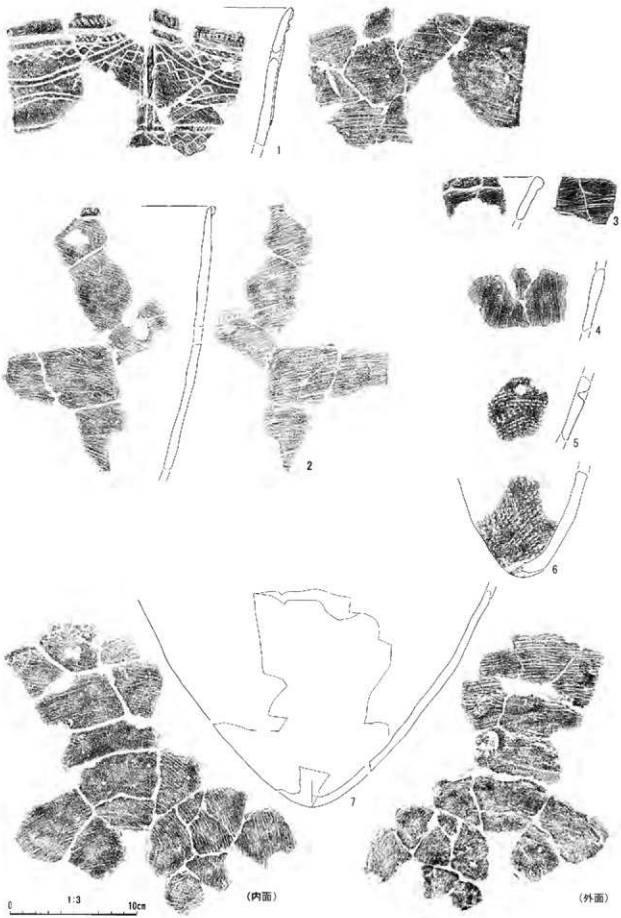


図49　遺構外出土遺物

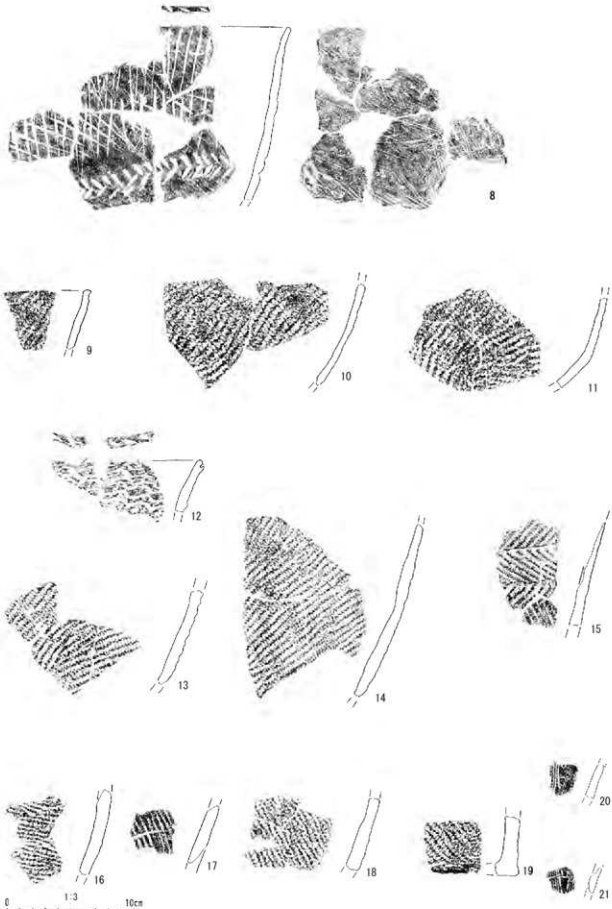


図50　遺構外出土遺物

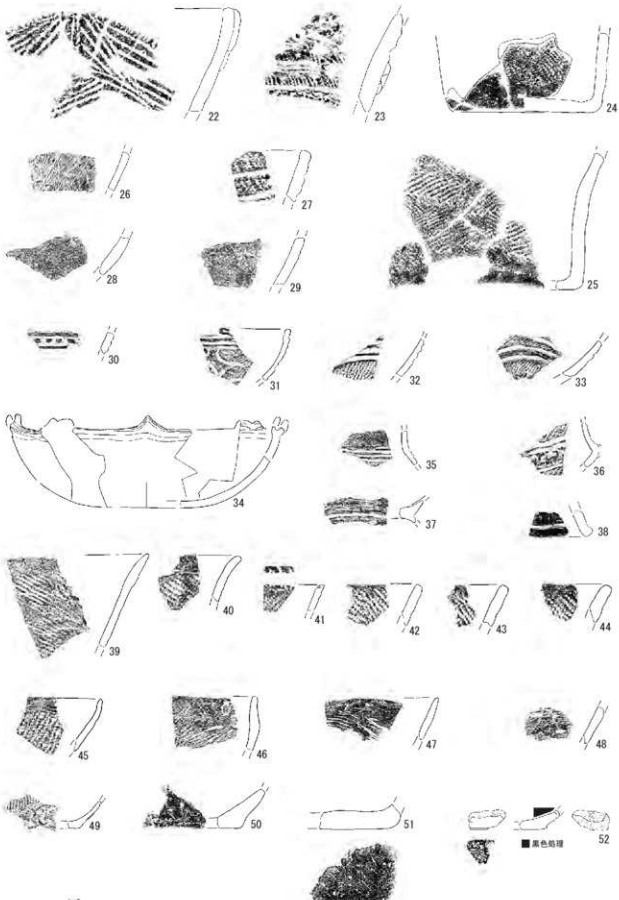

22
23
24
26
27
28
29
25
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
■黒色処理
0
1:3
10cm

図51　遺構外出土遺物

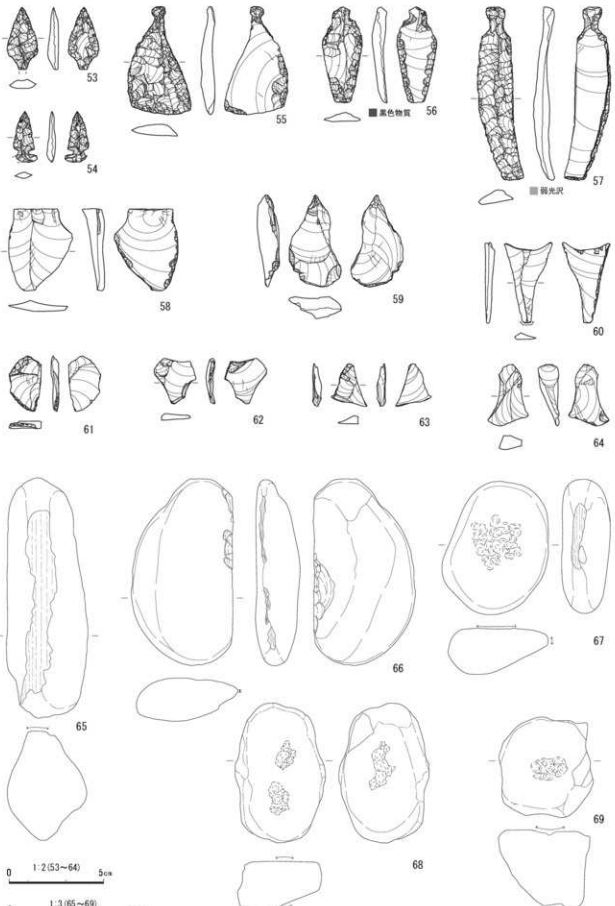

53
54
55
56
■黒色物質
57
■鏡光沢
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
0 1:2(53～64) 5cm
0 1:3(65～69) 10cm

図52　遺構外出土遺物

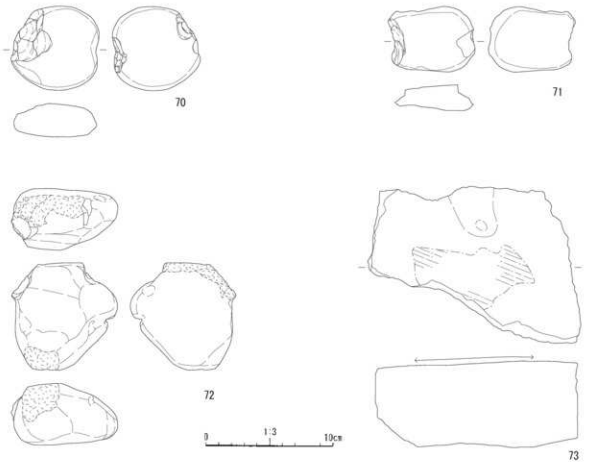


図53　遺構外出土遺物

遺構外出土土器観察表

番号	出土地点	層位	時期	器種	部位	外面特徴	内面特徴	備考
49-1	遺構外	BH-37 Ⅳa層	縄文	深鉢	口縁～胴部	隆帯、沈線、貝殻条痕文 隆帯上に単軸絡条体第1類(d)側面圧痕(斜位)	貝殻条痕文	同45-1と同一個体
49-2	遺構外	BH-38 Ⅳa層	縄文	深鉢	口縁～胴部	隆帯、貝殻条痕文	貝殻条痕文	同49-7と同一個体
49-3	遺構外	BH-38 Ⅳa層	縄文	深鉢	口縁	隆帯、貝殻条痕文	貝殻条痕文	同49-2・7と同一個体か？
49-4	遺構外	BH-38 Ⅳa層 BK-36 Ⅳa層	縄文	深鉢	胴部	ミガキ		
49-5	遺構外	BH-36 Ⅳa層	縄文	深鉢	胴部	貝殻腹縁押引文、補修孔		
49-6	遺構外	BH-37 Ⅳa層	縄文	深鉢	胴部～底部	貝殻腹縁押引文		
49-7	遺構外	BH-38 Ⅲ層・Ⅳa層	縄文	深鉢	胴部～底部	貝殻条痕文	貝殻条痕文	同49-2と同一個体
50-8	遺構外	BG-38 Ⅳa層 BH-38 Ⅳa層、現乱	縄文	深鉢	口縁～胴部	沈線(斜格子状・矢羽状)、口唇刺突	貝殻条痕文	
50-9	遺構外	BH-36 Ⅳa層	縄文	深鉢	口縁	LR		同50-10・11同一個体
50-10	遺構外	BH-36 Ⅳa層	縄文	深鉢	胴部	LR		同50-9・11同一個体
50-11	遺構外	BH-36 Ⅳa層	縄文	深鉢	胴部	LR		同50-9・10同一個体
50-12	遺構外	BH-36-37 Ⅲa層	縄文	深鉢	口縁	結節回転文（RL）、口唇刺突		
50-13	遺構外	BH-36 Ⅲ層・Ⅳa層	縄文	深鉢	胴部	LR		
50-14	遺構外	BH-36 Ⅳa層	縄文	深鉢	胴部	LR		
50-15	遺構外	BH-36 Ⅲa層	縄文	深鉢	胴部	羽状縄文(LR・RL)		金雲母混入
50-16	遺構外	BH-37 Ⅳa層、現乱	縄文	深鉢	胴部	RL		
50-17	遺構外	BG-36 Ⅲa層	縄文	深鉢	胴部	RL		金雲母混入
50-18	遺構外	BH-36-37 Ⅲa層	縄文	深鉢	胴部	RL		同50-19と同一個体
50-19	遺構外	BH-36 Ⅲa層	縄文	深鉢	底部	RL		同50-18と同一個体
50-20	遺構外	BH-37 Ⅲa層	縄文	深鉢	胴部	単軸絡条体第1A類(d)		
50-21	遺構外	BH-37 Ⅲa層	縄文	深鉢	胴部	単軸絡条体第1A類(d)		
51-22	遺構外	BH-36 Ⅲa層、現乱 BH-37 Ⅲa層	縄文	深鉢	口縁～胴部	隆帯、側面圧痕(LR)、隆帯上に側面圧痕(LR)		
51-23	遺構外	BF-37 現乱	縄文	深鉢	口縁～胴部	隆帯、側面圧痕(LR・RL)、隆帯上に側面圧痕(L)		
51-24	遺構外	BH-36 Ⅲa層	縄文	深鉢	胴部～底部	RL		
51-26	遺構外	BJ-38 Ⅲa層	縄文	深鉢	胴部	単軸絡条体5A類(L)		
51-27	遺構外	BG-38 現乱	縄文	深鉢	口縁	沈線、RL		
51-28	遺構外	BI-38 現乱	縄文	深鉢	胴部	無文		
51-29	遺構外	BJ-37 現乱	縄文	深鉢	胴部	無文		
51-25	遺構外	BH-36 Ⅲa層	縄文	深鉢	胴部～底部	結束第1種(LR・RL)		
51-30	遺構外	BI-38 Ⅲa層	縄文	鉢？	胴部	沈線		
51-31	遺構外	BJ-38 Ⅲa層	縄文	鉢？	口縁	沈線、磨消、LR		
51-32	遺構外	BH-38 現乱	縄文	鉢？	胴部	沈線、LR		
51-33	遺構外	BJ-38 Ⅲa層	縄文	鉢？	胴部	沈線、LR		
51-34	遺構外	BH-38 現乱	縄文	鉢	口縁～底部	沈線、口縁突起		
51-35	遺構外	BJ-37 現乱	縄文	壺？	頸部	沈線		
51-36	遺構外	BJ-37 現乱	縄文	壺？	胴部	沈線、LR		
51-37	遺構外	BF-36 現乱	縄文	台付鉢	脚部	沈線		
51-38	遺構外	BJ-37 Ⅲa層	縄文	台付鉢？	脚	沈線		
51-39	遺構外	BH-36 現乱	縄文	深鉢	口縁～胴部	LR縦位		
51-40	遺構外	BH-38 Ⅲa層	縄文	深鉢	口縁	LR横位		
51-41	遺構外	BI-36 現乱	縄文	深鉢？	口縁	LR、口唇刺突		
51-42	遺構外	BI-38 現乱	縄文	深鉢	口縁	LR縦位		
51-43	遺構外	BI-36 Ⅲa層	縄文	深鉢	口縁	LR縦位		
51-44	遺構外	BJ-38 現乱	縄文	深鉢	口縁	LR縦位		
51-45	遺構外	BH-37 Ⅲa層	縄文	深鉢	口縁	RL縦位		
51-46	遺構外	BH-36 Ⅲa層	縄文	深鉢	口縁	LR		
51-47	遺構外	BF-36 現乱	縄文	深鉢？	口縁	無文		
51-48	遺構外	BI-38 現乱	縄文	深鉢	胴部	LR		
51-49	遺構外	BJ-38 現乱	縄文	鉢？	底部	RL縦走		
51-50	遺構外	BF-36 Ⅲa層	縄文	深鉢	底部	無文		
51-51	遺構外	BH-38 現乱	縄文	深鉢	底部	無文		
51-52	遺構外	BH-37 Ⅲa層	土師器	坏	底部	ミガキ、黒色処理		回転糸切

遺構外出土石器観察表

番号	出土地点	層位	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
52-53	BK-39	撹乱	石鏃	珪質頁岩	32.9	16.5	5.8	2.3	
52-54	BH-37	Ⅲa層	石鏃	珪質頁岩	27.0	12.8	4.6	0.9	
52-55	BJ-38	Ⅳa層	石匙	珪質頁岩	57.3	33.7	7.5	11.3	
52-56	BI-36	Ⅳa層	石匙	珪質頁岩	50.9	21.3	8.1	6.0	
52-57	BK-36	Ⅳa層	石匙	珪質頁岩	91.7	24.7	11.4	11.1	
52-58	BH-37	Ⅳa層	削器・掻器	珪質頁岩	43.5	34.0	11.8	9.7	
52-59	BJ-36	Ⅲa層	削器・掻器	珪質頁岩	48.6	27.8	11.8	10.8	
52-60	BI-38	Ⅳa層	削器・掻器	珪質頁岩	42.9	25.5	5.2	2.9	
52-61	BH-38	Ⅳa層	削器・掻器	珪質頁岩	29.5	17.2	4.1	1.9	
52-62	BJ-39	撹乱	削器・掻器	珪質頁岩	24.1	22.4	4.9	1.7	
52-63	BI-37	Ⅳa層	剥片	珪質頁岩	22.6	19.1	4.9	1.3	
52-64	BJ-40	Ⅳa層	剥片	珪質頁岩	32.6	21.5	11.1	4.0	
52-65	BI-39	Ⅳa層	磨石	砂岩	189.7	64.5	86.5	1247.7	側縁
52-66	BG-38	Ⅳa層	磨石	砂岩	147.6	80.6	34.3	543.0	
52-67	BJ-40	Ⅳb層	磨石	砂岩	105.2	84.2	36.6	452.8	側面に敲き
52-68	BG-37	Ⅳa層	凹石	砂岩	110.4	71.4	40.9	468.2	両面
52-69	BG-38	Ⅳa層	凹石	砂岩	79.5	74.5	61.0	392.6	片側
53-70	BI-37	Ⅳa層	石錘	砂岩	66.2	69.4	26.5	168.8	
53-71	BH-38	Ⅳa層	石錘	砂岩	51.7	68.5	20.5	101.9	
53-72	BJ-38	Ⅳa層	敲石	チャート	84.7	83.6	49.0	450.5	両端部
53-73	BK-36	Ⅳb層	石皿・台石	流紋岩	123.9	168.3	68.3	1907.9	

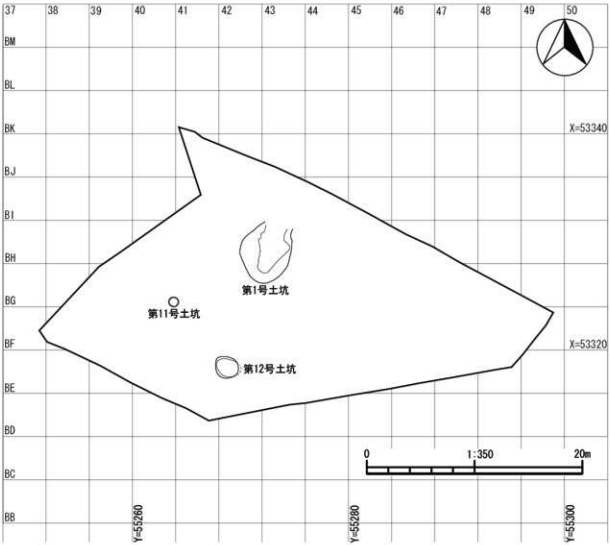


図54　平成26年度 遺構配置図

第２節　平成 26 年度

１　土坑

第１号土坑（図 55・56、写真 43・44）

[位置・確認]調査区西側、BH-43 グリッド及びその周辺に位置しており、Ⅲ層（黒褐色土）で黒色土の広がりとして検出した。本土坑は平成 23 年度に南側を調査しており、今回は北側残存部分の調査であった。北端は調査区際の法面であったことから、未検出である。

[構造]平面形状は不整な円形であり、断面は起伏する底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸 288 ㎝以上・短軸 238 ㎝、底面の規模は長軸 228 ㎝以上・短軸 146 ㎝、深さは 290 ㎝であった。

[堆積土]上位は黒色土を主体としており、下位は壁の崩落によるものか、白色や黄褐色のローム塊がブロック状に堆積している。

[出土遺物]縄文時代後期から晩期と考えられる土器片などが多く出土した。図 56- １・２は後期前葉に位置づけられる十腰内Ⅰ式土器と考えられる。１は鉢・深鉢類の口頸部である。沈線で施文されてお

り、沈線間はLの地文とミガキによる無文帯となっている。2は深鉢の口頸部である。頸部に3条の沈線が横位に施され、沈線間はナデによる無文帯となっている。胴部にはR単軸絡条体が縦方向に施されている。同3は後期後葉と考えられる鉢・深鉢類の上部である。貼瘤が施されており、口縁部と胴部には2段から成る刺突帯が巡っている。刺突帯の間は沈線で施文され、沈線間はRLの地文とナデやミガキによる無文となっている。同4は掻・削器で珪質頁岩を石材としている。同5は磨製石斧の基部で粗粒玄武岩を石材としている。

[小結]詳細は不明であるが、平成23年度の調査で最下層から縄文時代晩期中葉のミニチュア土器が出土していることから、該期に近い時期に廃棄されたことが推測されている。

第11号土坑（図55・56、写真43・44）

[位置・確認]調査区西側、BG-40・41グリッドに位置しており、Ⅳ層（黒褐色土）で黒色土の広がりとして検出した。

[構造]平面形状は円形であり、断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸94・短軸92㎝、深さは24㎝であった。

[堆積土]黒色土を主体に、南部浮石や中掫浮石が混入している。

[出土遺物]底面から安山岩を石材とする台石・石皿類が1点出土した（図56-6）。

[小結]詳細は不明である。

第12号土坑（図55・56、写真43・44）

[位置・確認]調査区南側、BE-41・42グリッドに位置しており、Ⅳ層（黒褐色土）で黒色土の広がりとして検出した。

[構造]平面形状はやや不整な円形であり、断面は開口部より底部が張り出す形状である。検出面の規模は長軸210・短軸200㎝、底面の規模は長軸230・短軸168㎝、深さは206㎝であった。

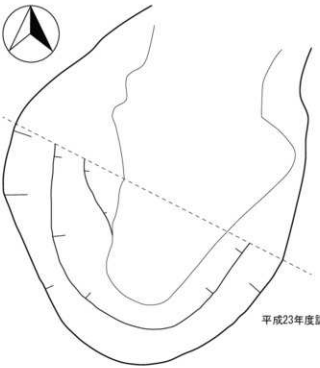
[堆積土]上位は黒色土や黒褐色土、下位は暗褐色土が主体となって堆積し、南部浮石が混入している。

[出土遺物]縄文時代後期初頭から前葉と考えられる土器片などが多く出土した。図56-7・8は後期前葉に位置づけられる十腰内Ⅰ式土器と考えられる。7は鉢・深鉢類の口頸部である。沈線で施文されており、沈線間はミガキによる無文となっている。8は壺・深鉢類の胴部である。条痕と沈線で施文されており、沈線間はミガキによる無文となっている。同9は深鉢の胴部（底部付近）であり、R単軸絡条体第1類が縦方向に施されている。縄文のみの破片であり、詳細な時期は判断し難いが、後期初頭から前葉と考えられる。同10は先頭部と基部が欠損した有茎鏃で玉随質珪質頁岩を石材としている。同11は敲石の破片で頁岩を石材としている。

[小結]詳細は不明である。

2　遺構外出土遺物

出土総数は少なく、段ボール箱1箱に満たない状況であった。遺物の多くは、遺構が検出された調査区西側に散在した状況であったが、調査区東側に残る木の根からも出土している。出土遺物の大半は土器片であり、石器は3点と希少であった。

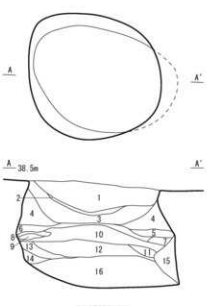


第１号土坑

第11号土坑

第11号土坑

1層　10YR2/1黒色土
10YR3/3暗褐色土3%、
南部浮石1～2mm1%、
中掫浮石1%

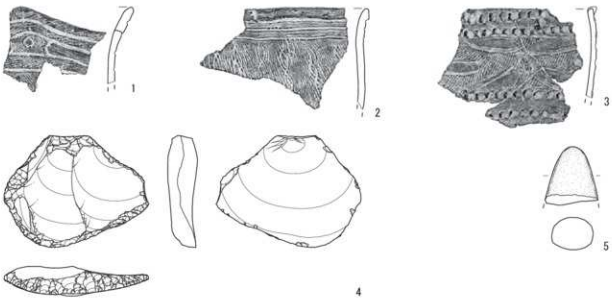


第12号土坑

第12号土坑

1層	10YR2/1黒色土	南部浮石2～5mm2%
2層	10YR2/2黒褐色土	南部浮石1～5mm5%
3層	10YR3/1黒褐色土	南部浮石1～3mm2%
4層	10YR3/3暗褐色土	10YR3/1黒褐色土3%、南部浮石2～5mm2%
5層	10YR3/4暗褐色土	10YR3/2黒褐色土10%、南部浮石1mm1%
6層	10YR3/2黒褐色土	10YR2/1黒色土10%、南部浮石2～4mm1%
7層	10YR4/4褐色土	10YR3/2黒褐色土5%
8層	10YR5/6黄褐色土	10YR3/2黒褐色土7%
9層	10YR7/1灰白色土	10YR5/2灰黄褐色土10%、南部浮石1～3mm1%
10層	10YR3/4暗褐色土	10YR3/1黒褐色土10%
11層	10YR4/2灰黄褐色土	10YR3/1黒褐色土5%
12層	10YR3/3暗褐色土	10YR3/1黒褐色土5%、南部浮石2～5mm3%
13層	10YR4/3にぶい黄褐色土	10YR5/6黄褐色土2%、南部浮石2～4mm1%
14層	10YR6/2灰黄褐色土	10YR4/2灰黄褐色土10%
15層	10YR7/1にぶい黄橙色粘土	10YR3/2黒褐色土10%、10YR4/4褐色土7%、10YR2/1黒色土3%
16層	10YR3/4暗褐色土	南部浮石1～2mm2%

図55　土坑



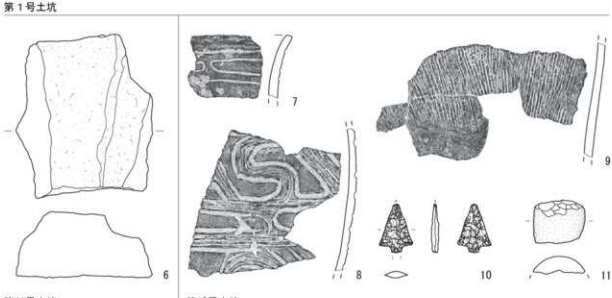


図56　遺構内出土遺物

遺構内出土土器観察表

番号	遺構名	層位	時期	器種	外面特徴	内面特徴	備考
56-1	第1号土坑	覆土	縄文後期前葉	鉢・深鉢類	波状口縁,L横・縦→沈線→ミガキ	ミガキ	
56-2	第1号土坑	覆土	縄文後期前葉	深鉢	ナデ→沈線→R単軸絡条体縦	ミガキ	
56-3	第1号土坑	覆土	縄文後期後葉	鉢・深鉢類	RL縦→沈線→ナデ・ミガキ→刺突→貼付	ミガキ	
56-7	第12号土坑	覆土	縄文後期前葉	鉢・深鉢類	条痕→沈線→ミガキ	ミガキ	
56-8	第12号土坑	覆土	縄文後期前葉	壺・深鉢類	沈線→ミガキ	ミガキ	
56-9	第12号土坑	覆土	縄文後期前半	深鉢	R単軸絡条体1縦,爪付着	ミガキ	

遺構内出土石器観察表

番号	遺構名	層位	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
56-4	第1号土坑	覆土	掻・削器	珪質頁岩	59	75.8	15.6	60.2	
56-5	第1号土坑	覆土	磨製石斧	粗粒玄武岩	(46)	(42)	(32)	(72.5)	刃部欠損
56-6	第11号土坑	底面	台石・石皿類	安山岩	129	108	63	1190.2	
56-10	第12号土坑	覆土	石錘	玉随質珪質頁岩	(25.4)	17.3	3.6	1.2	先頭部・基部欠損
56-11	第12号土坑	覆土	敲石	頁岩	(35)	(41)	(14)	(27.9)	石棒の可能性あり,欠損

土器（図 57、写真 45）

縄文時代後期初頭から前葉と考えられる破片が出土した。

１は縄文時代後期前葉に位置づけられる十腰内Ⅰ式土器と考えられる鉢・深鉢類の上部である。体部上半に沈線で施文されており、文様帯は横位に展開している。沈線間はＬの地文とミガキによる無文となっている。

石器（図 57、写真 45）

剥片石器は石匙、礫石器は敲磨器・石皿が出土した。

２は縦型の石匙で珪質頁岩を石材としている。３は敲磨器で砂岩を石材としている。形状は楕円形で両側面を磨り面としており、正面には敲きの痕跡がみられる。４は石皿で凝灰岩を石材としている。磨り面は楕円形に窪んでおり、縁辺には粗い磨り痕がみられる。

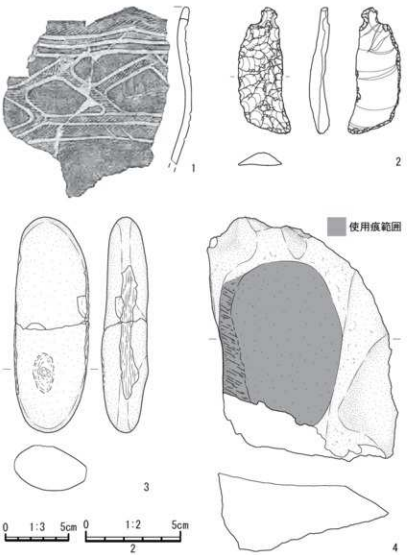


図57　遺構外出土遺物

（野村）

遺構外出土土器観察表

番号	出土地点	層位	時期	器種	外面特徴	内面特徴	備考
57-1	BG-47・48	根	縄文後期前葉	鉢・深鉢類	波状口縁,L横→沈線→ミガキ	ミガキ	

遺構外出土石器観察表

番号	出土地点	層位	器種	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
57-2	BE-41	Ⅳ層	石匙	珪質頁岩	64.7	23.5	8.5	12.1	
57-3	BG-39	Ⅳ層下位	敲磨器	砂岩	170	59	37	499	
57-4	BG-48	根	石皿	凝灰岩	194	151	105	2377.7	

参考文献

青森県教育委員会2014『泊野遺跡Ⅲ　松ヶ崎遺跡Ⅳ　橋館遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第537集

第４章　総括

潟野遺跡は、八戸市の中心部から南へ約３㎞、国道 340 号と県道 138 号（島守八戸線）との間を東西に走る八戸広域農道周辺の新井田川左岸に位置している。

洋野階上道路建設事業に伴う本遺跡の調査は、平成 16･17･22･23･25･26 年に行われた。調査の結果、縄文時代早期から奈良・平安時代にかけての遺構・遺物が確認された。平成 16・17 年度の調査が面的に主体となった調査であり、その成果は既に刊行されている（青森県教育委員会 2006・2007）。平成 22・23・25・26 年度の調査区はＡ～Ｆ区の６区に分けており、平成 22・23 年度はＡ～Ｅ区とＦ区の１部（青森県教育委員会 2014）、平成 25・26 年度は残ったＦ区（本書）を調査し、今回の事業を完了した。

６ヶ年の調査で検出された遺構数は、竪穴住居跡 48 軒、掘立柱建物跡 12 棟、竪穴遺構９基、土坑 82 基、焼土遺構８基、土器埋設遺構２基、石器埋納遺構２基、集石遺構３基、道路跡 13 条、溝跡 13 条、柱穴３基である。

竪穴住居跡は縄文時代のものが 28 軒、奈良時代のものが 13 軒、平安時代のものが７軒検出された。縄文時代のものは、早期３軒（中葉）、前期 17 軒（初頭 11 軒･前葉６軒）、中期４軒、後期４軒（前葉）である。平成 25 年度の調査で検出されたＦ区の第２号竪穴住居跡は、縄文時代早期中葉と考えられる。

掘立柱建物跡は 12 棟検出されたが、平安時代のもの１棟以外は時期不明である。

竪穴遺構は縄文時代のものが１基（前期初頭）、奈良時代のものが３基、平安時代のものが３基、時期不明のものが２基検出された。

土坑は縄文時代のものが 64 基、奈良時代のものが２基、平安時代のものが３基、古代のものが１基、時期不明のものが 12 基である。平成 25・26 年度の調査で検出されたＦ区の第１・９・10 号土坑は縄文時代晩期、第 11 土坑は時期不明、第 12 号土坑は縄文時代後期初頭から前葉以前と考えられる。第１号土坑は平成 23 年度の継続調査である。第９・10 号土坑は土坑墓と推定される。

焼土遺構は縄文時代のものが７基（前期初頭以前１基・前期前葉３基・縄文時代３基）、時期不明のものが１基である。平成 25 年度調査のものは時期不明である。

土器埋設遺構は縄文時代後期と弥生時代のものが検出された。いずれもＦ区からである。

石器埋納遺構は縄文時代前期初頭以前のものと縄文時代のものが検出された。

集石遺構は縄文時代前期のものと時期不明のものが検出された。平成 25 年度調査のものは時期不明である。

道路跡は古代のものが２条のほかは、時期不明のものである。

溝跡及び柱穴は時期不明のものである。

遺物は、縄文時代の土器・石器・土製品・石製品、古代の土師器・須恵器・木製品のほか、微少であるが弥生時代の土器・石器も出土している。平成 25 年度の調査では、第２号竪穴住居跡とその周辺から早期中葉の土器が出土した。特に第２号竪穴住居跡出土の図 45- １はほぼ完形に近い状況に復元できたものである。同時期の土器は平成 16 年度調査の第９号竪穴住居跡及びその周辺からも出土しており、それと比較すると、口唇部形状や、主体となる地文に差異があるものの、口唇端部形状や装飾及び口縁部文様帯の区画方法等が共通しており、「吹切沢式土器における地文などの基本的な（地

味な部分での）属性に、子母口式土器の特徴的で目立つ部分の属性が付け加えられ成立した土器群」（青森県教育委員会 2006）の範疇に収まるものと考えられる。

本遺跡では、平成 17 年度調査報告（青森県教育委員会 2007）での地区割で縄文時代早期はＡ区・Ｆ区、縄文時代前期はＣ区、縄文時代中期はＤ区、縄文時代後期～弥生時代はＦ区、奈良・平安時代はＡ区・Ｂ区（主にＢ区）と地点によって主体となる遺構・遺物の時期が異なり、ほとんど平面的な重複関係がないことが過去の調査で明らかになっており、平成 25・26 年度の調査成果についてもそれを補足・追加するものであった。

（平山）

引用・参考文献

青森県教育委員会　2006『函野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 412 集

青森県教育委員会　2007『函野遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 431 集

青森県教育委員会　2014『函野遺跡Ⅲ　松ヶ崎遺跡Ⅳ　楯館遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 537 集

青森県史編さん考古部会 2013『青森県史　資料編　考古２　縄文後期・晩期』

青森県立郷土館　1975『下田代納屋Ｂ遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館調査報告書第１集　考古１

海峡土器編年研究会　2006『縄文時代早期中葉土器群の再検討』

岡本洋・浅田智晴・加藤隆則・藤根久　2013「古代北奥の漆利用―青森県の漆付着土師器―」
『研究紀要』第 18 号　青森県埋蔵文化財調査センター

秦　昭繁　1991「特殊な剥離技法を持つ東日本の石匙－松原型石匙の分布と制作時期について－」
『考古学雑誌』第 76 巻第４号

領塚　正浩　2008「貝殻・沈線文系土器」『総覧　縄文土器』アム・プロモーション

調査区近景　W →

作業風景　NE →

作業風景　S →

写真 36　平成 25 年度　調査区近景・作業風景

第2号竪穴住居跡遺物出土状況　S →

第2号竪穴住居跡完掘　S →

第2号竪穴住居跡 B-B' セクション　S →

第2号竪穴建物跡 A-A' セクション　SW →

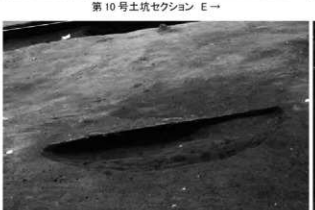
写真 37　平成 25 年度　第2号竪穴住居跡

第9号土坑セクション　E →

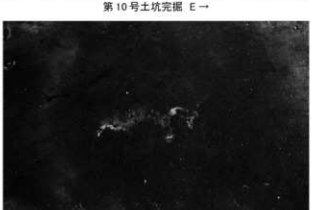
第9号土坑遺物出土状況　NW →

第 10 号土坑セクション　E →

第 10 号土坑完掘　E →



第1号焼土遺構断面　E →



第1号焼土遺構検出状況　E →

第2号集石遺構断面　SW →

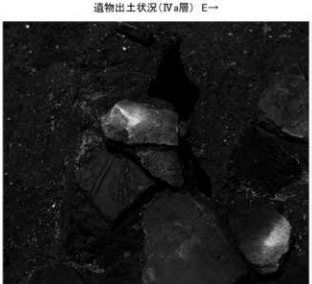
第2号集石遺構検出状況　SW →

写真 38　平成 25 年度　土坑・焼土遺構・集石

遺物出土状況(Ⅳa層) E→

遺物出土状況(Ⅳa層) S→

遺物出土状況(Ⅳa層)BH-36



遺物出土状況(Ⅳa層)BH-36

遺物出土状況(Ⅳa層)

写真39　平成25年度 遺物出土状況

写真 40　平成 25 年度　遺構内出土遺物

写真41　平成25年度　遺構外出土遺物

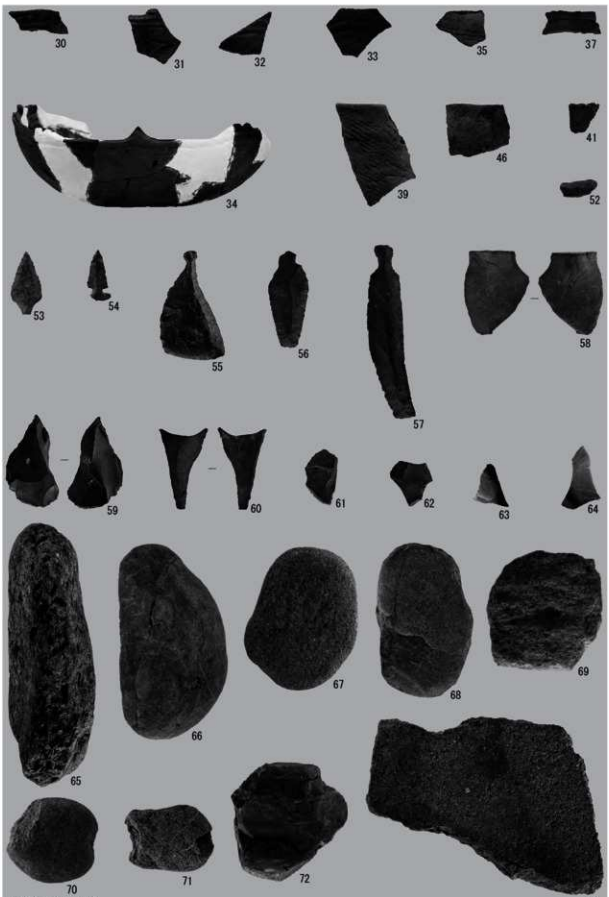


写真 42　平成 25 年度　遺構外出土遺物

調査区近景（北東から）

第 11 号土坑堆積状況（南から）

第 11 号土坑完掘状況（南から）

第 12 号土坑堆積状況（南から）

第 1 号土坑完掘状況（南西から）

写真 43　平成 26 年度　調査区近景・土坑

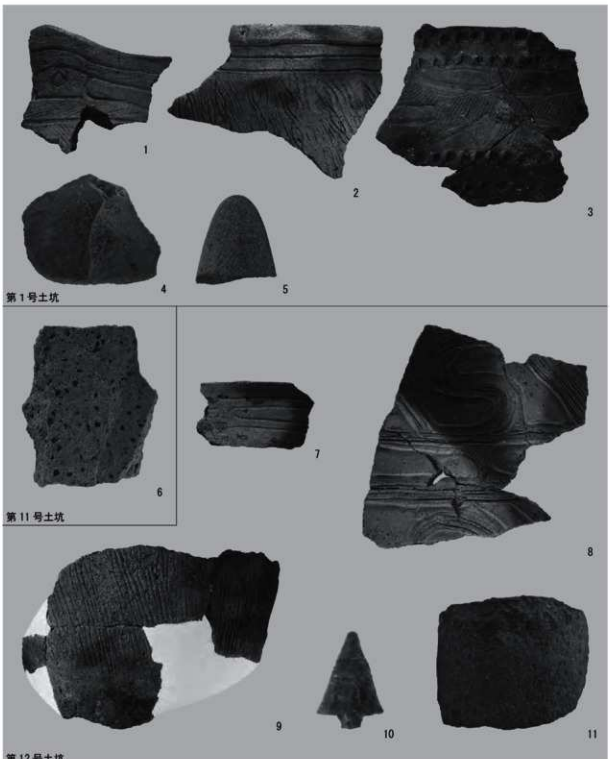


写真44　平成26年度 遺構内出土遺物　1:3(6)　1:1(10･11)　1:2

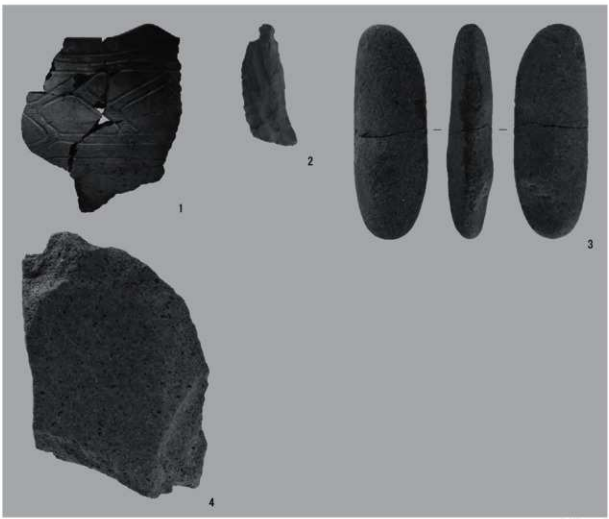


写真 45　平成 26 年度 遺構外出土遺物　1:2(2)　1:3

報告書抄録

ふりがな	やじろうくぼいせきさん　かたのいせきよん
書名	弥次郎窪遺跡Ⅲ　潟野遺跡Ⅳ
副書名	一般国道45号洋野階上道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第561集
編著者名	神康夫　野村信生　平山明寿
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒038-0042　青森県青森市新城字天田内152-15　TEL 017-788-5701　FAX 017-788-5702
発行機関	青森県教育委員会
発行年月日	2016年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	世界測地系(JGD2000) 北緯	世界測地系(JGD2000) 東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
弥次郎窪遺跡	青森県八戸市大字十日市字弥次郎窪	02203	203140	40° 28′ 44″	141° 30′ 36″	20090930 ～ 20091028 20120509 ～ 20120629 20121106 ～ 20121116 20131001 ～ 20131115 20150710 ～ 20150715	6,120	記録保存調査
潟野遺跡	青森県八戸市大字是川字潟野		203242	40° 28′ 45″	141° 29′ 09″	20130522 ～ 20130614 20141125 ～ 20141212	1,070	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
弥次郎窪遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡　2 土坑　55 溝状土坑　4 埋設土器遺構　1 焼土遺構　5	縄文土器（早期～晩期）、弥生土器(前期・後期)、石器、土製品、石製品	
		弥生時代	ピット　27		
潟野遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡　1 土坑　4	縄文土器（早期～晩期）、石器	
		弥生時代		アメリカ式石鏃	
		平安時代		土師器	
		時期不明	土坑　1 焼土遺構　1 柱穴　1 集石遺構　1		

要約

弥次郎窪遺跡は、八戸市の中央部に位置し、新井田川とその支流である松館川の合流地点付近、新井田川右岸の標高20～45mの緩斜面に立地している。今回の調査は、平成８年度調査区の未調査部分と隣接地を対象としており、縄文時代早期から晩期、弥生時代前期・後期の遺構・遺物が検出された。

潟野遺跡は八戸市の中心部から南方約３㎞に位置し、新井田川左岸の標高27～76mの緩斜面地に立地している。今回の調査は、平成23年度調査区の未調査部分を対象としており、縄文時代早期から晩期の遺構・遺物等が検出された。

青森県埋蔵文化財調査報告書　第561集

弥次郎窪遺跡Ⅲ
潟野遺跡Ⅳ

－一般国道45号洋野階上道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－

発行年月日　2016年3月25日
発　　行　青森県教育委員会
編　　集　青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森県青森市新城字天田内152-15
TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702
印　　刷　株式会社 誠 工 社
〒030-0113 青森市第二問屋町三丁目3－18
TEL 017-729-1611 FAX 017-729-1188